

シリーズ「わがまち」

# 我ハ、 しゃくじん (石神)デアル



志茂井真泉

我ハ、しゃくじん（石神）デアル

志茂井真泉

Rev.4:May.2.2013

1985年の春を迎えた東京都北区堀船町の梶原銀座商店街の朝は明るい日差しに溢れていた。堀船町には、荒川区三ノ輪橋から新宿区早稲田までを結ぶ都電荒川線が通り、堀船町に残る梶原塚に由来する「梶原」という停留所が梶原銀座商店街の入り口である。

この町に住む今泉仁（いまいずみ・じん）は、この春、高校2年生になり、今日4月8日は、春休み明けの初登校日だったが、本人は相変わらずの針のむしろのような生活の中で、1人閉じこもる日々が続くものと思っていた。

仁が商店街を通り、都電の梶原駅へ向かう途中で、後ろから自転車に乗って追いかけてきたセーラー服でショートヘアの女の子が、仁の丸坊主の頭をピシヤリとたたいて、「仁くん、おはよう！」と声をかけながら通り過ぎて行った。女の子の名はアスナという。アスナは、そばかすがチャームポイントと言ってはばからない、活発で、運動神経が抜群の女の子だ。仁と同年で、幼馴染みで、家も隣同士だ。

仁の家は、商店街の通りを抜けた先の南北に走る道の西側にあった。仁の家は、南側のアスナの家と、北側の町工場の間にはさまれた間口6メートル半で奥に細長く伸びた土地の木造2階建ての家だった。仁の家の1階は、玄関を入ると、浴室、洗面、トイレ、階段、居間が並び、居間の奥におじいちゃんとおばあちゃんがいた和室と台所があった。2階には、手前に仁の部屋と奥に両親の部屋が並んでいた。仁の家の南側には、アスナの家との間に幅が3メートル、奥行きが10メートルほどの庭があり、おじいちゃんとおばあちゃんが丹精込めて手入れをしていた。仁の両親は、商店街の寿司屋で朝から夜まで働いていたから、仁はおじいちゃんとおばあちゃんに育てられたのも同然だった。また、仁の家では柴犬を飼っていて、仁は小さい頃からどんな犬にも好かれた。

アスナの家は、父親が柔道の達人で、自宅で道場を開いていた。母親はフリーランスのライターをしていて家にいないことが多かった。アスナの家は、1階が道場で、2階の南側に手前から勉強部屋、居間、奥に母親の仕事部屋が並び、北側に手前からアスナの部屋、キッチン、奥に両親の部屋が並んでいた。

仁の家の北側の町工場は、駐車場にクレーン付きのトラックが停めてあり、スレート葺きの工場からは1日中、ガツチャンガツチャンと機械の音が響いていた。

仁とアスナには、もう1人幼馴染みがいて、名は雄一という。雄一の家は、堀船町の外れにあって、両親のほかに病気がちの祖父母も一緒に住んでいた。雄一は、小学1年

生の時からアスナの家の道場に通っていた。

仁とアスナと雄一の3人は、ともに一人っ子だったこともあり、いつも兄弟のように一緒に遊んだ。遊び場は、仁の家のときもあれば、堀船公園や白山神社の境内でもよく遊んだ。3人は、小学1、2年生は同じクラスで、3、4年生は別々のクラスで、5、6年生は再び同じクラスになった。仁は、運動は不得意だったが本をよく読んで物知りだった。アスナは、男勝りのおてんばだった。雄一は、勉強もスポーツもよくできる優等生だった。商店街は3のつく日に縁日があり、3人で綿アメをなめながら、金魚すくい、射的、カルメ焼きなど、縁日の端から端まで楽しみながら歩いたものだった。

関東に広がる武蔵野台地の東端に、飛鳥山から上野の山に続く高台の上野台地があり、上野台地の東側は、隅田川の氾濫原の低地帯である。隅田川はこの低地帯を蛇行しながら南下して東京湾に注ぐ。堀船町は、この低地帯にある下町であり、武蔵野三大湧水地の1つである三宝寺池を水源とする石神井川（しゃくじいがわ）が、武蔵野台地を流れ、上野台地を削り溪谷を作って下り、隅田川に合流する地点である。堀船町は、明治時代以降、隅田川の水上交通を利用した工場が次々に建設されたことによって発展し、工場で働く人々が住みはじめ、梶原商店街は大きくなった。

堀船町の町名は、江戸時代からあった梶原堀之内村と船方村が昭和7年に統合されたときに、梶原堀之内の「堀」と、船方の「船」を合わせて、「堀船（ほりふな）」としたことによる。梶原堀之内村とは、梶原氏という氏族の城館を中心とした村という意味であり、梶原氏の城館跡に梶原政景という戦国武将の墳墓である梶原塚があった。梶原塚は、江戸時代の隅田川の氾濫の際に一部が流されたため、梶原堀之内村の鎮守であった白山神社の別当寺である福性寺に移され今も残る。一方、船方とは船乗りのことであり、船方村は古くから水上交通の要所であった隅田川の船乗りが住んだ村である。船方村の鎮守である船方神社も今に残る。

およそ16000年前に縄文時代が始まったが、それ以前の氷河期の時代は海面が現在より100メートル近くも低く、東京湾は陸地（盆地）であったため、多摩川、荒川、隅田川、利根川などの大きな川が東京湾の盆地で合流し（利根川は、江戸時代に行われた利根川東遷移事業以前は東京湾に注いでいた）、古東京川と呼ばれる大河となって太平洋に注いでいた。現在も東京湾の海底には古東京川の流れがえぐった川筋跡が残る。武蔵野台地の元は、縄文時代以前にできた多摩川の巨大な扇状地であり、武蔵野台地には、富士山の火山灰から成る関東ローム層が、数メートルから10数メートルの厚さで積もっている。

縄文時代に、温暖化による海水面の上昇（縄文海進と呼ばれる）が起こり、6000年前は関東平野の一部が海底に沈んだ。東京湾の奥に奥東京湾と呼ばれる広大な海ができ、霞ヶ浦あたりには広大な香取海ができた。東京湾、奥東京湾、香取海の周囲からはたくさんの縄文貝塚が見つかっていて、海岸線が関東平野の奥まで広がっていたことがわかる。堀船町周辺では、高台の上野台地から中里貝塚（北区上中里）や西ヶ原貝塚（北区西ヶ原昌林寺境内）が見つかっていて、その辺りに海岸線があり、低地帯の堀船町は奥東京湾の海底だった。



その頃、魂だけで存在する種族が、天から初めて関東地方に降臨し、上野台地の海岸線にあった青く四角い石に宿った。その青い石に宿った魂は、当時の縄文人と交信し、その神通力により石の神として祀られ、石神（しゃくじん）と呼ばれた。石神は、縄文人が恐れた洪水、地震、噴火などの天変地異を予知する力を持っていた。また、人間の中には魂（の一部）を体外に離脱する能力をもつ者がまれに存在しているが、石神は、そうした人間とだけ交信することができたのだった。その青い石に宿る石神は、およそ1000年を経て天に帰還し、新しい石神が天から降臨して交代した。その後も、およそ1000年ごとに石神の交代は続き、現在に至っている。

全国で約2300ヶ所の縄文貝塚が見つかっていて、関東地方に約1000ヶ所があり、東京湾、奥東京湾、香取湾周辺に約600ヶ所が集中している。このように関東の縄文人が他の地域に比べて、より繁栄した理由には諸説があるが、後に述べる現在の石神の言によれば、関東の縄文人は、当時青い石に宿った石神との交信により、天変地異を予知し得たから繁栄できたのだという。

奈良に朝廷があった飛鳥時代、土着豪族の国造（くにのみやつこ）が治める地域や、県主（あがたぬし）が治める地域が各地に散在していたが、701年、大宝律令が制定され、朝廷は令制国と国府を定め、国司を派遣して治めさせることにした。関東では令制国の1つとして武蔵国（現在の埼玉県、東京都、神奈川県東部）が定められたが、当時の日本の中心地は関西に移っていて、武蔵国は都から遠く離れた「へき地」となっていた。武蔵国の領地は、无邪志（むざし）国造の領地と、知知夫（ちちぶ）国造の領地を合わせたものとされる。

多摩川のほとり武蔵国多摩郡（現在の東京都府中市）に、111年に創建されたという大國魂神社があり、代々の无邪志国造が祭務を行なったとされる。武蔵国の国府は府中に定められ、703年、武蔵国の国司が都から赴任してきた。国司の着任後の最初の仕事は赴任した国の全ての神社を巡って参拝することであったが、その国の全ての神社の神様を合祀する「総社」を定め、そこに詣でることによって神社の巡回を省くことが広まり、大國魂神社が武蔵国の総社とされた。

京都に朝廷が移った平安時代（およそ1000年前）に、武蔵国を事実上治めていたのは秩父氏という開発領主であった。秩父氏の一族には、男衾郡畠山郷（現在の埼玉県大里郡寄居町）を拠点に荒川上流を治めた畠山氏、入間郡河越（現在の川越市）を拠点に入間川流域を治めた河越氏、下総国葛飾郡葛西（現在の葛飾区）を拠点に利根川下流域を治めた葛西氏、江戸（現在の千代田区）を拠点に江戸湊と浅草を治めた江戸氏、橘樹郡稲毛荘（現在の川崎市登戸付近）を拠点に多摩川下流域を治めた稲毛氏、そして、堀船町のある武蔵国豊島郡では豊島（現在の北区豊島町）、石神井（現在の練馬区石神井台）、平塚（現在の北区上中里）などに拠点を置き、隅田川と石神井川の流域を治めた豊島氏がいた。

豊島氏の一族には、練馬（現在の練馬区）に拠点を置いた練馬氏、板橋（現在の板橋区）に拠点を置いた板橋氏、赤塚（現在の板橋区赤塚）に拠点を置いた赤塚氏、志村（現在の板橋区志村）に拠点を置いた志村氏、滝野川（現在の北区滝野川町）に拠点を置いた滝野川氏、足立郡宮城堀之内（現在の足立区宮城町・堀之内町）に拠点を置いた宮城氏などがいた。

秩父氏の一族は、入間川、荒川、隅田川、利根川、多摩川など関東の川筋の地域に勢力を伸ばし、「川筋族」とでも言うべき特徴を持った開発領主であった。川筋の土地は、魚介類が取れ、生活用水に困らず、水運に便利、防衛線になるなど、利点も多いが、毎年洪水に見舞われるという難点もあった。殊に、関東平野の川筋の土地は、山間部とは異なり、洪水のたびに川筋が大きく変わる氾濫原となっており、当時は住むにも耕作にも適さない土地とされていた。しかし、秩父氏の一族は、そうした川筋の土地に根付いて開発し、武蔵国を繁栄する国に変えていった。後に武蔵平一揆の乱（1368年）にて

室町幕府配下の鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏の大軍に敗れるまでの約350年にわたり、周囲に武力でまさる列強氏族がいたにもかかわらず、武蔵国を治め続けた（後の徳川氏よりも長い）。それは、秩父氏の一族が武力だけでなく、川筋の土地の「治水技術」を兼ね備えた氏族だったからだと言われるが、後に述べる現在の石神の言によれば、秩父氏一族の豊島氏は、平塚の地に石神の宿る青い石を祀り、石神との交信によって得た天変地異の予知情報を大いに利用したのだという。また、豊島氏は、1000年ごとに行なわれる石神の交代の儀式を盛大に執り行ったのだという。

豊島氏は、武蔵平一揆の乱で秩父氏一族が崩壊した後も関東管領上杉氏の家臣として生き残り、豊島郡を治めた。武蔵平一揆の乱の約10年後の1380年頃、鎌倉公方足利氏の家臣で梶原道景という武将が堀船町あたりに移り住み、梶原堀之内村と呼ばれることになる。それから約100年後の1476年、上杉氏家臣の長尾景春が起こした長尾景春の乱において、豊島氏は、長尾景春に加担し、1478年、上杉氏家臣の太田道灌に敗れ、ここに450余年の歴史を営んだ豊島氏はついに滅亡した。それから更に約100年後の1590年、徳川家康は、太田道灌が築いた江戸城に入り、関東で続いていた戦乱の時代は終息した。しかし、関東の戦乱の時代に、石神の宿った青い石は行方知れずとなり、石神の伝説を伝える者は誰もいなくなっていた。



## 1985年

---

1985年は、日本の経済成長の最盛期であった。働く人の給料は上がり続け、団塊世代を中心とした大人たちは一億総中流社会を謳歌し、現在の延長線上に未来社会があると信じていた。一方、彼らの子供世代は学生時代を迎えていたが、彼らの現実、大人たちが経験した学生時代とは異なるものだった。団塊世代の学生時代は、皆が似たような境遇（例えば、貧乏人の子沢山の子）の集団の中で、競争社会を生き抜いていく準備をすることができた。しかし、子供世代の学生時代は、皆が違う境遇や個性を際立たせ、競争社会への準備をする前に、いきなり受験競争、就職競争の中に放り込まれた。そして、団塊世代の学生時代には与えられなかった文明の恩恵（マイルーム、マイテレビ、マイコンピューターなど）が、子供世代に与えられたとは言え、彼らは自力で競争を生き抜くことが求められた。大人たちが経験してきた過去と子供たちが向かい合う現実とが分断されはじめた時代。大人たちが期待する未来と子供たちが迎える未来とが分断されはじめた時代。それが1985年だった。

### 3人の一人っ子

---

仁が物心ついた頃、仁のまわりは仁をよく知る優しい人たちばかりだった。何をやっても、「よくできた」と誉められこそ、「こんなこともできないのか」と現在のように責められたりはしなかった。

仁が小学6年生のときに、先ず愛犬が亡くなった。それからおばあちゃんが亡くなり、続けざまにおじいちゃんも亡くなった。また、幼馴染みの雄一が、祖父母を残し、両親とともに九州に引っ越して行った。それからというもの、仁のまわりは一変してしまった。それ以来、苦手だった友達ばかりが近付いてくると仁は感じた。友達も先生も両親もみんな仁を責める側に回ったと感じた。それは、遊び場でも、学校でも、家でも同じだと仁は感じた。仁はたった1人で自分を守らなくてはならなくなったと感じた。仁が初めて自分を守るために取った行動は黙りこむことだったが、それでもだめなら泣くしかなかった。仁は、責められると泣いてしまう泣き虫っ子になった。

仁は、中学校に入ると「オジン」という馬鹿にしたようなあだ名で呼ばれるようになった。それは、名前が「じん」ということ、運動神経が悪く動作がスローモーションなこと、寡黙なこと、頭が丸坊主なこと、年寄り臭いこと（時代劇、植木、庭石に詳しい）など……。要は、おじいさんみたいだったからだ。仁が年寄り臭いのは、おじいちゃんとおばあちゃんの影響があったのかも知れない。雄一が去り、仁の唯一の幼馴染みであるアスナは、それでもオジンとは呼ばずに、以前と同じように「仁くん」と呼んだ。また、アスナは、むやみに仁を責めたりもしなかった。それがせめてもの救いだった。

仁が中学1年生のときに、仁にとっては思い出したくないソフトボール事件があり、仁は泣き虫っ子を止めて、嘘つきっ子になった。それは、学校行事で親睦のために行われたソフトボールの試合で、運動神経に恵まれなかった仁はエラーを繰り返して、仁が参加したチームの足を大きく引っ張った。チームメイトは、仁こそが敗因の全てであるかのように、仁をみんなで責めた。仁は勝敗だけが全てじゃないだろうと言いたかったが言えなかった。そんなときの仁は、今までならば泣き虫っ子になって、みんなに愛想尽かしてもらうか、あるいは、あきらめて許してもらうのが常であった。しかし、泣き虫っ子を演じることは、中学生にもなって自分でも嫌でしかなかったから、仁は意を決して、嘘つきっ子になることにした。

「足が痛かったんだ。昨日、多分足を捻挫したんだ」

とか出まかせを言った。すると、誰かが、

「嘘をつくな、今朝は遅刻しそうになって走ってたじゃないか」

と言った。

「いや、あの時は痛いのを我慢して必死に走ったんだ」

と仁はまた嘘をついた。すると、別の誰かが体育教師で担任の中村先生を呼び、仁の足が捻挫らしいから、嘘か本当か調べてくれと言った。この中村という担任がまた仁にとっては鬱陶しくて、仁は完全に苦手としていた。中村先生は、仁を保健室に連れて行き、一応は捻挫かどうか調べた。仁は、中村先生が足を触るたびに、「痛い、痛い」とわめいてみせたが、すぐに嘘だとばれてしまった。中村先生は仁を尋問した。

「なぜ、嘘をつくんだ？」

仁は、もう泣いて誤魔化すことは止めたんだ。1人で自分を守るためには嘘をつくのはしょうがないんだと考えていた。すると、

「いいか、嘘をつくのが良くないってことは、もう中学生なんだから知っているだろ」

と中村先生は言った。仁は、中村先生は僕のことを何も分かつちやいないと思ったが、気持ちとはうらはらに中村先生にうなずいた。

「それじゃ、反省文を明日までに書いてこい」

と中村先生は言った。

仁は反省文に、「嘘をつくのは悪かったです。反省して今後は嘘をつきません」と嘘を書いた。

しかし、仁はたびたび「嘘つき事件」を起こした。その度に、仁は中村先生と同じようなやり取りを繰り返した。すると、中村先生はとうとう諦めたらしく、その後は、「またか、いい加減にしろよ」

で尋問は終わった。その代わり、2学期の通知表に、「嘘をつく癖があるから、家庭でのしつけをお願いします」と書いてきた。

仁の父親も、母親も、通知表を見て、たいそう心配して仁に訳を聞いた。仁は、「あの担任の先生がおかしい。何か誤解している。先生に説明して3学期の通知表には書かれないようにする」

とまた嘘を言った。

仁の両親は、仁の説明に納得はできなかったが、さりとてどう対処すればいいか思い付かなかった。仁の父親が自分の子供時分を思い出してみると、父親がいつも目を光らせていて、嘘をつこうものならこっぴどく叱られたし、父親に運よく見つからなかった

としても兄弟の誰かに見つかって、結局は叱られただろうと思った。しかし、仁の父親も母親も忙しくて、仁に目を光らせることはとてもできなかった。それに仁は一人っ子だから、仁の父親の子供時代のように両親の代わりに目を配る兄弟もいないのだ。

仁は、次には嘘をつくのを止めて、敢えて1人で閉じこもることにした。人とかかわると、何があろうと結局は嘘をつくはめに陥り、嘘をつきはじめると、嘘が嘘を呼んでとめどがなくなった。それに対して、1人で閉じこもることは、仁にとって苦痛でも何でもなかった。仁には自分の部屋があり、自分のテレビと自分のビデオデッキがあった。自分の本、まんが、そして自由に使える小遣いがあり、何よりも自分の時間があつた。果たして、3学期の通知表には、嘘つきとは書かれなかったが、「1人で閉じこもりがちで心配だから、家庭でも閉じこもらないようにしてほしい」とあつた。

仁の両親は、通知表を見て、またもや頭を悩ませてしまった。仁の父親は、自分の子供時代は子沢山の家ばかりで、子供の部屋などなく、閉じこもるのはほぼ不可能だったと思った。仁の両親は、自分たちの子供が向かい合う現実に対処するのに、自分たちの過去の経験が通用しないことに気付いて愕然とした。

仁が中学2年生のときに、年をとった寿司屋の親方が買出しに行けなくなり、仁の父親が代わりに買出しをすることになって、おじいちゃんとおばあちゃんが丹精込めて手入れした庭の半分が駐車場に作り変えられた。駐車場には「泉寿司」と書いた白い軽のワンボックスカーが停められた。庭の奥にはおじいちゃんとおばあちゃんが、植木や庭石を運ぶのに使った古びたリヤカーが、当時のままに立て掛けられてあつた。わずかに残った庭には、駐車場になった場所にあつた大きな庭石がいくつか転がっていた。仁は、それを見ると、小学5年生の頃から反抗期になって、おじいちゃんとおばあちゃんにも反抗したことを思い出し、密かに後悔した。

そして、庭に洗濯物を干す場所が足りなくなったので、駐車場の上に木製の物干し場が作られた。それは2階の東側の仁の部屋とつながっていた。仁の家の物干し場は、アスナの家の敷地のすれすれにまで近付いていて、そこがちょうどアスナの部屋になっていた。アスナが部屋の窓を開けると、約70センチ位のところに仁の家の物干し場がきた。運動神経が抜群のアスナは、易々とアスナの部屋の窓から物干し場の手摺りに飛び移ったり、また逆に物干し場の手摺りからアスナの部屋の窓に飛び移った。仁もアスナにそそのかされてやってみようとしたが、手摺りに立って下を見ると足がすくんで動けなかった。そういうわけで、物干し場ができてから、アスナは時々、仁の家の玄関を通らずに仁の部屋にやってきた。それは多分、仁が閉じこもりがちになったから、アスナ

が幼馴染みのよしみで心配してくれたからかも知れない。とにかく、アスナがやってくると安普請の物干し場は、ドスン（アスナが手摺りから飛び降りた音）、ミシミシ（アスナが歩いている音）と、大きな音がするので、アスナがやってくるのがすぐに分かるという具合だった。

仁が中学3年生のある日、幼馴染みの雄一がひょっこりこの町に戻って来て、仁と同じ中学校に通うようになった。実は、雄一の父親だけは戻っては来なかったのだが、雄一はそれを誰にも言わなかった。戻って来た雄一は、いつの間にか仁の味方から、仁を責める側に変わったと仁は思った。しかし、雄一の方は、仁の方こそ情けない奴に変わったと思った。仁はやればできるはずなのに、自分勝手に自分の殻に閉じこもるから。雄一は、仁の自分勝手な閉じこもりを正そうと世話をやいた。雄一は、仁をオジンとは呼ばなかったが、自分から頑張ろうとしない仁を責めた。曰く、

「仁はオレと同じように頑張れるはずだ」と。

しかし、仁は思った。雄一は僕とは違う。まず、雄一は頭も運動神経がいいから、なかなか失敗しない。もしも失敗したとしても、雄一が謝れば誰も雄一を責められない。なぜなら、雄一ができないならば誰にもできないのだから。しかし、僕が失敗すると誰もが僕を責める。だから、僕は一生懸命言い訳をするしかなくなるのだ。それでもまだ責める奴がいると、僕は止むに止まれず嘘をついたが、嘘をつくのが嫌になったから、僕はバリアーを張って自分の殻に閉じこもることにしたのだ。

雄一は何でも頑張るし、みんなが嫌がることにも率先して取り組むような優等生だったが、仁には、そういう雄一が鬱陶しくてかなわなかった。放っと思ってくれと思った。仁は雄一が何より苦手になった。意地悪な奴だと誤解して距離をおいた。

そして、アスナも雄一と同じように、仁に、閉じこもりからの脱出を勧めたが、仁は脱出する気は毛頭なかった。しかし、仁はアスナに対してだけは、人との係わり合いを避けるための心のバリアーを解くことがたまにあった。それは仁にとってアスナが聖母のように優しいことがたまにあったからだ。

仁の両親は、閉じこもりがちで成績も芳しくなかった仁に、中学を卒業したら両親のいる寿司屋で働けといった。仁の父親も中学を卒業してすぐに寿司屋で働きだしたのだ。また、同じ店ならば、仁に目を配ることもできると考えたのだ。しかし、仁は、それに逆らい、都立の工業高校を受験し、かろうじて合格した。

一方、雄一は、祖父母が病気がちで家計が苦しかったため、大学への進学校を受験

せず、仁と同じ都立の工業高校を受験して易々と合格した。

また、アスナは、中学での成績は芳しくはなかったが、スポーツ特待生として私立高校に入った。アスナは母親がやっているライターという仕事に憧れ、高校の新聞部に入り、その後はスポーツよりも近所の催しなどを取材して学校新聞に記事を書けることに励んだ。

高校生生活が始まって、仁は相変わらず閉じこもり気味だった。仁は両親のいる寿司屋には決して近寄らなかったが、アスナは記事のネタ探しを兼ねて、ときたま寿司屋を手伝うようになった。アスナは明るい性格で健康的な美人だったから寿司屋の常連さんたちに歓迎された。ある日、アスナが手伝いに行ったとき、仁の両親から、仁をいろいろな場面に連れ出してほしいと頼まれた。

アスナは、雄一に仁を連れ出す相談をした。雄一も仁が閉じこもりがちなのをなんとかしたいと思っていたから、雄一はアスナに尋ねた。

「あいつは閉じこもって何をしているんだ？」

「庭の手入れと、最近はファミリーコンピュータにハマっていると思う」

「庭の手入れ？ オジンだなあ、それとファミリーコンピュータかあ、聞いたことがある」

アスナも雄一もファミリーコンピュータは持ってはいなかった。

「あいつんちは金持ちだなあ」

「お小遣いを貯めてやっと買ったって言ってたけど」

「そうだ、コンピュータか！ それがいい」

雄一は、当時流行り始めたパーソナルコンピュータを学校に買わせて、コンピュータクラブを作ることを思い付いた。仁が、コンピュータゲームを好きなのだったら、1人で部屋にこもらずに、学校のクラブ活動でみんなとやればいいと思ったのだ。

アスナも、

「それはいいことを思い付いたわね」

と大賛成した。そして、

「アタシも何か考えなきゃ」

「おい、まずは、オレの考えでやろうぜ」

「そうだけど、アタシもいいこと思い付きたいの！」

アスナは一旦言い出したらきかない。雄一が、

「しばらく、アスナは記事でも書いてなって」



と言うと、  
「あっ、そうだ。それぞれ。お手柄犬の取材に連れて行こうっと」  
「何それ、それもオレのアイディアじゃないか」  
「いいえ、お手柄犬を思い付いたのはアタシよ。雄一くん、ありがとう」  
こう言われると雄一は何も言えなかった。

雄一が、仁にコンピュータークラブと一緒にやろうと誘うと、仁は雄一が鬱陶しいと思ったが、コンピューターでゲームをしていれば気にすることはないと考えて賛成した。そこで雄一が学校に申し入れると、そんな予算はないし、学校でゲーム遊びはダメだと言われてしまった。さらに、仁がやりたくないと言い出した。仁は、また雄一にいいところを見せられて、自分はヘマをするはめになると思ったのだ。雄一も仁も学校の先生も、パーソナルコンピューターの使い道としてゲーム遊びしか思い付かなかったのだ。結局、雄一の名案はボツになった。

アスナの言うお手柄犬というのは、泥棒を捕まえたということで先日新聞に載った犬のことだった。お手柄犬は堀船町の隣の滝野川にいるから、学校新聞に載せる記事を書くため、仁を連れて取材に行くことにしたのだ。アスナは犬が苦手だから、犬が好きな仁と一緒に来てほしいと頼んだのだ。仁は案の定、嫌だと言ったが、  
「あら、アタシが犬に噛みつかれてもいいの」  
「そういうわけじゃないけど」  
「じゃ、いいのね。仁くん、ありがとう。今度の土曜日よ」  
仁は、アスナに逆らうのは無理だと改めて知るのだった。

滝野川は、高台の上野台地にある。西から流れてきた石神井川が上野台地を削り、渓谷となって流れ、滝がたくさんあったということからその名がついた。石神井川は、上野台地を下り低地帯の堀船町周辺にくと音無川とも呼ばれ、堀船町で隅田川に合流する。

アスナと仁は、滝野川に行ってお手柄犬の飼い主の老夫婦に会うことができ、アスナは手作りの名刺を飼い主のご主人に手渡した。お手柄犬は、最近知り合いからもらってきた犬だったが、今はどこかに逃げてしまったと言う。あの犬は外につなぐとうるさく吠えるし、家に入れると吠えなくなるが、ウンチとオシッコが臭くて実は困っていたところだと言う。お手柄犬ということで有名になってしまったから、今更保健所には連れていけないし、と思っていたらちょうど逃げてしまったと言う。仁は、愛情なく犬を飼

うなと腹がたった。飼い主は、逃げられて良かった、探さないでくれと言う。お手柄犬の写真も取れず、記事にもならず2人は帰ってきた。

ところが数日後、逃げた犬が見つかったと飼い主からアスナに電話があった。アスナは、仁にまた取材に行こうと誘ったが、仁は飼い主が気に入らないとまだ怒っていた。そこで、アスナだけで飼い主に会いに行くと、飼い主は、逃げた犬が帰ってきて、かわいくて仕方ないと思うようになったと言う。だから手放せなくなったとアスナに言った。アスナが仁に取材内容を報告すると、仁は人にかかわるとろくでもないから気をつけろと言った。アスナは、この顛末は美談だから学校新聞の記事になると言った。しかし、仁は、あの飼い主はどうせまたあの犬が嫌になるに違いないと言った。そして、仁の言う通りとなった。

そして、1985年、3人の一人っ子たちの高校2年の春が来た。

仁の両親が働いている寿司屋は、梶原商店街の入り口近くにある。本屋と花屋に挟まれた間口6メートル、奥行き10メートルほどの小さめの店である。店に入ると左側に4人掛けのテーブル席が2つあり、右側には4人くらい並んで座れるカウンターがある。カウンターの内側で仁の父親が寿司を握り、母親がお茶を淹れたり、味噌汁を作ったり、お酒をつけたり、レジを扱ったりする。店の奥には部屋が2つあり、左側の部屋は客用の6畳の座敷で、右側の部屋は3畳の板間になっている。板間は、仁の両親が休憩したり、物を置いたりするのに使っている。この板間に沿って2階へ続く階段があり、板間の奥には裏手に出る勝手口がある。2階には寿司屋の親方が1人で住んでいる。親方が寿司屋の持ち主であり、仁の両親は親方に面倒をみてもらっていることになるわけだが、親方は70歳近くの老人で、跡取りも家族もいないので実際は逆に仁の両親が親方の面倒を見ている。板間の部屋の手前に、トイレがあり、トイレの手前に壁で仕切られて、カウンターの内側とつながっている流し台とコンロがある。

仁の父親はいつも白い半纏（はんてん）を着て、仁と同じ丸坊主の頭に手拭いの鉢巻きをしている。源太という名前なので、通称「源さん」と呼ばれている。仁の母親は雅代という名前なので、「マーちゃん」と呼ばれている。ちなみに寿司屋の箸袋は、折り紙を折って作ったマーちゃんのお手製であり、それが店の唯一の名物になっている。

毎週金曜日は、寄合と称して商店街の古株さんたちが奥の座敷を占拠するが、お店にとってはありがたいお客様たちであった。さて、今日、4月19日は金曜日で、いつもの通り、座敷には商店街の古株さんたちが集まっていた。時折、

「マーちゃん、ビールもう1本」とかいう声が聞こえる。

「おい、この間の巨人阪神戦を見ただろう」

「あー、見た見た」

「水曜日に阪神がバックスクリーンに3連発をぶち込んだ」

「槇原が、バースと掛布と岡田に打たれた」

「そこでだ、オレは、今年は阪神が優勝すると見た」

「何い、乾物屋は巨人ファンのはずだろ、なあ洋品屋」

「そうだそうだ、阪神が優勝するなんて間違っても口にしちゃあいけねえな」

「本屋さん、オレは根っからの巨人ファンだよ、だから阪神が優勝するとは言ってねえ、優勝するかも知れないと、ちょっと心配になっただけさ」

そう言って乾物屋と呼ばれた男は満面の笑みを浮かべた。ここで、それまで黙っていた若い男が、

「だけど槇原も気持ちよく打たれ過ぎだよ」

と言うと、洋品屋と呼ばれた男が口をとがらせながら、

「いや、二代目さんよ、あれは打った方をほめなきゃなあ」

と言う。すると、本屋と呼ばれた男が、

「おいおい、洋品屋まで阪神の味方をするのかよ」

と言う。乾物屋と洋品屋が同時に、

「いや、オレは巨人ファンだ」と言う。

乾物屋と呼ばれた男は、今は「スーパー武田」の主人だが、娘婿の代になって店を拡張する前は乾物屋だったから、仲間内では未だに乾物屋と呼ばれている。ずんぐりむっくりの体つきで頭が見事に禿げ上がっている。緊張すると満面の笑みを浮かべて誤魔化す癖がある。洋品屋と呼ばれた男は、乾物屋に次ぐ古株で、背がひよろ長い。すぐに口をとんがらせる癖がある。本屋と呼ばれた男は、洋品屋に次ぐ古株で、大柄な体つきをしている。両手を挙げてガッツポーズをする癖がある。二代目と呼ばれた男は、仁の家の隣の町工場の二代目で、体調のすぐれない父親に代わって寄合には欠かさず参加している。

そこへ、障子を開けて、アスナが入ってきた。ジーンズに白い割烹着という出で立ちだ。お盆にビール瓶が1本載っている。

「さあ、みなさん、お待ちどうさま」

とにっこり笑って言うと、ビールをテーブルに置いてさっさと出ていく。アスナは、今日は混みそうなので手伝いにきているのだ。

「あれー、マーちゃん、若返っちゃったなあ」

と本屋が言うと、

「お前はアホか、マーちゃんと同じ割烹着を着ているけど、あれはアスナちゃんだよ。いつも洋品屋がセクハラなことを言うから、アスナちゃん、さっさと出ていったぞ」

と乾物屋が言う。

「乾物屋には言われたくないよな」

と洋品屋が口をとんがらせて乾物屋をにらむが、乾物屋は満面の笑みだった。

アスナは、今日はライターをしている母親の夏子と一緒に来ていた。母親がここに来るときは、いつもある女性文化人と連れ立って来る。そして、カウンターに座っておしゃべりをする。その女性は、日本語の達者なアメリカ人のおばあさんで、髪の色が白い

ので一見すると日本人のおばあさんにも見えるが、日本人のおばあさんは着ないような明るい色の服をいつも着ている。今日も普段着のままの常連さんたちの中であって、オレンジ色の花柄の服は1人だけ垢抜けしている。文化人とは、アスナが付けたあだ名だ。母親がまだ学生の頃、旅行中にその頃は長野に住んでいた女性文化人の家に泊まったことがあったらしい。文化人は元々は画家で、その旦那さんは、やはりアメリカ人で、日本文化を研究する学者だったので夫婦で日本に来ていたらしい。旦那さんは残念なことに、だいぶ前に亡くなったらしいが、文化人は、日本と日本人が好きになって日本に住みついている。しかし、ひとつところには住みつかず、あっちに住んだり、こっちに住んだりしている中で、偶然、アスナの母親と再会したらしい。

アスナは、母親のライターという仕事に憧れていて、母親が文化人にインタビューしているかのような、2人のおしゃべりを聞くのがお気に入りだった。今日は、曜変天目（ようへんてんもく）茶碗とか言う茶碗の話のようだが、茶碗の話なのに宇宙が出てきたりしている。アスナは、その茶碗を見たことも聞いたこともなかったので、たいへん興味深かったのだが、始終、お座敷からお呼びが掛かって、ところどころしか聞けないでいた。だから、後で母親に聞こうと思っていた。

午後8時頃になって、新たなお客たちがどやどやと店に入ってきた。いずれも体格のいい大柄な面々だ。それは、道場主をしているアスナの父親の弘と、父親の師匠の渡辺という大先生と、中村という中学の体育教師と、写真屋の4人だった。稽古を終えて、ここに来る途中にある銭湯で、ひとつ風呂浴びてからやってきたようだ。

「おい、アスナ、悪いけど、冷えたビールを頼む」

とアスナの父親は言いながら、奥のテーブル席に座る。この4人が座ると、テーブルがいかに小さく見える。

「あなた、今日の夕飯は、ここでね」

とアスナの母親が父親に言う。

「ああ、そうだと思った」

「源さん、今日も寄合やってる？」

と写真屋が、奥の座敷を顔で指して仁の父親に尋ねる。

「ああ、いつもと同じさ」

写真屋は、大先生と、アスナの父親と、体育教師に、

「ちょっと・・・」

と言いながら、奥の座敷に向かおうとする。そこへ、アスナがビールとコップを4つ

と漬物の皿を持ってくると、

「やっぱり、ビールが先か」

とか言いながら、写真屋は大先生とアスナの父親と体育教師のコップにビールを注ぎ、自分のコップにもビールを注ぐ。そして、

「お疲れさまあ」

と言って、乾杯した後、コップを飲み干すと、

「それじゃあ、大先生、ちょっと失礼」

と言って、奥の座敷に向かった。

「中村さんは、やっぱり体育の教師だけあって筋がいいね」

と大先生が体育教師に言いながら、体育教師のコップと自分のコップにビールを継ぎ足している。

「いやあ、大先生の指導が厳しいから、一生懸命ですよ」

「引き手をもっと手元に引き寄せる練習をすれば、技に切れ味が出ると思う」

「いやあ、大先生は何でもお見通しですから・・・」

アスナの父親は、自分でビールを注ぎ、もくもくと飲んでいる。

「ときに、一昨日の巨人阪神戦は見たか？」

「バース、掛布、岡田の3連発ですか？ ええ、プロ野球ニュースで見ました。阪神、すごいじゃないですか、あっ、大先生は巨人ファンでしたっけ」

「阪神ファンだ」

「ああ、じゃいいんだ。ええ、私も阪神ファンでしてね・・・」

「嘘だ。本当は巨人ファンだ」

「ええっ、人が悪いなあ・・・ じゃあ、今日のところは、私も巨人ファンにしときますよ」

と言いつつ、体育教師は、大先生とアスナの父親にビールを注ぐ。大先生は笑いながら、

「嘘だよ、本当は大の阪神ファンだ」

と旨そうにコップをあける。

「それじゃあ、阪神の優勝を祈念して、乾杯」

「アスナ、悪いけど、冷えたビールを頼む。それから、何かつまむもの」

とアスナの父親が声をあげる。すると、仁の母親が、ビールと刺身の盛り合わせを運んできた。



「大先生、お久しぶりです。先生、アスナちゃんは、ただいまお座敷ですよ。それから、冷えてないビールはお出ししてませんか」

ときつい口調だが、仁の母親の顔は笑っている。カウンターのアスナの母親が、  
「あなたが、声が大き過ぎなのよ」

とアスナの父親に注意する。カウンターの仁の父親が、  
「お前の言い方が失礼だ」

と仁の母親に注意する。そこへ、戻ってきたアスナが、  
「まあまあまあ」

と皆をなだめに割って入った。

それから、床屋とやっさんが続いて店に入って来た。床屋は、  
「こちとらあ、古株さんたちみたいな隠居身分じゃなくて現役だからな、お客がいると遅くなっちゃうのはしょうがねえじゃねえか」

とぶつぶつ言いつつ、奥の座敷にさっさと入って行った。やっさんは、  
「僕も残業で遅くなって。家へ直行しようと思ったんだけど、そこで床屋さんと一緒になってね、源さん、ビールと、えーと、握りの上をください」

と言った。やっさんと呼ばれた男は、商店街の近くの実家に住む36歳の独身サラリーマンである。髪を七三に分け、黒っぽいスーツを着て、黒の書類バッグを持っている。やっさんが床屋に続いて座敷へ行こうとすると、カウンターでアスナの母親と話していた女性文化人が、

「やっさーん、お帰りなさい」

と言った。

「あっ、バーバラさん、こんばんは、奇遇ですね」

と言って、やっさんはそのままカウンターに座りこんだ。

「アスナちゃんのお母さんもこんばんは」

とやっさんは言って、店内を見渡すと、

「あっ、道場主さんもこんばんは。大先生、お久しぶりです。あっ、中村先生お疲れ様です」

と次々に挨拶した。

「やっさーんは、お友達が多いですね」

と文化人が言うと、アスナの母親が、

「バーバラさんと、やっさんが、仲良しだなんて知らなかった」

と言った。やっさんは、

「それがね、僕も最近まではバーバラさんの顔を知ってるくらいだったのですが、この前、バーバラさんのマッキントッシュが調子悪いというので、見させていただいたのです。そうしたら、ここで特上の握りをご馳走になりまして。バーバラさん、どうもご馳走様でした」

「それがね、やっさーんは、マッキントッシュを、パパッと一瞬で治してくださったのよ」

「僕も英語版のマッキントッシュをいじるのは、初めてでしたが、治って良かったです」

「えっ？ マッキントッシュって何のこと？」

文化人は、うふふと静かな微笑を浮かべ、

「じゃあ今度は、マッキントッシュの話題にしましょうか」

と言い、カウンターでアスナの母親がインタビューする相手は、文化人とやっさんの2人になった。

夜も更けてきて、アスナ一家と大先生と中村先生は、そろそろ帰り支度に入ろうとした。一方、奥の座敷は、徐々に騒がしくなった。アスナ一家が帰るのなら、文化人とやっさんも帰るということで、順番にレジで精算を始めたときに、奥の座敷からアスナにお呼びがかかった。アスナが座敷に入っていくと、商店街の古株さんたちが、巨人が優勝するか、阪神が優勝するかで言い争っていた。アスナは、古株さんたちの酔いっぷりを見て、これはまずい、こちらを立てればあちらが立たずという非常に難儀な場面に出くわしてしまったと思った。体格のいい写真屋が、

「アスナちゃん、よく来た。アスナちゃんは確か阪神ファンだったよね」

と言い、アスナが返事をする間もなく、

「おい、アスナちゃんに声をかけるなんてずるいぞ」

と乾物屋が声を荒げた。すると、

「何を揉めているのか」

と様子を見に来た大先生が言うと、

「おお、大先生がいらっしゃった。ご無沙汰しております」

「お前たちは、酒を飲む時間はあるが、練習する時間はないと見える」

商店街の古株さんたちは、一応は道場の門下生であったが、写真屋以外はそれは名ばかりで、実際の練習はずっとサボっていたのだった。

「で、阪神がどうしたって？」

「いえね、写真屋と床屋が、強硬に今年は阪神が優勝するなんて世迷い言を言うもので、商店街の平和のために会長としてたしなめているところで・・・」

「いいか、乾物屋さん、阪神の優勝は世迷い言なんぞではないぞ」

「そうですよ。大先生の言うとおりで」

と知らないうちに中学の中村先生まで座敷の入り口に来ていた。

アスナは、あー、ますます事態は悪化しつつあると思った。

「じゃあ、こうしよう。今年は巨人が優勝すると思う人は？」

と乾物屋は自分で言って、自分で手を上げた。続いて洋品屋と本屋と二代目が手を上げた。

「じゃあ、阪神だと思う人は？」

大先生と中村先生と写真屋と床屋の4人が手をあげた。

「4対4の引き分けだ。ということで、今日はもうおしまいにしようじゃないか」

と大先生が引き取って論争は終わるかに見えた。しかし、ほろ酔い加減の古株さんたちは引き下がらなかった。

「いや、まだ、アスナちゃんの意見を聞いていない」

アスナは、ほら来た。だからやばいと思ったんだと我が身の不運を嘆いた。一同の目がアスナに集中し、一触即発の空気が流れた。一瞬をおいてアスナは、

「アタシはどっちが優勝するか、応援するよりも、自分でホームランを打つ方が好きよ」

とバットを振るまねをしながら言うと、みんなが、

「オレもそうさ」

「オレだってそうだ」

と口々に言い始めた。

「まてまて、それじゃあ、試合で決めるか」

と中村先生が言えば、

「おお、それがいい」

「賛成」

「オレたちだって3連続ホームランくらい、わけないさ、なあ洋品屋さんよ」

と乾物屋が言い、

「そりゃあそうさ、本屋さんもそう思うだろ」

と洋品屋が続けば、

「当たりめえよ」

と本屋が締めくくった。

「では、商店街チーム対道場チームの対戦ってことでいいな」

と大先生が乾物屋に念を押すと、乾物屋は、

「単なる勝敗だけじゃ面白くねえ」

乾物屋は、何事かを大先生の耳元でゴニョゴニョとささやいた。

「そんな大きなことを言うのは、あんたが酔っているからだ」

「じゃあ洋品屋と本屋にも確かめてやる」

そこで、乾物屋と洋品屋と本屋が何やらゴニョゴニョと相談して、

「大先生、洋品屋と本屋も同意見さ」と言った。

中村先生が、

「それじゃあ、私が中学校の校庭を借りてソフトボールの試合ができるように準備をしますが、いいですか」と言った。

床屋は、

「こちとらあ、お前さんたちと違って現役だからよ、休めないのさ」

と言って不参加を表明した。同じく、仁の父親も

「店を休むわけにはいかねえ」と不参加を表明した。

やっさんが、

「あの～、商店街チームは、メンバーが足りないと思うので、寿司屋チームっていうことにして、常連さんも入れてほしいな」と言うと、文化人も、

「賛成、やっさーんも出てくださいね、応援に行きますから」と言った。

仁の父親が、

「おい、雅代、親方も応援で、ほら、たまには外に連れ出してやらないとな」と言うと、

アスナが、

「それなら、仁くんをまず参加させなくっちゃ」と言った。

仁の父親は、

「うーむ、うーむ」と言うばかりだったが、

中村先生が、

「私に考えがある」

と遠くを見つめるような目をして言った。

翌日の土曜日の昼過ぎのこと、仁の父親は、いつも店で着ている白半纏に手拭いの鉢巻きという姿のまま、自宅の1階の和室でアスナが来るのを落ち着かない様子で待っていた。おじいちゃんとおばあちゃんがいた和室は、2人の遺品を整理するという名目で、いまは父親が使っているが、遺品はほとんどそのまま整理しているようには見えない。仁の母親は、遺品は結局は捨てるしかないと割り切っていたが、仁の父親は、自分の両親のことでもあるので踏ん切りがつかないでいた。遺品の1つに、おばあちゃんの記事があった。記事を読むと、おばあちゃんの孫である仁のことばかりが書いてあった。おばあちゃんが亡くなる直前は、仁は反抗期になっていて、おじいちゃんとおばあちゃんにも、だいぶ反抗していたけれども、おばあちゃんの記事には、そういうことで困ったり、怒ったりした様子は微塵もうかがえなかった。それに対して、仁の父親も母親も仁の扱いに困っていた。今回のソフトボールの試合に、仁は断固として出ないと言い、仁の父親も母親も、仁をどうしても説得できないでいた。

玄関でチャイムが鳴り、約束のアスナが来たことを告げた。アスナは「仁を説得する秘策」を中村先生から聞いてきて、これから仁を説得することになっていた。仁は呼ばれて、2階から降りてきて、父親とアスナが待つ居間に入った。アスナは、中村先生から預かった仁の中学生時代の反省文を見せた。その反省文に仁の父親は、心当たりがあった。反省文には、

「勝敗にこだわる体育は楽しくない。下手な人でも楽しい体育にしてほしい」

と左利きの仁らしい四角ばった文字で書いてあった。父親は仁に、

「てめえはあの頃、嘘ばかりつきやがって・・・」

と言い掛けたが、仁は父親をさえぎって、

「いや、この反省文は本当に思ったことを書いたんだ・・・」

と言った。すると、アスナが、

「本当に本当なのね」

と突っ込みを入れた。ソフトボールの試合には死んでも出ないと固く決めていた仁の心がわずかに動いた。そこへすかさずアスナがさらに切り込んだ。

「仁くん、下手な人でも楽しいソフトボールよ。アタシのために出ると言って」

仁はアスナのあまりの剣幕に、つい、

「うん」

と言ってしまい、結局ソフトボールの試合に出るはめになった。しかし、「アスナのために」とはどういう意味でアスナが言ったのか、仁にはよく分からないままであった。





## 4人目の一人っ子

---

5月5日の日曜日は、朝から晴れて、絶好のソフトボール日和となったが、仁にとっては、久しぶりの気持ちの重たい朝となった。父親は、とっくに起きて、寿司屋の仕込みと買い出しに出掛けており、既に家にはいなかった。母親は、3人分のお弁当を作った。仁の分と母親の分と親方の分だ。母親と親方は、今日はもちろん応援専門だ。母親は、渋る仁を連れ出すと、親方を迎えに行くために、まず寿司屋に向かった。母親は、歩きながら、

「気持ちのいい天気になって良かったよ」

と仁に話しかけるが、仁の口は重かった。母親が来るのを待っていた親方は、仁を久しぶりに見たと言い、「大きくなった」「立派になった」とあたかも仁が自分の孫のように喜んだ。そして、たまには顔を見せてほしいと頼むのであった。仁は、やれやれ朝一番から面倒くさいことになった。だから、寿司屋に行くのは面倒くさいと言ったのと思った。

それから、3人で中学校に向かった。親方は、足が痛むというので3人はゆっくりと歩いた。すると、途中で初夏らしい水色のワンピース姿の女性文化人と、買ったばかりと思われる真新しい白いジャージを着たやっさんに出会った。仁は、今日は人とかかわらないように、心の中にバリアーを張って黙って過ごそうと決めたのに、朝からその誓いは破られそうであった。果たして、やっさんが仁に話しかけてきた。

「源さんの息子さんだってな。今、高校生かい？」

仁は、蚊の鳴くような声で、

「高校2年です」と言った。

「僕のこと知ってるかな？」

仁は、やっさんのことは知らなかったから、知らないと言った。すると、母親と親方と一緒に前を歩いていた文化人のおばあさんが振り向いて、

「私のことは、知っていますか」

と聞いた。仁は、

「なんて耳のいいおばあさんだ」

と驚いたが、よく見ると外国人だったので尚更驚いた。母親が、

「仁たら、ほら、バーバラさんだよ、この前話したアスナちゃんのお母さんと仲のいい・・・」

と横から口を出したが、仁にはまったく記憶がなかった。

「今日はよろしく。頑張ってくださいね」

と優しく言うので、仁はまたも蚊の鳴くような声で、  
「よろしく」と言った。

「僕もよろしく。僕は安崎一郎。通称はやっさんです。だから、君も、やっさんと呼んでくれ」

とやっさんは言った。

「今日の試合には、僕が勤めている会社の野球部の友達を、寿司屋チームの助っ人として3人も連れてきたんだ。僕は、下手だけど、彼等は上手なんだ」

仁は、助っ人が来るとは知らなかったし、会社には野球部があるというのも知らなかった。会社の放課後に集まって、社員が校庭で練習するのだろうか？ 会社に放課後や校庭があるとは思えないし。仁の想像する会社とは、隣の町工場が精一杯だった。

仁にとって、中学校の校庭は、2年ぶりだった。校庭と隣の自動車教習所の間に並んでいるイチョウの木々が、青空の下に青々と元気にあふれていた。しかし、仁には、この校庭で元気にあふれたような思い出はなかった。ソフトボールについては尚更だった。しかも今日は、あの中村先生が、再び仁の前に登場する。仁にとって、意外だったのは、仁のことは何も分かつちやいないと思っていた中村先生が、嘘つき事件ばかり起こした仁の反省文を、大事に取ってあったことだ。仁は、中村先生は一体何を考えているのだろうと不安に思った。

寿司屋チームは、ばらばらに集まってきたが、道場チームは、一団となってやって来た。道場チームは、今朝は一旦、道場に集合してからやって来たのだ。その一団の中に、赤いジャージ姿のアスナと青いジャージ姿の雄一がいた。アスナの両親と大先生と師範代の大学講師もいた。そして、写真屋と駐在所のお巡りさんもいた。今日は非番らしい。他に、顔の知らない会社員風の人や、OL風の女性がいた。

「さすがに、体育会系は違うな」

と仁は思ったが、道場チームの所属にならなくて良かったと思った。校庭の隅に白い乗用車が1台停められてあった。仁が近寄ろうとすると、

「仁くん、おはよう。来てくれてありがとう。今日は頑張ろうね」

と言いながらアスナが近づいてきた。仁が車を見ているので、アスナはつけ加えた。

「この車はね、祥子（さちこ）ちゃん一家の車よ。今日は、祥子ちゃんのお父さんが道場チームに参加するの。祥子ちゃんのお父さんは、アタシのお母さんの弟なの、知ってるわよね」

と言った。

仁は、祥子のことを少しだけ覚えていた。確かアスナの従妹で、一人っ子で、生まれつき耳が聞こえなくて、父親が銀行員で、転校の多い子だったと思った。仁が小学6年生のときに、1回だけ会った（というより見ただけだったが）。そのとき、祥子は確か小学3年生で、小さな体に不似合いなくらい大きな眼鏡をかけていた。仁がアスナに、「すごい眼鏡だな」

と思わず言っ

「そういうことを言わないの」

とアスナに坊主頭をピシヤリとたたかれたことを覚えている。それから、どっか遠いところへ引っ越して行って、一昨年、また東京に戻ってきたということだ。

「ほら、祥子ちゃんたちがあっちを歩いている」

とアスナが言う方を見ると、祥子と両親がイチョウの木の下を歩いていた。祥子は中学2年生になったはずだが、相変わらず小柄な体つきで、おかつぱ頭に大ぶりの眼鏡をかけていた。アスナによれば、祥子は見かけによらず、剣道が得意なのだそう。祥子は、あんな小さな体で、耳が聞こえないことと、度の強い眼鏡を背負っているのだと気付いて、仁は重たい気分になった。目が悪くて耳が聞こえないならば、1人で過ごすことが多いのに違いない。けっこう可哀想な奴なのだろう。僕みたいに心の中にバリアーを張って、うかつに人とかかわらないように生きているに違いない。目が悪くて耳が聞こえないのだから、責められ方も半端ではないに違いない。僕だったら自殺するかも知れないという境遇だ。そう、祥子と出会ってから、しばらくしたらワンコが死んで、おばあちゃんの具合が悪くなった。そして、あっという間に亡くなってしまった。すると、今度はおじいちゃんの具合が悪くなって、おじいちゃんも死んでしまった。思えば、あれから、仁の周りの世界はすっかり様子が変わってしまった。祥子は、それこそ疫病神なのではないか。仁は、祥子のことを思い出すにつれ、縁起の悪い何かむずむずするものを感じた。

みんなが集まり、試合開始予定の時刻になると、中学の体育教師の中村先生がきりっとした声で、

「集合！」

と号令をかけた。みんなはなんとなく、ホームベースのまわりに輪のように集まった。すると、また中村先生が、

「大会会長挨拶！」

と声をはりあげた。商店街で1番の古株の乾物屋が一步踏み出すと、帽子を取って一礼する。みんなも慌てて、帽子を取って一礼した。乾物屋は、帽子を手に持ったまま中村先生よりも大きな声をはりあげ、

「おはようございます」

と言った。顔は満面の笑みだ。みんなもつられて、

「おはようございます」

と大声を張り上げた。

「えー、本日は5月5日、日曜日でこどもの日です。お日柄もよく、これもみなさまの日頃のご精進の賜物と思います。本日はここにおられる中村先生のお陰で中学校の校庭とソフトボールの用具を借りることができました。本当にありがとうございます」

と一礼する。またもや、みんなはつられて、

「ありがとうございます」

と一礼した。みんなが乾物屋につられる様子がおかしくて、仁の横にいたアスナがぷっと吹き出した。

「本日はけがのないように頑張りましょう」

みんなからのパラパラとした拍手の中、アスナは、

「会長も毛がない」

と仁にささやいて、くっくっくと腹をかかえた。続いて、中村先生が、

「本日のルールを説明します」

と言った。

「先ほどのキャプテン同士のじゃんけんにより、道場チームが先攻、寿司屋チームが後攻となりました」

「キャプテンって誰だあ」

と言う声が飛ぶ。すると、「しっ」と言う声はいくつも飛び交った。

「今日は7回戦で行ないます。それぞれのキャプテンは、今から15分以内に、このメンバー票の打順に合わせて、名前と守備位置を記入して、私に提出してください」

「選手は各自で準備運動をしてください」

と中村先生は叫んだ。

仁は、中村先生の顔をまともには見られなかった。しかし、中村先生の方も仁を敢えて見ようとはしなかったもので、仁はなんとなく胸をなでおろした。

それぞれのチームは、メンバー票を囲んで円陣になった。仁のいる寿司屋チームは、乾物屋と洋品屋と本屋が3番、4番、5番を誰が打つかで揉めていた。やっさんの連れてきた3人の助っ人がバッテリーとサードを守り、1、2番と6番を打つことになった。仁はライトで9番を希望し、それが認められてややホッとした。すると、やっさんはセンターで8番を希望して、やはり認められた。そして7番は町工場の二代目でファーストを守ることになった。

道場チームは、アスナがピッチャーになり、雄一がキャッチャーになった。中村先生はアンパイアの場所にすくと立った。仁は初回の守備につくため、中学校から借りた用具入れからグローブを探した。仁はグローブを持っていなかった。仁は左利きだが、運悪く左利き用のグローブは用具入れにはなかった。寿司屋チームには、仁のほかに左利きはいなかった。道場チームにも左利きはいなかった。仁は、やむなく右利き用のグローブを取って守備位置についた。右利き用のグローブを右手にはめるのは、仁にとっては難しく、やむなく、左手にグローブをはめた。この瞬間から、仁の胸は嫌な予感でざわついた。やっぱり、今日の試合には来ない方がよかったと仁は思った。

中村先生が五月晴れの空に手を上げて、「プレイボール」を宣言した。やっさんの会社からきた助っ人のピッチャーは、球が素晴らしく速く、しかもコントロールも抜群だった。道場チームの1番打者はアスナだったが、1球目は手が出ずストライク、2球目は空振りでストライク、3球目はゆるい釣り球でボール。あの釣り球に引っかからないのは、さすがにアスナだった。しかし、4球目の低目のゆるい球を打ちそんじて、サードにゴロが飛んだ。やっさんの会社からきた助っ人のサードがまたうまかった。華麗にさばいてワンナウトだ。

2番打者は雄一だった。1球目、見逃しのストライク、2球目、空振りのストライク、3球目は見逃してボール、4球目を打ってボテボテのゴロと、アスナとまったく同じ道にはまる。違っていたのは、サードゴロではなく、今度は、乾物屋の守るショートへのゴロだったが、サードの助っ人が飛ぶように走ってきて見事にさばいた。その間、乾物屋は一步も動かず呆然と立っていた。そして、アウトになったのを見て満面の笑みを浮かべた。すると、セカンドの洋品屋が口をとんがらせて、乾物屋をやじった。

「乾物屋さあんよお、ショートの守備は楽そうだね」

レフトの本屋が両手を上げて曲げたり伸ばしたりを繰り返す得意のガッツポーズをしてみせながら、

「乾物屋さーん、その調子」

と叫んだ。乾物屋は、満面の笑みのまま、洋品屋、本屋に向かって次々に手を振った。

3番は道場に通う元高校のソフトボール選手という体格のがっしりしたOLだった。バッターボックスで素振りをする姿が流石と思わせた。しかし、結果はいい当たりのサードライナーで万事休す。仁は、自分のところに球が飛んで来ずにチェンジになったので、やれやれ不幸中の幸いだと思いながらベンチに戻った。

1回裏の寿司屋チームの攻撃は、1、2番がやっさんの会社からの助っ人だ。仁は、今日は黙っていようと思ってベンチの隅っこに座った。すると、やっさんが隣に座って、「うちの連中、うまいだろう」

と自慢気に語りかけるので、仁はやむを得ず、「ええ、お陰で僕はありがたいです」

と言って黙った。アスナの立ち上がりは最悪だった。コントロールが定まらず、2人続けてフォアボールを出して、ノーアウト1、2塁のピンチを迎えた。しかし、この場面で乾物屋と洋品屋と本屋の古株クリーンナップトリオがアスナを助けた。

乾物屋は、  
「3番、バース」

と声高らかに右バッターボックスに入ると、洋品屋がすかさず、  
「バースはいつから右打ちになったー」

とちゃちゃを入れた。乾物屋は慌てて左バッターボックスに移って構えたが、よく見ると右手を上握ったままだった。アスナの球に全てホームラン狙いの大振りでたちまち三振する。次は、4番掛布の洋品屋だが、またもやホームラン狙いの大振りで三球三振に倒れる。

その次は、5番岡田の本屋だ。洋品屋が、  
「球をよく見ていけ、大振りはするなー」

と自分を棚に上げて叫ぶ。しかし、本屋は貴重な忠告を無視して大振りをする。すると、たまたまバットのどこかに球が当たってピッチャーとファーストの間に転がった。ファーストの元ソフトボール選手のOLが飛び出して掴み、3塁と2塁を見ると、各ランナーはすでに素早く進塁していた。1塁を見ると誰もベースカバーに入っていなかった。そこでやむなくボールを持って1塁に走ったが、間一髪、本屋が駆け抜けた後だった。本屋は1塁上でガッツポーズを繰り返し、英雄気取りだった。

ツーアウト満塁で向かえるバッターは6番に入ったやっさんの会社の助っ人だった。



アスナの初球を軽々とレフトの頭を越えて運び、余裕たっぷりの3塁打になり3点が入った。7番の二代目は、肩に力が入り過ぎて、1塁ゴロでチェンジになった。

2回表、道場チームのサードで4番は道場の師範代だった。本業は体育大学の講師でバリバリの現役アスリートだ。助っ人のスピードボールに師範代の振ったバットがかすかに当たり、打球はサードの上にふらふらと上がった。しかし、打球はなかなか落ちて来ずに上昇を続け、レフトの本屋にまで飛んだ。本屋はと見ると、打球を見失ったらしく辺りをうろうろしている。結局、師範代の大飛球を捕球したのはレフトまで走ったサードの助っ人だった。

5番はセカンドを守る大柄の写真屋だ。しかし、助っ人のスピードボールは手に負えなかった。ファウルで粘ったが結局は三振だった。

6番はセンターを守る非番のお巡りさんだが、たちまち追い込まれて、ゆるい釣り球に手を出して三振で、またも道場チームは三者凡退に終わった。

2回裏の寿司屋チームの攻撃はやっさんからだ。バッターボックスでの様子を見ると、やっさんは仁と同じくソフトボールの才能はまったくないようだ。仁はなんとなくやっさんに親近感を覚えた。仁がそんなふうに考えていると、アンパイアの「三振バッターアウト」

という声が聞こえて、仁は我に返った。次はついに仁の打順だ。仁は身震いするのをどうにか抑えた。前のやっさんが凡退したので気分はいくらか楽だった。仁がバッターボックスに入ると、仁の母親と寿司屋の親方が大声で声援したので、仁の気持ちは再び地下にもぐっていった。仁の父親は寿司屋の準備のために来ていない。仁は親父が来られなくて不幸中の幸いだと思った。仁はバットを鋭く振ろうとしても振れない。どこに力を入れたらいいのか分からない。アスナの球がきたと思ってバットを振っているのだが、バットが動くのは球が通り過ぎた後だ。それを見て、仁の母親がもっと速く振れと叫ぶと、仁は焦って手が汗でベトベトになった。すると、アンパイアの中村先生がタイムをかけてくれて、

「おい、仁くん、汗を拭け。今日は楽しんでやればいいんだぞ」

と言った。結局、仁も三振となったが、この様子を見て今度はやっさんが仁に親近感を覚えた。仁は、あの中村先生が何でこんなに優しいのかと思ったが、やはり中村先生の顔はまともに見られないままだった。

次は1番に戻って助っ人だ。助っ人はセーフティバントでアスナを揺さぶろうとしたが、アスナは見事なフィールディングでアウトにした。寿司屋チームは三者凡退となり、2回を終わって0対3で寿司屋チームのリードとなった。

3回表の道場チームの先頭バッターは、7番ショートの銀行員で、アスナの母親の実の弟だ。そして、祥子の父親でもあった。日頃の運動不足解消ということだが、父親としていいところも見せたいと思っているふうであった。しかし、助っ人の球はとにかく速過ぎて手が出せない。そこで先ほど助っ人がセーフティバントをしたのを思い出し、バントを仕掛けた。ボールはうまくファーストの二代目の手前に転がった。二代目がよろけながらボールをつかむと、ピッチャーの助っ人はあっという間に1塁に行って、二代目からの送球を待っている。祥子の父親は懸命に走る。二代目が送球する。間一髪でアウトだったが、道場チームのベンチから拍手が起こった。祥子の父親は苦笑いをしながらベンチに迎えられたが、確かに惜しいバントであった。

8番は会社員だ。会社員も果敢にバントを狙った。しかし、結果はキャッチャーフライだった。

最後は道場主のアスナの父親だ。父親は柔道6段、それにサンボという柔道に似たロシアの武術の達人でもあった。アスナの父親は、助っ人のスピードボールを強烈に打ち返し、助っ人はこのピッチャーライナーを掴もうととっさに手を出して素手で掴んだ。しかし、助っ人は右手を痛めてしまい、寿司屋チームは次の4回からピッチャーの助っ人とファーストの二代目が入れ替わることになった。

3回裏の寿司屋チームの攻撃は、2番の助っ人は出塁したが、古株クリーンナップトリオが三者三振に倒れた。寿司屋チームのベンチで応援する文化人の横に、いつの間にかアスナの母親が座り、戦況についておしゃべりを始めた。寿司屋チームはピッチャーが素晴らしかったから完勝かと思ったが、ピッチャーが代わると、攻撃力は道場チームの方がだいぶ上だから、道場チームが追い上げて接戦になるんじゃないかというのが2人の結論だった。果たして、4回、5回、6回と回を追う毎に、アスナ、雄一、師範代、アスナの父親の活躍で、道場チームはじわじわと追い上げた。仁の守るライトには、ゴロの打球ばかりが3回来て、仁は運よくエラーをしないで済んだが、打つ方はさっぱりだった。6回が終わると、3対3の同点になっていた。

最終回の表の道場チームの攻撃は、2番雄一からの好打順だ。雄一はショートの乾物

屋の頭を越えるヒットで1塁に出た。

続く3番のたくましいOLは、いい当たりを打ったがサード正面のライナーでアウトになった。

4番の師範代は、ランナーを進め、かつ自分も生きようというセーフティバントだったけれども、サードの助っ人とファーストに回った助っ人のコンビネーションによってアウトになったが、雄一は隙を突いて2塁に進塁した。

ツーアウト2塁で大柄の写真屋がバッターボックスに入ると、道場チームのベンチからたくさんの声援が巻き起こった。写真屋は一旦、バッターボックスを外し、目を閉じて精神集中しているように見えた。写真屋は二代目の初球を打った。打球はライトの仁とセンターのやっさんの間に上がった。仁もやっさんも打球を懸命に追うが、いかにも2人の走りは遅かった。一方、ランナーの雄一は早くも3塁を回った。打球の落下点で仁はやっさんと衝突してしまった。仁は、痛さをこらえながら、左利きのグローブが見つからなかったときに感じた嫌な予感が的中したと思った。打球を追わなければよかったと悔やんだ。ところが、打球は見事にやっさんのグローブの中に収まっていたから、やっさんと仁の2人は、チームメイトに温かく迎えられてベンチに戻った。それでも仁は、自分がやっさんの守備を妨害してしまったから、それを責められるのではないかと心配したが、みんなもやっさんも責めなかった。むしろ、やっさんは、仁くんはよく走ったと誉めてくれた。

「仁くんが走ったから、僕も走ったんだ。君が走らなかつたら、たぶん僕も走らなかつたよ。僕は走るのが苦手だからね」

仁は、それを聞いて、今朝からずっと続いていた緊張感から解き放たれたように感じた。

最終回の寿司屋チームの攻撃は、5番の本屋からであった。道場チームは、アスナの球速が落ちてきたので、ここで踏ん張って延長戦に持ち込むため、バッテリーを入れ替えた。雄一がピッチャーに、アスナがキャッチャーになって、少しの間、投球練習をした。雄一の球は速かった。コントロールも抜群だった。

そのとき、ベンチで応援していた祥子がベンチから立って、バットのそばに歩み寄るとバットを手を取った。両手でグリップを持って重さを試すようにバットの先を揺らしてみている。それからバットを頭上に振り上げ降り下ろす。なるほど祥子は剣道が得意なのだ。次は、普通のバッターのようにバットを右の肩にかつぐように構え左下方に振り下ろした。それを2、3度繰り返すとバットを置いてベンチに戻り、隣に座る母親と何

事が話し2人で微笑み合った。

雄一の投球練習が終わり、アンパイアの中村先生が「プレイ」を告げた。本屋は、この期に及んでも、ホームラン狙いの大降りで三球三振に倒れた。

続く6番は、初回到3点をたたきだした助っ人で、たちまちレフト前にクリーンヒットを打った。

7番は、二代目で、肩に力が入り過ぎて1塁ゴロに倒れたが、その間にランナーは2塁に進塁した。

さて、ツーアウト、ランナー2塁で、やっさんの打順となったが、やっさんは、さっきの守備で右手を負傷したのでとてもバッターボックスには立てないと言う。ならば、寿司屋チームは、やっさんの代打を送らなければならないが、さりとて代打のなり手はいなかった。そこで、やっさんは、道場チームのベンチを指して、あの女の子に打たせてあげてほしいと言った。それはさっきバットをいじっていた祥子のことだ。すると、アンパイアの中村先生が寿司屋チームのキャプテンの乾物屋を呼び、一緒に道場チームのベンチに向かった。そして、道場チームのキャプテンの大先生と祥子の母親が集まり、なにやらゴニョゴニョと相談をはじめ、ついに、アンパイアの中村先生はこう言った。

「寿司屋チーム、ピンチヒッター祥子ちゃん」

寿司屋チームのベンチは一瞬どよめいたが、次にはそれが祥子への声援に変わった。キャッチャーのアスナは、ルール知らない祥子に、売ったら1塁に走ることだけを丁寧

に教えた。バッターボックスに立った祥子の構えは、まるで剣道の上段の構えのようで祥子の顔は静かな無表情に見えた。雄一の1球目は、その姿のまま身動きもせず見送って、ワンストライクとなった。次に同じコースに来た球に、祥子の目にもとまらぬ鋭い一撃が襲い、打球はピッチャー雄一のグローブをはじき、センターの前へてんと転がった。2塁ランナーの助っ人がホームインして劇的なサヨナラゲームとなった。寿司屋チームのベンチは大歓声となった。

アンパイアの中村先生が「ゲームセット」を告げ、みんなで道具類を片付け終わると、待ちかねた昼食会が始まった。中村先生は、

「けがをしないようにと言ったのに、寿司屋チームのピッチャーの方が負傷したのと、やっさんが負傷したのは、たいへん残念だ。ひとえに私の責任だ。申し訳ない」

と言った。しかし、ピッチャーをした助っ人は、  
「いやいや、ほんとはまだ投げられたのですけれど、潮時と思い、ちょっと嘘ついて交代しました」

と遠慮がちに言った。すると、アスナの父親が、  
「それは何よりでした。怪我をさせてしまったかと実は気になっていました。しかし、あなたのピッチングはほんとに素晴らしくて、一時はパーフェクト負けかと心配になりました」

と笑いながら言った。やっさんは、  
「僕もほんと大したことないです。実は早くビールを飲みたくて嘘を言いました」  
と負傷したはずの右手をひらいて差し上げた。  
「それにしても祥子ちゃんはすごい。ヒロインだ」とやっさんが言った。  
「やっさんも殊勲賞ものだよ、よくぞ祥子ちゃんに代わってくれたよ」  
「そうだそうだ、やっさんがバッターボックスに立っていたら、道場チームに追い上げられていたし、延長戦で負けていたかも知れない」  
「オレは、祥子ちゃんのためなら命はいらねえってんだ」

と乾物屋は早くも酔いが回ったのか巻き舌で言った。  
そこに、道場チームのキャプテンを務めた大先生が現れた。寿司屋チームのキャプテンの乾物屋は、大先生と缶ビールで乾杯をすると続けた。  
「お陰様で巨人ファンのチームが阪神ファンのチームに勝利できて、めでたしめでたしです」

これに、阪神ファンの大先生がどう答えるのかと一同が見守る中、大先生は、寿司屋の箸袋を取り出した。

「乾物屋さん、洋品屋さん、そして本屋さん、この箸袋を覚えていませんか」  
「おい、なんだっけ」

「乾物屋さんたちは、大先生となんかゴニョゴニョと約束してた気がする」

と二代目が言った。大先生は、  
「その通り」

と言い、折り紙で作られた箸袋を広げ折り紙の裏を見せた。そこには大先生宛に3名の署名入りでこう書いてあった。

「われらは3連続ホームランを打つことをここに誓う。約束を違えたときは、仰せに従います」

「残念ながら、3連続ホームランは出なかったので、3名には阪神優勝祈願のお参りと

懇親会に付き合ってもらおう」と勝ち誇ったかのように大先生は言った。

アスナが、

「あの一、祥子ちゃんたちがお先に失礼しますって」

と言った。

「オレは祥子ちゃんのためなら命はいらねえ」

と乾物屋がまた言った。すると、大先生が別の箸袋の紙に「祥子ちゃんのためなら命はいらない」と書いて乾物屋さんに渡すと、乾物屋は、すぐさまサインをした。洋品屋が、口をとんがらせて

「あ一、懲りない奴はやだねえ」

と言いながら、自分もサインをした。

祥子一家は自動車で来ていたのでアルコールは飲めないし、祥子は大勢の中でのおしゃべりが苦手なので、昼食会には参加せず、一同に惜しまれながら先に帰宅した。

仁は、中学生時代のソフトボールにまつわる自らの嘘を思い出していた。それから、ピッチャーの助っ人さんとやっさんが白状した嘘に心を動かされていた。仁の心の中で結論には至らなかったけれども、少なくとも世の中には、いい嘘もあるんだと仁は思った。仁はやっさんから、今度の日曜に遊びに来いと誘われた。それから、中村先生から、

「おい、仁くん、今日のソフトボールは楽しかったか」

と聞かれたので、

「やっぱり僕には楽しくなかったです」

と答えながら、これは嘘だなと気付いて思わず苦笑いになったが、中村先生の目をしっかり見ながら言うことができた。すると、中村先生には、仁の気持ちが正しく伝わったらしく、目を細めて、「そうか、そうか」と笑った。

仁は、さっきまで中村先生の顔をまともに見られなかったのは、自分が心の中にバリアーを張っていたからだと気付いた。そして、今は知らぬ間に心の中のバリアーが解けていることに我ながら驚いたのだった。

5月11日は、雨の土曜日だった。仁の家の庭の片隅で咲き始めた皐月つつじに、雨の雫が溜まったりこぼれたりした。夜になって、仁は部屋のベッドで目をつぶり、外の雨音を聞いていた。

ベッドに横になって目はつぶっているが、意識は起きているという夢。

ベッドに横になって目はつぶっているが、外の物音はちゃんと聞こえているという夢。

これは眠っているのか、いないのか、金縛りにあっているのかも知れない。

体外離脱しかかっているのかも知れない。

夢と夢の間で覚醒していたのかも知れない。

しかし、そういう夢を見ていただけなのかも知れない。

仁の意識は、体から半ば強引に引き離され、厚い雲におおわれた夜空に上がっていった。雨は既に止んでいた。屋根を通り抜けたはずだが、どうやって通り抜けたか細部は思い出せなかった。思い出せるのは、夜の町が下に広がっていたという実感だ。それから徐々に高度が下がってゆき、新幹線の高架を越え高台にある大木の並ぶ神社の境内に降りて行った。走ろうとして足を懸命に動かすと、少しだけ前に加速する。曲がろうとすると、ゆっくりと方向が変わる。息を止めて上に伸び上がろうとすると、少しずつ高度は上がる。しゃがみこむようにすると、少しずつ高度が下がる。限りなくもどかしく、じれったい動きだった。足を動かし過ぎたのか、筋肉に尿酸が溜まったかのように、足がたまらなく重くなった。しかし、足を動かさずにはいられなかった。体中から脂汗が出てくるのが分かった。境内に着くと、自分の体の中から自分とは別の声が出た。

「我ハ、石神（しゃくじん）デアル」

と仁の中の仁ではない声がそう告げた。仁は訳が分からずパニックになりそうになったが、そうか、これは夢に違いないと気付いて落ち着きを取り戻した。そう言えば、手を広げて足をばたばたさせると空が飛べる夢を見たことがあったのを思い出した。得体の知れない声は続けて、

「我ハ、森羅万象ノ盛衰ヲ1000年ニ渡リ見定メテキタ八百万（やおよろず）ノ神ノ一族

デアリ、天ニ帰還スルタメ、オ前ヲ見出シタ。帰還ノ儀式ヲ執リ行ウベク、オ前ノ村ノ長（おさ）ニ告ゲヨ」

と言った。仁は、何の意味か全く分からなかったが、おかしい夢を見るものだなあと思った。仁は、かなり落ち着きを取り戻せたので、成り行きを見守ることにした。すると、

「返事ヲセヌノハ何故カ？ 言葉ノ意味ガ分カラヌノカ？」

と声は尋ねた。仁は、ますますおかしいなと思ったが、思い切って、  
「なんだか分からない、僕には関係ないと思う」

と思うままを言ってみた。すると、声は同じ言葉を今度はゆっくりと繰り返した。  
「我ハ、森羅万象ノ盛衰ヲ、1000年ニ渡リ見定メテキタ、八百万ノ神ノ一族デアリ、天ニ帰還スルタメ、オ前ヲ見出シタ。帰還ノ儀式ヲ、執リ行ウベク、オ前ノ村ノ長ニ告ゲヨ」

仁は、言葉の意味が少しはわかったが、口をあんぐりと開ける以外のことはできなかった。すると、また、

「我ハ、森羅万象ノ、盛衰ヲ、1000年ニ渡リ、見定メテキタ、八百万ノ神ノ、一族デアリ、天ニ、帰還スルタメ、お前ヲ、見出シタ。帰還ノ儀式ヲ、執リ行ウベク、オ前ノ村ノ長ニ、告ゲヨ」

と繰り返した。仁は、言葉の意味がわかるにつれ、頭には疑問が次々にわいてきた。こいつはいったい何者だ。言葉は日本語には違いないが人間離れした話し方だ。何でもこいつは僕を狙い打ちにするのか。森羅万象の盛衰とは何か。帰還の儀式とは何か。そして、とにかく巻き込まれたらたいへんそうだな、知らぬ存ぜぬを貫こうと心に決めた。それから、石神という奴が何を言おうが、仁はダンマリを貫いた。やがて、石神は、  
「今夜ハ、コレマデトスル」

と告げた。すると、体が急に楽になった。寝汗をかいていたことに気付いた。そっと目を開けて見ると、仁は自分のベッドに横になっていた。仁は、まったく何て不気味な夢を見たものだ。もう一度寝て忘れようと思って寝返りを打った。さっきはあんなに重くなっていた手足が、軽く動くので気持ちも軽くなった。

＊

明くる日曜日の朝、仁は気持ちよく起きて、昨夜の不気味な夢のことはすっかり忘れていた。そうだな、今日は、やっさんの家に行くんだと、ソフトボールの後にやっさんと



した約束を思い出した。やっさんは、やっさんのコンピューターを見せてくれると言ったのだ。仁は、やっさんが自分専用のアーケードゲーム機でも持っているのかと思ったが、どうもそうではなさそうだ。しかし、仁は、コンピューターが何なのか、実はよくは知らなかった。

やっさんの家は寿司屋の裏手にある一軒家で、お袋さんと一緒に住んでいた。庭に花水木があり、きれいに剪定されていて、ほどよく花が咲いていた。仁は、手入れのいい庭が気に入った。やっさんには2つ年下の弟がいるが、千葉県の小学校の先生になっていて、千葉県に住んでいるとのことだった。

やっさんは2階の2部屋を自分の部屋にしている、たくさんの本とコンピューターに囲まれていた。やっさんはコンピューターのことをパソコンと呼んでいた。PC8801、PC9801、マッキントッシュというパソコンが2台ずつあった。ほかにもプリンタやイメージスキャナーやワープロがいくつかあった。

仁は、四角い箱のようなマッキントッシュに親近感を覚え、近寄って触ろうとすると、やっさんはこれが自慢だとばかりにマッキントッシュを起動させると、

「ほれほれ、漢字が使えるんだ」

と言うが、仁にはよく分からない。

「ほかのパソコンは、漢字が使えないの」

と尋ねると、使えると言う。つまり漢字が使えるマッキントッシュは、まだ発売されてはいないが、やっさんはそれを持っているところが自慢らしい。しかも、やっさんは、1人で自作したかのように言う。

「ときどき来いよ。いろいろ教えてやる」

とやっさんは言った。こんなにパソコンを持つとは、やっさんは金持ちなのかと尋ねると、やっさんは、コンピューターエンジニアで昨年課長職に昇格し、冬のボーナスをたんまりもらったのだと言う。来月にはまたボーナスをもらうから、仁がパソコンをやりたいなら、買ってあげると言った。

次に、やっさんは頭が良かったのかと尋ねると、仁の工業高校の先輩だと言う。仁は、将来は寿司職人になるか、職工になるかと思っていたけど、やっさんのようなコンピューターエンジニアになるのもいいと思った。

そして、仁は、やっさんに、パソコンをやりたいから是非パソコンを買ってくださいと言ってしまった。後で両親に怒られると思ったが、意外にも両親は喜んだ。父親は、やっさんに会いに行き、お金は父親が払うから、仁にパソコンを教えてやってほしいとお願いした。

仁は、やっさんの家で、パソコンの使い道がゲームばかりではないことに驚いた。ワープロソフトを使えば、パソコンがワープロの代わりになることが分かったが、同じようにソフトを入れ替えると、仁が想像もしなかったことがパソコンでできることを、やっさんは仁に見せてくれた。スプレッドシートソフトで表計算がたちどころにできることに驚いたが、仁にはワープロソフトもスプレッドシートソフトも魅力的ではなかった。やっさんが、近いうちに、会社では1人1台のパソコンが与えられ、事務書類の作成などは手書きではなく、みんなパソコンを使うようになると言われても、仁には全く実感が湧かなかった。それよりも、仁にはペイントソフトでお絵描きができる方が面白かった。やっさんの家には、BYTE（バイト）という名前のコンピューター雑誌があつて、いろんなプログラムの例題が掲載されていた。例えば、数式と与えるパラメータに応じてフラクタル図形を描くプログラムがあり、中でもマンデルブローと呼ばれる図形を自動的に描くプログラムに仁は魅了された。仁は、いろんな役目のプログラムが集まって、みんなが使うソフトができあがっていることがなんとなく分かったような気がした。それから、パソコンが音楽を演奏するのにも魅了されたが、生憎と仁は音楽的な才能を持ち合わせておらず、魅了されはしたけれども、自分には手は出せないなと思った。

＊

仁が不気味な夢を忘れてパソコンに熱中しはじめてから1ヶ月ほど経ち、紫陽花が咲き始めた6月のある日の夜、仁は再び石神の夢を見た。夢の中で、石神はまたもや、仁に向かって、

「我ハ、石神（しゃくじん）デアル。我ハ、森羅万象ノ盛衰ヲ1000年ニ渡リ見定メテキタ八百万ノ神ノ一族デアリ、天ニ帰還スルタメ、才前ヲ見出シタ。帰還ノ儀式ヲ執リ行ウベク、才前ノ村ノ長ニ告ゲヨ」

と告げた。仁は、「また、この変な夢か」と気持ち悪く思い、再びダンマリを決め込むことにした。すると、石神は同じ言葉を繰り返し繰り返し仁に伝え続けた。仁は、ついに我慢しきれなくなって、前にこの夢を見たときに湧いた疑問をぶつけることにした。

「しゃくじんとはなんだ。お前はいったい何者だ」

「石神（しゃくじん）トハ、石ニ宿ス神デアル。我ハ、1000年前ニ降臨シ、コノ石ニ宿ス八百万ノ神ノ一族デアル」

あたりを見ても何も見えなかったが、不思議なことに、地面に埋まっている大きくて青い色をした四角い石を身近に感じる事ができた。

「この青い四角い石のことか」

と尋ねると、

「ソウデアル」

と答えた。

「なぜ、僕を狙い打ちにするのか」

「我ハ、我ノ魂ノ一部ヲ石カラ離脱サセル。次ニ、我ハ、近クニイル人間ノ細胞ト交信スル。次ニ、ソノ人間ガ魂ノ一部ヲ体カラ離脱サセル能力ヲ秘メタ人間カドウカラ見定メル。次ニ、ソノ人間ノ魂ノ一部ヲ強制的ニ体カラ離脱サセ、コノ青イ石ノ近クニ連レテクル。次ニ、我ノ魂ハ、ソノ人間ノ魂ト交信スル。オ前ハ魂ノ一部ヲ離脱サセル能力ヲ秘メタ人間デアル。我ノ魂ハ、離脱サセル能力ヲ持タナイ人間ノ魂トハ交信デキナイノデアル」

仁は石神の回りくどい言い方に驚いたが、質問を続けた。

「森羅万象の盛衰を見定めるとは何のことか」

「我ハ、森羅万象ニ宿ス小サナ魂タチト交信スル。次ニ、我ハ、大地ノ動キト天変地異ヲ知ルノデアル」

「森羅万象に宿す小さな魂たちとは、お前の仲間なのか」

「ソウデアル。オ前ニ分カリ易ク伝エルナラバ、我ラノ飼イ犬ノヨウナモノデアル。彼ラハ、主ニ大小サマザマナ小石ニ宿スコトヲ好ムノデアル」

「帰還の儀式とは何か」

「帰還ノ儀式トハ、我ノ魂ガコノ青イ石カラ完全ニ離脱スル儀式デアル。我ノ魂ガ青イ石カラ完全ニ離脱スルト我ノ魂ハ天ニ帰還スルノデアル」

「お前が魂を離脱させて勝手にどこへでも帰還すればいいじゃないか」

「我ノ魂ノ力ハ、コノ青イ石カラ完全ニ離脱スルニ足りズ、幾バクカノ人間ノ魂ノ助ケガ必要ナノデアル」

「人間の魂の力の助けだって？」

「人間モ自力デハソノ魂ヲ体カラ完全ニ離脱スルコトハデキナイノデアル。人間ハ体ガ死スト、体ニ宿ス魂ハ完全ニ離脱シ、天ニ帰還スルノデアル。我ノ魂ハ、帰還スル亡者ノ魂ヲ捕マエテ、石カラ完全ニ離脱スルコトガデキル」

「つまり、生け贄を捧げろという意味だとしたら、帰還の儀式なんてもってのほかだぞ」

「カッテ、我ガ兄弟ハ、生ケ贄ノ儀式ニヨッテ帰還シタノデアル。次ニ、人間ノ魂ガ強ク念ジルト我ノ魂ノ離脱ニ必要ナル作用ガ発サレル。大勢ノ人間ノ魂ガ一斉ニ念ジルナラバ、我ノ魂ハ石カラ完全ニ離脱スルコトガデキル」

「つまり、大勢の人間が集まってお前のために祈りを捧げろということか」

「ソウデアル」

「そうか、人間の手助けをお願いしたいのだな。その割には態度がでかいな」

「ソウデアル」

「何が、そうであるだ。それで、お前はどこへ帰還するというのか」

「ココニ降臨スル前ニ、我ガ生マレ育ッタコロデアル。亡クナッタ人間ニ宿シテイタ魂ガ帰還スルトコロト同ジデアル」

「つまり、あの世か」

「ソウデアル」

「僕にはまったく関係ないから、面倒なことに巻き込まないでほしい」

「帰還ノ儀式ヲ執リ行ウノハ、オ前ノ役目デハナイ。我ガ知ルトコロニヨレバ村ノ長ノ役目デアル。次ニ、オ前ハ村ノ長ニ告ゲルダケデイイノデアル」

「村長はいないぞ。北区の区長はいるけど、言っても無駄だと思うけどな。だいたい夢の話なんか相手にされっこないに決まっている」

「コレハ断ジテ夢ノ話デハナイノデアル」

仁は、念のために頬をつねってみたが、別に少しも痛くはなかった。ところが、不思議なことに、石神のビリビリとした怒りを身近に感じた次の瞬間、全身がしびれ、手足が石のように重く固くなり動かなくなった。

「我ハ、オ前ノ細胞ト交信スルノデアル。我ハ、夢デナイ証トシテ、オ前ニ告ゲルノデアル。7月、長野地方ニテ、地滑リガ起コルノデアル。オ前ガ村ノ長ニ告ゲナケレバ、大勢ノ人間ガ死スノデアル。我ガ告ゲルコトヲ重ク受ケ止メヨ。今夜ハ、コレマデトスル」

と石神は告げた。すると、急に体が軽くなった。そっと目を開けて見ると、仁は自分のベッドに横になっていた。仁は、何て不気味な夢が続くんだろうと気が重くなった。寝返りを打つとさっきのしびれがまだ残っているように感じた。

明くる朝、仁は石神の夢も地滑りの予告も覚えていた。何かむずむずするような気味悪さを感じてはいたが、誰かに話すと面倒なことになるような気がして誰にも話さなか

った。そして、それを忘れようとするかのように、パソコンについての勉強を猛然とはじめた。

仁は、雑誌に載っているプログラムの意味を、やっさんに解説してもらうにつれて、プログラム作りにのめりこんでいった。やっさんから雑誌とプログラミングの本を借りて、夜遅くまで読むようになった。そして、ついに仁のパソコンが仁の部屋にやってきた。それは、残念ながら仁が最初にお気に入りになったマッキントッシュではなく、やっさんに選んでもらったPC9801というパソコンであった。パソコンがきたので、仁は早速、実際にプログラムを動かしてみた。しかし、仁の作ったプログラムは、なかなか仁の意図したようには動いてくれなかった。すると、仁は諦めるどころか、逆にさらにのめりこんでいく始末だった。

百日紅（さるすべり）の赤い花が咲き始め、学校が夏休みに入ると、アスナが頻繁に仁の部屋を訪れるようになった。それもこれも、仁が閉じこもるのを心配してのことだったが、仁のパソコン操作の腕前を認めて、

「仁くん、すごい！」

と言ってくれた。

やっさんはプログラミングもいいけれど、次はパソコン同士をむすぶパソコン通信をやってみようと言い出した。そして、パソコンを2台つないだ「パソコン通信セット」を自作する計画を一緒に立ててくれた。仁はやっさんに連れられて、自作パソコンのメッカであった秋葉原電気街に行くようになった。

＊

場面は変わって、ここは1964年8月に戸隠バードラインが完成した長野県地附山（ぢづきやま）付近である。7月20日頃から戸隠バードラインに亀裂が入りはじめ、山の斜面のところどころで崩落がはじまった。地元行政は監視体制を急いで作り、地滑りの警戒をはじめたところ、7月26日午後5時頃、大轟音とともに大規模な地滑りが発生した。地附山の南東側斜面が幅約450メートル、長さ約350メートルに渡って崩れ落ちた。戸隠バードラインは寸断され、付近の老人ホームの一部が押しつぶされて26名の死者を出

した。仁の夢の中で石神が予知した地滑りが現実のものとなったのだ。

＊

仁は、夏休みに入ったこともあり、やっさんが立ててくれた「パソコン通信セット」の自作計画にまい進していた。計画が遅れているわけではなかったが、仁は昼も夜も熱中していて、テレビも新聞も目に入らなかったから、長野県で石神の予言した地滑りが起こったことに全く気付かなかった。そんな7月の終わりのある日、仁は三度目の石神の夢を見た。夢の中で、石神は仁をいきなり責めたてた。

「我ガ予言通りニ地滑リハ起コッタノデアル。予言ヲ知ラサレヌ人間ハ犠牲トナッタノデアル。次ニ、我ガ告ゲルコトヲ、才前ハ村ノ長ニ告ゲテイナイ。災イハ繰リ返サレルノデアル。我ガ告ゲルコトヲ重ク受ケ止メヨ。我ガ帰還ノ儀式ヲ執リ行ワセシメヨ」

仁の心の中は、半信半疑であった。心の一方では、ついに面倒なことに巻き込まれたと嘆き、心のもう一方では、これはまだ夢の一部に違いないとタカをくくっていた。しかし、石神との時間がたつにつれ、夢の中での仁の立場はどんどん悪くなった。仁は小さい頃のように泣いて誤魔化すことはできず、嘘をつくにも事態を逃れる嘘は考えられず、ダンマリを決め込むことに意味はなかった。しかし、仁は責められ続けても、以前よりも冷静に論理的に考えることができた。それはここ1ヶ月の間プログラミングに粘り強く励んだからではないかと仁は思った。そして、仁は石神が長野県の地滑りを予知した秘密に興味を覚えた。

「お前は どうやって長野の地滑りを予知したのか」

「我ガ地滑リヲ予知スルノハ、長野ノ多クノ小石ニ宿ス小サナ魂タチガ感ジル大地ノ動キヲ交信ニヨッテ知ルノデアル」

「そんな遠くの小石にも小さな魂とやらが住み着いているのか」

「ソウデアル」

「それでお前は、そんなに遠くの小石たちともいつも交信しているのか」

「ソレハ間違イデアル。小石ニ宿ス小サナ魂ハ、近クニイル魂タチトダケシカ交信デキナイノデアル。大地ノ動キハ、ヒトツノ小サナ魂カラ次ノ小サナ魂ヘト次々ニ伝エラレテクルカラ、ヤガテ我ニ伝ワルノデアル」

仁は、それを聞いて「伝言ゲーム」を思い浮かべた。

「小石たちが感じる大地の動きとは何か」

「才前ニ分カリ易ク伝エルナラバ、ソレハ重力場ノ変動、電磁場ノ変動、放射線ノ変動

、圧力ノ変動、温度ノ変動、湿度ノ変動、成分ノ変動・・・」

仁は石神をさえぎって、

「もういい、分かった」

と言った。

「我ハ、オ前ニ、我ガ告ゲルコトヲ、オ前ノ村ノ長ニ告ゲヨト二度伝エタノデアル。

次ニ、オ前ハ二度裏切ッタノデアル。我ガ一族ガ初メテコノ石ニ降臨シテカラ数エ

テ6000年ガ過ギル間、二度裏切ッタ人間ハイナカッタノデアル。今夜ハ三度目デアル。

我ガ告ゲルコトヲ重ク受ケ止メヨ。我ガ帰還ノ儀式ヲ執リ行ワセシメヨ。サモナクバ災

イガ繰り返サレルト知レ。今夜ハ、コレマデトスル」

「ま、待ってくれ。お前と交信できる人間は世界中で僕だけなのか」

「ソレハ間違イデアル」

「そ、そうだろ。ならば、僕以外の誰かにも頼むべきだと僕は考えるが」

「ソウデアル」

「じゃ、もう頼んだのか」

「ソウデアル」

仁は、突破口を見つけたと思った。プログラムのデバッグでバグを見つけた時と同じような快感が湧いた。

「誰に頼んだんだ」

「何ヲ答エレバイイカ分カラナイ。細胞ノ数ヲ答エレバイイカ？」

「そんなもの教えてもらってもしょうがない。それじゃ特徴を教えてくれ」

「我ト交信デキル人間同士ハ、接触スルコトニヨリ互イニ交信デキルノデアル」

「何だって、それじゃ、僕と接触して交信できる奴を探せということか、そんな奴に出会ったことはないぞ」

「一生ノ間ニワタッテ交信デキルモノデハナイノデアル。我ト交信スルト、ソノ後1ヶ月クライノ期間ダケハ、細胞ガアル作用ニヨリ活性化スルノデ交信デキルノデアル」

「と、とにかく誰かに頼んだことは確かなんだな」

「ソウデアル」

「それじゃ、僕はもうお前の手伝いをしなくてもいいんだな」

「ソレハ間違イデアル。オ前ハ裏切ッテハナラヌ。今夜ハ、コレマデトスル」

仁は、目が覚めて、昨夜の石神とのやりとりを思い出した。そして、あの石神は夢ではなく現実のことなのだろうかと分からなくなった。しかし、例え、あの石神が現実の

ことであったとしても、最大のピンチは逃れたと思った。少なくとも仁の責任は半分に減ったと思った。

仁は、家に残っていた2日前の新聞に長野県の地滑りの記事を見つけた。しかし、仁は、この記事が、石神の存在が夢ではないことの証拠になるとはどうしても思えなかった。あの石神が現実存在するなんて、どう考えてみても現実的とは思えなかった。

石神は、石神のことを、たぶん北区長に言えと言った。そして、仁が北区長に言わなかったことを裏切りだと責めた。しかし、石神のことを北区長に言いに行くのは全くばかげていると思った。北区長が、そうかと言って、大勢を集め石神の帰還のために祈りの儀式を開くはずないじゃないかと思った。では、仁の両親に相談してみるか？ 学校の先生に相談してみるか？ やっさんやアスナや雄一に相談してみるか？ いやいや、それもばかげていると仁は思った。それでは、また石神に責められたらどうするか？

僕には無理だから別の奴に頼めというしかない。その別の奴にはすまないが、やはりそれしかないと仁は思った。仁は、自分の心が決まって少し安心した。

8月に入り、町のあちこちで朝顔を見掛けるようになった頃、パソコン通信セットが仁の部屋でついに完成した。パソコン通信セットは、仁のPC9801とやっさんのマッキントッシュを細いケーブルで接続したもので、両方のパソコンともに仁の部屋に置いてある。原理的には、仁の部屋のPC9801とやっさんの部屋のマッキントッシュを電話網を経由して接続してもいいのだが、そうすると通信料金がかかるので、このパソコン通信セットでは、やっさんのマッキントッシュを仁の部屋に持ち込み、ケーブルで接続することにしたのだ。

日曜日にやっさんが仁の部屋に来て、パソコン通信セットのテストを行なった。一方のパソコンのキーボードから文字を入力すると、パソコン画面に入力した文字が表示される。文章を完成させて、画面の下部に表示された「送信」に対応するファンクションキーを押すか、「送信」という表示をマウスでクリックすると、完成した文章が相手のパソコン画面に表示されるという仕掛けである。テストは難なく成功した。仁は1人で何度も何度もテストしていたのだから、うまくいって当然なのだけれども、やっさんが、

「素晴らしい、よくやった」

と言うと、仁は嬉しくて興奮した。

「やっさん、みんながパソコン通信をするようになったら、物凄く便利になりますね」



と言った。しかし、やっさんは、  
「今のパソコン通信には、言わなかったけれども、実は大問題があるんだよ」  
と言った。

「なぜだか分かるか」

仁にはやっさんの言いたいことがさっぱり分からなかった。

「例えば、日本中にコンピューターが100台あって、どのコンピューターでも残りの全てのコンピューターと交信できるようにしようとするとうなる？」

仁が黙っていると、

「答えは全てのコンピューターに99本の通信線を引かなきゃならないわけだ。じゃあ、コンピューターが1人に1台ずつ与えられて全部で1億台になったらどうなる？」

「全てのコンピューターに9999万9999本の通信線を引くなんてできないよね」

仁は石神と小石との交信の話を思い出した。そこで、

「コンピューターは近くのコンピューターとだけ交信するようにして、その代わりにコンピューターからコンピューターへ次々に交信内容が伝わるようにしたらいいんじゃないですか」

と言った。すると、やっさんは目を丸くして驚いた。

「そ、そうなんだよ、よく分かったな、驚いた」

と言った。

「実は、そういう仕組みの未来のコンピューターネットワークをアメリカの国防省とたくさんの大学が協力して作ろうとしているんだよ。僕は去年、会社の仕事でアメリカの大学に行って、この目で見てきたんだよ。君はすごい。才能あるよ。いつの間にコンピューターサイエンスの最新テクノロジーを勉強したんだろう」

と仁を誉めちぎった。仁は内心、

「夢で石神に聞いたのさ」

と思ったがそれは言わなかった。しかし、仁はパソコン通信に、がぜん興味が湧いて、なんとか自作したパソコン通信セットを利用できないものかと考えた。

仁の家に物干し場ができ、アスナが玄関を通らずに仁の部屋に来られるようになってから初めての大事件が起きた。それは、仁がアスナにマスターベーションを見られてしまったという大事件だ。アスナにとって、男性の性器が勃起している様を目撃したのは生まれて初めてではあったけれど、アスナは何事もなかったかのように動じないふりを一生懸命に演じ、仁は仁でアスナが知らんぷりをしてくれたお陰で、説明に窮するこ

ともなく助かったのだった。

仁は、アスナが突然部屋に入って来ないようにする案を考えている内にパソコン通信が使えるんじゃないかと思い付いた。つまり、アスナの部屋と仁の部屋の間にパソコン通信セットを設置して、アスナが仁に用がある時は、いきなり部屋に行くのではなく、パソコン通信で相手に知らせるというアイディアだった。そうと決まれば早速とばかりに、仁はアスナに申し入れをした。それは今までの閉じこもりの仁にあるまじき積極姿勢であったから、アスナは密かに、

「アレをアタシに見られたのが仁には余程こたえたに違いない」

と思い、賛成してあげないと悪いかなと思って承諾した。

仁は、次の日にアスナの部屋にマッキントッシュを持ち込んだ。何年かぶりでアスナの部屋に入った仁は、アスナの部屋がずいぶん女の子っぽくなったと思った。子供の頃のアスナの部屋は、仁の部屋と大して変わらず、おもちゃの種類が違うくらいのものであった。しかし、今では女の子らしい持ち物が増えて、何やら仁が触ってはいけないものばかりになったような気がした。しかも、アスナはいつもと違ってタンクトップに異常に短い短パンという姿で、胸のふくらみや下半身のふくよかさを強調していたが、何よりもいつもに比べて肌の露出が多かった。

アスナが窓際の机の上を片付けて、ここに置いてというので、仁はマッキントッシュを机に置き、窓からケーブルを通してマッキントッシュと接続した。

一方、アスナはマッキントッシュよりも、仁がアスナのセクシーさについてなんて言うのか興味深々だった。しかし、仁はもくもくと作業するばかりで、今日のアスナのセクシーさについては何も言わなかった。そこでアスナはやむなく、

「どう、このスタイルは？」

と雑誌のモデルのようなポーズをしながら仁に近寄っていくと、  
「アスナって地黒だね」

と仁はぶっきらぼう言った。アスナは心の中で、  
「お前は絶対に一生モテないぞ」

とつぶやいた。

アスナは、パソコン通信セットができることについて、仁から説明を受けると、パソコン通信は祥子のような耳の聞こえない人にとっての電話になると気付いた。そこで、アスナは、祥子をアスナの家に呼んで、パソコン通信セットを見せることにした。

次の日曜日に、仁はアスナの部屋で祥子に会った。アスナはいつもと同じTシャツに長めの短パン姿であぐらをかいてすわっていたので、仁は安心した。祥子はブラウスにチェックのスカートで座布団の上に正座していた。祥子は怒ったような膨れっ面をしていて表情がほとんど変わらない子だった。あのメガネがなければ、きっと色白美人なのだろうなと仁は思った。仁は、祥子が話せることに驚いた。耳が聞こえないから話せないものと思い込んでいた。祥子は話す人の唇の動きを見て何をしゃべっているかを読み取った。手話はもちろんできたが、アスナも仁も手話なんてさっぱりだった。祥子が無表情に見えるのは、唇の動きを読むのに集中しているからではないかと仁は気が付いた。一方、祥子のしゃべり方は、抑揚などが普通の人とは必ずしも同じとは言えず、独特の癖があった。あの石神も人間離れしたしゃべり方だったが、祥子のしゃべり方は石神とは全く違うタイプだったが、それでも人間離れしたしゃべり方だと仁は思った。

仁がパソコン通信セットの説明をすると、祥子はすぐに理解したようだった。祥子はマッキントッシュのキーボードに向かうと、「こんにちは、私は祥子です。パソコン通信は面白いわ」と目にもとまらぬ素早さで入力した。仁なら早くても1、2分はかかるころを2、3秒で入力した感じだった。それを見た仁もアスナも呆気にとられてしまった。

祥子の父親は銀行員で、祥子の家には会社と電話線で接続されたワープロがあるのだそう。そのワープロは当初は会社とは接続されていなかったのだけれど、8月になって接続したばかりだという。祥子の父親は会社への報告書をワープロで作り、作った書類をフロッピーディスクに収めて会社にとっていったが、今ではワープロが会社と接続されているから、パソコン通信と同じように「送信」とやれば、書類は会社に届けられるのであった。そして、祥子の父親はキーボードが大層苦手だったので、父親の手書きの文書をいつも祥子が代わりにワープロに入力しているのだそう。祥子のキーボード入力が速いのはそういうわけだった。仁はそれを聞いて、やっさんの言っていたことが本当であり、誰でも1人1台のパソコンを持ち、居ながらにしてパソコン同士で交信する日が確実に近付いていると実感した。

ひとしきりパソコン通信の話題が終わり、祥子は仁に慣れたようだった。あるいは祥子は仁を見ていて、仁が祥子に慣れたと見たのかも知れなかったが、いずれにしても、祥子はパソコン以外のことを仁とアスナに話し始めた。仁は祥子のことをほとんど知らなかったが、祥子は仁のことをよく知っているようだった。アスナが話したに違いない

。あいつはそういう奴だと仁は思った。それはお節介ババアめという気持ちと、心配してくれて有難いという気持ちがブレンドされた甘酸っぱいものだった。

仁から見れば哀れむべき存在であった祥子は知らない間に驚くべき経験を積んでいた。仁とは違い、祥子は剣道の達人になっていた。仁とは違い、祥子は全国一斉テストで全科目満点という偉業を何度も達成していた。祥子はこうと思ったら1人で死に物狂いで取り組み、難関を突破することに長けていた。それが、引きこもりの仁とは徹底的に違っていたが、「1人で」という点は仁と同じだった。耳が聞こえないとチームでやるスポーツやゲームは上手にはできなかつたし、父親の転勤で転校ばかりしていたから、仲のいい友達もできないでいた。

次に、祥子は、

「石神って知ってる？ 石に宿る神様って」

と話し出した。

「私は最近おかしな夢を見るの、人間離れした男の声が体の中で、我は石神であると話し出すの、私は耳が聞こえないのに、その声は聞こえるという夢なのよ」

アスナは、

「へえ一つ」

と聞いていたが、仁は目を見開いたまま、みるみる汗が湧き出して止まらなくなった。祥子は仁の異変に気付き、話しを止めて仁を見つめた。次いでアスナも仁の異変に気付き、

「仁くん、どうしたの、気持ち悪いの、たいへん、熱でもあるの」

と騒ぎながら、仁の坊主頭に手を当ててみる。

「なんだか分からないわ、祥子ちゃん分かる？」

祥子も遠慮がちに仁の坊主頭に手を伸ばした。ところが、祥子の手が仁の頭に触れた瞬間、祥子も目を見開いて手をぶるぶると震えさせた。祥子は自分の体の中から聞こえてくる仁の

「あの石神だ、祥子ちゃんもあの石神に会ったんだ」

という震える声を聞いたのだった。

仁は、石神が夢ではないことがはっきりしたと思うと、何かが弾けたように石神について2人に話さずにはいられなかった。そして、アスナは、怯えた様子の祥子を置いたまま、好奇心を丸出しにして、仁に、

「それで、それで」

と繰り返し、仁を急かせるようにして話を聞いた。仁が、石神と交信できる人間同士が接触すると、石神のように交信できることを話したところで、祥子もようやく落ち着きを取り戻した。祥子は、石神が夢であると信じていた上に、人間同士でも交信できることを知らなかったから、仁を気味悪く思い、仁と交信した気持ち悪さと悪寒に耐えられずに怯えていたのだ。祥子は石神が夢でもなく、仁も石神に出会っていたことを知ると急に親近感を覚え、仁に手をつないでほしいと言った。だって、その方が唇を読むより話がよく分かるからと祥子は平然と言った。

祥子は、石神の帰還を手伝いたいと言った。なぜなら、石神は帰還しないと1000年も家族と会えないのは可哀想過ぎるからだと言った。仁は、石神に家族がいることも、1000年も家族と会えないことも知らなかった。仁の知っていることと、祥子の知っていることは多少は違っていたが、概ねは仁の知っていることの方が多かった。仁が石神に会ったのはソフトボールの試合の直後だったが、祥子が石神に会ったのはほんの最近のことだった。仁は、石神が仁以外の人間を見つけたといったのが祥子だったのだと分かった。話を聞きながら、アスナが鋭い指摘をした。つまり、石神は仁があまりにも帰還の儀式に非協力的だったので、石神が仁の代わりに祥子を見つけたのねと言うのが、アスナの指摘だったが、仁は黙ったまま返事をしなかった。

祥子が石神の帰還に心を奪われたのは、祥子自身が父親の転勤生活に合わせ転校生活を余儀なくされていたからだった。それは、友達ができても、できても、必ず別れがやってくるという生活だった。求め合う人々が別れることの魂の切なさを祥子は誰よりも身にしみて知っていた。それは仁には分からない気持ちだった。仁はむしろ誰とも友達になんかなれっこないし、1人が1番だという考え方だったのだ。ところが、可哀想なはずの祥子はそうではなかった。人とかかわり合いたいのだという。責められてるのは何の苦でもないのだという。言い訳も嘘も嫌いだからという。僕だって嫌いだが自分を守るためにはしょうがないじゃないかと思っていた。しかし、祥子はそうじゃないという。責められて逃げられないときはどうするのだろうか？ 祥子は責められて逃げられなくても怖くないのだそうだ。祥子はまだ中学生だというのにほんとに強い子だと仁はつぶやいた。すると、今度は仁の体の中から祥子の声がするのを仁は聞いた。

「私は強くないわ、でも強いふりでは負けないわ」

アスナはライター魂を発揮して、石神の取材に行こうと提案した。そして、明日、石神の情報を整理してインタビューする内容をまとめ、明後日の午後に仁と祥子と3人で

石神の取材に行こうと言った。また、祥子ちゃんも夏休みだから、しばらくアスナの家に泊まっていきなよと言った。祥子は両方とも大賛成だった。一方、仁は現実の石神に会うのが恐ろしかったが、不承不承一緒に行くことにした。ところが、翌日の8月12日午後7時頃に、日本航空123便が群馬県の御巣鷹山の尾根に墜落し、520名もの死者を出すという大惨事が起こった。仁は、そのニュースを見て、翌日、石神に会うことに底知れぬ恐怖を抱いた。

祥子は石神の居場所は大きな木のある神社みたいなところだが、場所は分からないと言った。仁には石神の居場所に心当たりがあった。しかし、仁は石神の居場所を確かめたりはせず、むしろあれからずっと無意識のうちにその場所には近付かずにいた。

アスナと祥子は、仁に道案内してもらって、その場所にたどり着いた。祥子は、確かにこんなところだったと言った。そこは、上中里の高台にある平塚神社の境内であった。祥子は突然、

「あ、なんとなく四角い石を感じるわ」

と言って境内にある石神明神の祠の裏側に向かって歩き出した。仁も同じようにあの四角い石を身近に感じる事ができた。そこに着くと、四角い石は地中に埋まっていることが分かった。落ちていた木の枝で地面をほじくってみると、深さはわずか2、3センチの土をかぶっているだけだと分かった。土をはらっていくと、その石は、横幅が40センチくらい、縦が90センチくらいのきっちりした長方形をしていた。色はくすぶっていたが、アスナが持ってきた水筒の水をかけると鮮やかな青色が浮かび上がってたいへん美しかった。すると、突然、仁と祥子の体の中から、あの石神の声が響いてきた。

「我ヲ眠リカラ呼び起コスノハ誰カ？」

すると、すぐさま祥子が言った。

「おはよう。石神さん」

仁は急に恐ろしくなってじっと黙っていた。

「石神さん、今日は私の方から会いに来たわ。仁さんも一緒よ。それから、アスナさんという私の従姉も一緒にね。いろいろうかがって、石神さんが無事に帰還できるようにお手伝いしたいと考えているの」

石神は気配を感じたらしく、

「オオ、オ前ダツタカ。ソシテ、オ前モカ。我ガ告ゲルコトヲ重ク受ケ止メタト見エル。カタジケナイ」

仁は祥子と手をつないではいなかったから、祥子の声は聞こえず、石神の言葉だけが聞こえた。アスナには、祥子の声も石神の声も聞こえなかったが、アスナにも祥子が石神と何か交信をしているらしいことはさっしがついた。

「ねえねえ、石神さんと何を話しているの」

「ええ、石神さんは寝ていたみたい。でも私たちが来たことは分かったみたい」

と祥子は言った。すると、アスナは、石神にどうしても直接にインタビューしたいと言い出した。アスナは一旦言い出すと絶対に引かない。仁は石神に、

「約1名が直接話をしたいと言って譲らないのだが、何か方法はあるか」

と石神におそろおそろ尋ねると、石神はアスナの全身の細胞と交信しようとしたが不調だったので、アスナに對外離脱の能力はなく、石神と直接交信することは叶わないと分かった。

「シカシ」と石神は続けた。

「オ前ト、コノ娘ガ協力スルナラバ、間接的ニ交信スルコトガデキルカモ知レヌ」

と言った。そこで、石神の言う通りにしてみた。仁がアスナの一方の手を握り、仁はもう一方の手で石神に触る。しかしそれでも、まだ不十分だったので、次に祥子も同じように一方の手でアスナの手を握り、もう一方の手で石神に触れた。すると、アスナの体の中から、石神の野太い声が聞こえた。

「我ハ、石神デアル」

アスナは、あたかも有名スターに出会ったかのように、感動して舞い上がってるようだった。

「こんにちは！ はじめまして、アタシはアスナと申します。今日はほんとにありがとうございます。あの～いろいろお聞きしてもよろしいですか」

と大きな声で石神に語りかけた。石神は、しばらく考えているようだった。アスナと石神の会話は、中継している仁と祥子にもよく聞こえた。

「大声ヲ出サナクトモ、オ前ノ言葉ハ聞コエル。尋ネラレテ答エラレナイコトモアルガ、悪ク思ウナ」

「あっ、それで結構です、お許し頂いてありがとうございます。えーとそれではですなー」

アスナの言葉は、丁寧なのかタメ口なのか微妙なトーンを醸し出していた。

「先ずは、あなたのちゃんとしたお名前を聞かせていただけますか？ えっと、何てお呼びすればよろしいのか分からなくて・・・」

すると、風のようなヒューヒューという音や重い物が落ちたときのようにドスンド

スンという音が聞こえた。

「ひゃあ、ヒューヒュー&ドスンドスンですかあ。えっと、石神さんとお呼びしますがよろしいでしょうか」

アスナは、石神の返事を待たずに続けて尋ねた。

「では、石神さんは、今、おいくつでしょうか」

「オ前タチノ数エ方デハ、オヨソ3000年デアル。故郷ニ2000年、コノ石ニ1000年デアル」

「すごい。では石神さんたちの寿命っていったいいのかわかりませんが、永遠に生きられるのでしょうか？」

「我ラニモ寿命ハアル。オヨソ1万年デアル」

「すごい。さすが神様ですね」

「オ前タチ人間ノ魂モ天ニ帰還シタ後ハ、1万年クライ生キルカラ同ジデアル。オソラク人間ノ魂ハ我ラニ近イ種族ナノデアル」

「へえー、そうなんだあ」

「ソウナンダァ」と石神も言う。

「あら、石神さんたら、かわいい」

「人間ノ言葉遣イハ、ワズカナ期間デ変化スルカラ練習シテミタノデアル」

仁は、思わずアスナに向かって、

「お前は石神が恐ろしくはないのか？」

と心の中でつぶやいたが、アスナには伝わらなかった。

「コホン、では、昨日、ジャンボジェット機が群馬県に墜落して大惨事になったことはご存知ですよ」

「何カ巨大デ重イ物ガ山ニ衝突シタコトハ分カルノデアル」

「なぜ、石神さんは予知しなかったのですか」

「アレハ天変地異デハナイノデアル。小石ナドニ宿ス小サナ魂タチト交信シテモ突然ノ衝突ハ予知シ得ナイノデアル」

「なーんだ」

アスナはますますタメ口になってきた。仁は今度は声に出してアスナに言った。

「なーんだはないだろう。それでもインタビューアーのつもりか。石神が怒ったらどうするんだ」

「えっと、ごめん。調子に乗り過ぎだったわね。仁くん、ありがとう」

そう言われると、仁にはもう何も言えなくなり、後はアスナの独壇場となった。



「石神さん、たいへん失礼致しました。それでは、この青い石の歴史を教えてくださいませんか」

石神は、過去6000年にわたる石神の歴史を教えてくれた。それはまとめると次のような次第であった。この青い石がこの地に現れたのは、約6000年前で、そのときに最初の石神がこの青い石に天から降臨した。また同時にたくさんの小さな魂たちが天から降臨し、大小さまざまな小石などに宿った。それは、縄文時代で、地球の気温が上昇して氷河が溶け、海面が上昇して東京湾が大きく広がった。その結果、堀船町周辺の地域は海底に沈み、上野台地の高台にある平塚神社周辺の地域が東京湾の海岸線になった。この青い石は、平塚神社周辺の海岸に現れたが、海から漂着したのか、埋まっていたものが波に洗われて露出したのか、あるいは空中から突然現れたのかは、石神は知らなかった。

青い石に宿った石神は、体外離脱する能力を秘めた人間を見つけ、その人間と交信し、天変地異を予知することによって、支配者に自らを神と認めさせた。縄文人の支配者は、青く美しい石を石神として祀った。縄文人は繁栄し、このあたりに縄文貝塚を残した。石神の任期は約1000年であったから、石神が降臨してから約1000年たつと、石神が天に帰還するために、石神の帰還の儀式が時の支配者の命令で執り行われた。それは、人間の生け贄を捧げる儀式であったり、大勢の人間が祈りを捧げる儀式であったりした。任期を終えた石神は、帰還の儀式によって天に帰還し、新たな石神が青い石に降臨して交代した。

縄文人の後に現れた弥生人も同じようにして青い石を石神として祀り、この付近の谷合に稲作を広め、この地を繁栄させた。

今から約1000年前に、このあたりを治めていたのは豊島氏という氏族だった。豊島氏の一族に、体外離脱する能力を持つ娘がいて、石神はその娘と交信した。豊島氏はその娘を通して石神の予知した天変地異を知り、土砂崩れや洪水などの危機をしのいだ。豊島氏はその娘を通じて石神の帰還の儀式を求められると、村中の人々を集合させ、石神の帰還を祈ることによって石神を帰還させた。そして、今、アスナの目の前にいる石神が新しい石神として青い石に降臨した。豊島氏は石神井川の水を低地帯の堀船町周辺に引くために飛鳥山の切削工事を行なった（注）。それまで石神井川は西から流れてきて飛鳥山にぶつかり不忍池のような大きな池をつくり、南の方向に流れ出していた。地面は比較的柔らかく工事は順調に進められた。しかし、大雨で予想外に早く大きな池が溢れ出し、切削工事の現場に濁流が押し寄せ大規模な土砂崩れが起こると石神は予言した

。これを聞いた豊島氏は住民を退避させて事なきを得た。しかし、土砂崩れによって青い石は濁流にのまれ、体外離脱できる娘も行方不明になってしまった。豊島氏は、氾濫した川を石神井川と名付け、低地帯に流路を変えた石神井川を利用して堀船町周辺の地域に用水路を巡らせ、新田を開発した。豊島氏はこの地で450年以上にわたり繁栄し、多くの水路と新田を残した。その後、戦乱の時代が約100年続き、石神は祀られることなく、捨ておかれた。徳川家康がこの地に移り、約300年にわたり繁栄したが、石神の記憶は人々の脳裏から消え去り、この地は東京という名に変わり、石神は約1000年の任期を終えて帰還するために、帰還の儀式を執り行うことを仁と祥子に求めた・・・・・・

ここで、アスナが石神の説明に割り込んだ。

「あの～、アタシが以前に調べたところによると、石神井川の名前のもとになった石神とは、こんな四角な石ではなくて、剣の形をしていて、今も石神井神社という場所に祀られているのだけれど、石神さんは嘘をついていないわよね」

アスナは以前、本当に石神井神社に取材に行き、石神井川の特集記事を高校の新聞に載せたことがあったのだ。

「我ハ、嘘ヲ言ワナイノデアル。剣ノ石ハ、我ガ降臨シタ1000年前ニ、我ト共ニ降臨シタ我ノ愛玩物ガ宿ス石デアル。青イ石ト剣ノ石ハ、共ニ祀ラレテイタノデアル。石神井川ノ濁流ニ流サレテ別々ニナッタノデアル。人々ハ、剣ノ石ヲ見ツケテ祀ッタノデアル」

「愛玩物ってペットってということ？」

「ソウデアル」

「かわいいの？」

「ソウデアル」

「石神さんたちは、みんな降臨するときにペットも一緒に連れてくるの？」

「ソレハ間違イデアル」

「それは、あなたが寂しがり屋さんだということ？」

石神は返事をしない。

「だから、早く帰還して家族に会いたってことなのね」

「ソウデアル」

「分かったわ、アタシも祥子ちゃんと一緒に石神さんの帰還を応援するわ」

「カタジケナイ」

仁は、このままでは本当に石神の帰還の儀式を行なうはめに陥って、まずいことにな

るなと思ったが、その思いは、石神にも祥子にもアスナにも伝わらなかったようだ。

「石神は帰還しないとどうなるの？」

「我ハ、ココ数年ノ間ニ帰還シナイ場合、サラニ1000年経過スルマデ帰還ノ機会ガナクナリ、我ハ家族ニ会エナイノデアル」

「帰還する機会は1000年に1回しかないの？」

「我ガ帰還スルニハ、コノ地デ帰還ノ儀式ヲ執リ行ウダケデナク、天ニ我ガ帰還ヲ受ケ入レテモラウベク、天ニ予約セネバナラナイ。我ガ天ニ予約スルノハ1000年ニ1度ダケナノデアル」

「天というのはどこなの」

「天ハ、我ガ生マレ育ッタトコロデアル。我ガ家族ノイルトコロデアル。人間ノ亡者ノ魂ガ帰還スルトコロデアル」

「人間の魂がそこに帰還するとどうなるの？」

「オギャア、ト叫ンデ大木ノ又カラぼント飛び出ルノデアル。トイウノハ真ッ赤ナ冗談デアル。天ニ木ハナク、地面モナク、空モナイ。サラニ昼夜ハナク、季節モナイノデアル」

「それも言うなら真っ赤な嘘でしょ。それって、冗談の練習のつもり？ で、そこにいるのは、あなた方とペットと小さな魂たちと人間の魂だけがいるの？」

「星ニ宿ス種族モイル」

「星に宿す？」

「地球ニハ、スデニ宿シテイルノデアル」

仁は、今日の石神はアスナのインタビューに答えるばかりで、いつもの凄みが欠けているなとつぶやいた。すると、仁の体の中から石神の声が聞こえた。

「我ガ魂ハ、光ト争ワナイノデアル。光ハ、魂ノ力ヲ弱メル作用ヲ持ツノデアル。光ノ溢レル昼間ハ、我ガ魂ノ力ハ弱イノデアル」

アスナは、予定のインタビューを終えたと思ったので、2人に帰ろうと言った。石神は何も言わなかった。

アスナは、石神のインタビュー記事をまとめたいので、次の日も2人にアスナの部屋に来て協力してほしいと言った。仁は記事をまとめるのもいいけれど、帰還の儀式はどうするんだと心配になった。それから3日たった8月16日は金曜日で寿司屋の寄合があり、アスナはまたも手伝いに行った。そこで、24日の土曜日と25日の日曜日にわたって行なわれる商店街の夏祭りの準備が話題になっていた。

その夜、帰宅してからアスナは突然ひらめいた。お祭りのところまで石神を運んで行って帰還の儀式をしたらいいのじゃないかと。お祭りには大勢が押し寄せるから、みんなが祈れば石神が帰還できるのじゃないか。アスナの家に泊まっていた祥子にそのアイデアを話すと祥子は喜んだ。アスナはパソコン通信セットを使って仁にも持ちかけた。しかし、仁は無理だと思うと嫌がった。そこで、アスナは翌日になってから、雄一を巻き込んだ。雄一はアスナの部屋に呼ばれ、石神のインタビュー記事を読まされたのだが、アスナのアイデアをたいそう面白がった。それから、雄一は仁のパソコン通信セットを見て、これは凄いと言って仁を褒めた。仁だけが異論を唱えている事態となった。アスナは仁に迫り、仁は嫌々ながら結局は賛成した。しかし、仁はまだ祭りに帰還の儀式をやる決心を固めたわけではなかった。結局はバカを見るに違いないと思うのであった。

その翌日、今度は雄一を加え、4人で石神にアスナのアイデアを伝えに行った。すると、石神は喜んで、天に帰還の儀式的予約をしようと言ったが、いったん儀式的予約をしたら、24時間以内に帰還の儀式に成功しなければ帰還はできないという石神の言葉を聞いて、仁は地の底にもぐりたいほど憂鬱になった。一方、祥子、アスナ、雄一のポジティブ思考組は、なんとしてもお祭りに乗じて石神の帰還を成功させるのだと意気が上がるのであった。お祭りの日まで1週間しかないということで、ソフトボールの試合をやったメンバーに儀式に参加するよう、みんなで手分けして頼みに行った。それから、アスナのインタビュー記事を祥子がパソコンに入力して、やっさんのプリンタでたくさん印刷して、みんなに配った。しかし、大人たちは冷やかすばかりで、本気になったとは仁には思えなかった。大人たちはみんな僕らのことを分かってくれない、仁はそう思うのであった。

祭りの2日前になって、雄一が祭りの前に石神を堀船町に運んでおいた方がいいのではないかと提案したので、また4人で集まることになった。雄一がアスナの家は1階で道場が営業中であるし、女の子の部屋は落ち着かないというので、今度は仁の家に集まることになった。仁の家は、昼間は仁しかいないので、それがいいと雄一は言った。雄一が仁の家に来るのは数年ぶりのことだった。雄一は、仁の部屋のパソコンや本棚に並んだコンピューター関係の本や雑誌類を見て、

「大したもんだ。知らないうちに勉強してたんだなあ」

と感心したように言った。アスナと祥子は、仁の部屋には行かずに、1階の居間に座って、仁のおじいさんとおばあさんが手入れをしたという庭を眺めながら、男2人が2階から降りて来るのを待つことにした。アスナは、祥子が仁の部屋でエッチな本でも見つけたら困るなと思ったのだ。祥子が庭の隅のリヤカーを見つけて、あれなら石神を運べるのではないかとアスナに言うと、

「そうね、それがいいわね」

とアスナは言い、

「それなら、ついでに石神をこの庭に運んで、祭りの日までここに置いておけばいいんじゃない」

と言ったので、祥子もそれがいいねと賛成した。

仁と雄一が階段をどしどし言わせて居間に降りて来ると、アスナは2人に、  
「今日の打ち合わせ事は決まったわ」

と言った。雄一は、

「えっ、打ち合わせる前にもう決まったのかよ」

と答えたが、仁は、

「何が？」

と状況が飲み込めない様子で言った。アスナは、庭の隅のリヤカーを指差して、  
「あのリヤカーで石神をここに運びましょうよ。そして、お祭りの日までここに置いておくの、いいわね」

と言った。雄一は、

「それじゃ、早速明日朝から運ぼうぜ」

と言った。仁は、

「ええっ、それは困るな」

とアスナの意見に異議を唱えたが、アスナに、  
「何が困るの、言ってみてよ」  
と迫られて、  
「ええと特に…」  
と言うのが精一杯だった。

「でも、あのリヤカーはちゃんと動くかな」

と心配するようなことを言ったので、仁と雄一が居間のガラス戸をあけて庭に出てリヤカーを調べると、片方のタイヤがパンクしていることが分かった。すると、アスナが、

「待って、うちにパンクの修理セットがあるわ」

と言って、2階に駆け上がり、仁の部屋から物干し場に出て、手摺に登ると足でアスナの部屋の窓を器用に開け、猿のように部屋に飛びこんだ。その様子は庭からも居間からもよく見えた。まもなく、アスナは窓から顔を出し、庭にいる仁と雄一に向かって、空気入れと黒いビニールバックを放り投げると、窓から乗り出し、物干し場に飛び移り、階段をどしどしと降りてきた。雄一と祥子は、呆氣に取られて、

「アスナはまるで猿のようだね」

と言った。祥子でさえも、

「アスナちゃんて…」

と言いかけて口をつぐんだ。アスナは、

「何よ、男の人たちは早く治してね」

と言い、続けて、

「アタシたちはここで見張ってるから。ね、祥子ちゃん」

と言って、居間にどっかと座った。雄一は、アスナから受け取った黒いビニールバックを開けながら、

「まったく、アスナは女にしておくのは惜しいよ」

と言うと、アスナは、

「あら、アタシはいい女よ。仁くんには分からないみたいだけどね」

と仁の方に目をやりながら言った。

「なんだよ、なんかあったのかよ。怪しいなあ、教えてよ」

と雄一は仁に近寄りながら尋ねた。しかし、仁には何のことかさっぱり心当たりがなかった。

黒いビニールバックには、いくつかのスプーン形のタイヤレバー、スパナ、ゴムのり

、ゴムパッチ、紙ヤスリ、小ぶりの金槌の他に、バルブ、ナットなどの部品も入っていた。

「こりゃ、完璧な修理セットだな。おい、仁、オレはタイヤを外すから、水を汲んできてくれよ」

と雄一は言って、タイヤレバーをタイヤと車輪のリムの間にねじ込んで、タイヤをリムから外し始めたが、

「あちゃー、これは耳付きタイヤだ。面倒くさいな」

とぶつぶつ言った。

仁は、大きめのプラスチックのバケツを探してきて、庭にある水道の蛇口からバケツに水をなみなみと入れた。そして、その後は仁もタイヤレバーでタイヤを外すのを手伝った。雄一は、タイヤの中からチューブを抜き出し、抜き出したチューブを空気入れて膨らませ、膨らんだチューブを20センチくらいずつバケツの水に浸けて穴の開いた箇所を丁寧に探した。すると、タイヤからぶくぶくと泡が出ている箇所が見つかった。他にも穴がないか調べたが、穴は1カ所だけだった。雄一は、チューブの穴のまわりの水滴を自分のTシャツの裾で拭いた後、紙ヤスリで擦り、ゴムのりを塗った。しばらくそのまま置いて、ゴムのりが乾いてきたのを見計らって、ゴムパッチを被せ、ゴムパッチを金槌でたたき始めた。

「雄一は完璧ね」

とアスナが言った。

「アタシは、お父さんのパンク修理を何度も見てるけど、雄一はお父さんと同じくらい上手だと思うわ」

とアスナが言った。パンクの修理セットは、どうもアスナの父親の持ち物らしかった。雄一は、

「本番はこれからさ」

と言って、修理したチューブをタイヤの中へ入れ、タイヤレバーを器用に操りタイヤをリムの中にはめ込む作業を始めた。仁も手伝おうとやってみたが手に負えなかったので、空気入れ役に専念することにした。雄一の行なっている作業はチューブが適当に膨らんでいないとやり難いので空気入れ役もそれなりに重要な役なのだ。2人はかなり上手にパンク修理をやったのけたが、それでも3時間はかかった。また、リヤカーの荷台に置いてある板がボロボロに傷んでいたなので、取り外すことにした。そして、もう一方のタイヤにも十分な空気を入れリヤカーは使えるようになった。

次の日の朝9時に、再び4人は仁の家に集合した。雄一は、どこからか大きなスコップを調達してきた。アスナは、小さなシャベルを3つ持ってきた。それに、おにぎり弁当と水筒も2つ持ってきた。お弁当はアスナと祥子の手作りだという。雄一は、さぞかし不揃いのおにぎりだろうなと言った。仁も、さぞかし不揃いのおにぎりだろうなと思ったが、口には出さなかった。

それから、昨夜、乾物屋から連絡があって、お祭りのときにみんなが石神の帰還を祈ってくれるように拡声器で呼びかけることを商店街の会長として約束してくれたのだという。乾物屋は、ソフトボールの試合の後に、酔っていたとは言え、「祥子ちゃんのためなら命はいらねえ」と宣言した手前、帰還の儀式には最大限の協力をするとのことだった。

一同は、交代にリヤカーを引きながら、飛鳥山を目指して歩いたが、リヤカーがなければまるでピクニックのような雰囲気だった。仁を除く3人は、石神の帰還の儀式が上手く行くと信じきってはしゃいでいたが、仁はまだ上手く行くとは信じられず、本気で帰還の儀式にのめり込む気にはなれなかった。

一同は、飛鳥山に着くと、一休みして水筒の冷たい麦茶を飲んだ。  
「赤い水筒は女の子用で、青い水筒は男の子用だから、間違って飲まないで」  
とアスナが言うと、  
「間違って飲みそうなのは、アスナぐらいしかいないだろ」

と雄一が言い、祥子が笑った。それから、少し歩いて平塚神社に着いた。神社には、セミがわんさかと鳴いていたが、人は1人もおらず、太い木々に囲まれてひんやりと涼しかった。木漏れ日の差す参道を抜けて行くと、ようやく石神の場所に着いた。雄一は、改めて石神を見て、青空を映したような模様だと思った。

「それにしても、あまりにもきっちりとした長方形をしているな。とても6000年前の石には見えないな」

と雄一が言うと、アスナが、  
「そうね、多分、いつかの時代にちゃんとした石屋さんがきれいに削ったんじゃないかしら」  
と言った。

スコップとシャベルで石神のまわりの土を除いていると、仁と祥子の体の中から石神の声が聞こえた。どうやら、石神は今日もまた昼間は眠っていたようだ。祥子が石神に、



「お祭りの当日に石神さんを運ぶのはたいへんだから、前もって運びに来たの」

と告げると、石神は再び眠りについたようだった。あらかた土を除くと、石神は厚さが均等に10センチくらいだと分かった。4人で石神の下に手を入れて持ち上げようとしたが、少し重過ぎたので、片側だけ持ち上げて石神をいったん立たせた。そして、リヤカーを石神の傍に付けて石神をリヤカーの上に倒しこむと、石神はリヤカーの鉄骨の上にガッシャーンと大きな音をたててうまく乗った。そして、石神を掘り出した跡に、まわりから少しずつ土をもってきて平らにならした。

そこで、ちょうどお昼くらいになったので、みんなでお弁当を食べることにした。お弁当の包みを開くと、予想に反してきれいなおにぎりが並んでいた。雄一が、

「ひゃー、美味しそうだな」

と歓声を上げると、アスナは、

「ね。女にしておくのは惜しくはないでしょ」

と言って、青い水筒から麦茶を飲もうとした。

「あ、それは男の子用で一す」

と雄一が言うと、祥子と仁もつられて笑った。そして、アスナも苦笑いした。

一同は、石神をのせたリヤカーを引いて、来た道に戻り、無事に仁の家の庭に着いた。明日の土曜日は、いよいよお祭りであった。今日は金曜日で、午前中に寄合を終えた商店街の古株さんたちが、石神が宿するという青い石を見に仁の家にやって来た。乾物屋は、リヤカーに載せられた青い石を見て、これは珍しい、まるで青空を映したようだと雄一と同じことを言い、まさに天の石として見るに値するから、お祭りのときにお地藏さんの横に立てて置こうと言い出した。乾物屋が二代目に、この石を置く台座はないかと言うので、二代目は町工場に戻り、70センチくらいのレールの切れ端を2本と、コタツ板くらいの大きさの鉄板と、赤い布を手押し車で運んできた。仁の家の庭の真ん中に、みんなでレールを2本並べて置き、その上に鉄板を敷き、さらに赤い布を被せて石神用の台座を作った。それから、みんなで青い石をリヤカーから降ろし、作った台座の上に立てて置いて見ると、有り難そうな神様と言ってもあながち的外れでもないように見えた。それから、写真屋が、注連縄（しめなわ）と紙垂（しで）をどこからか持ってきて、青い石に注連縄を巻きつけ、紙垂を付けてみると立派な神の石のように見えた。

その夜、仁は、石神が何か起こすのではないかと、まんじりともせず一夜を明かしたが、何事も起こらずに石神が帰還の儀式を天に予約した一日の朝が訪れた。

祭りの日は、青空に入道雲が浮かぶ夏らしい眩しい朝で始まり、蒸し暑くなりそうだった。仁の両親はいつものように早く起きたが、出掛ける前に庭に鎮座する石神をしげしげと眺めた。そして、

「ふーむ、未だに信じられん」

と仁に言い残し、泉寿司と書いてある車に乗り込み仕事に出掛けて行った。次に、アスナと祥子と一緒にアスナの両親がやって来て、やはり石神をしげしげと眺め、

「本当に、祥子ちゃんは石神の声を聞いたの」

と祥子に尋ねた。すると、アスナが割り込んで、

「アタシだって、仁くんだって聞こえたのよ」

と言ったが、

「うーん、未だに信じられないわ」

と言い残して、家に戻って行った。

それから、雄一が来て、古株さんたちが来て、みんなで石神を商店街のお地蔵さんの傍らに運んだ。二代目が町工場のクレーン付きトラックを出してくれたお陰で、昨日作った石神の即席の台座まで含めて一度に運ぶことができた。石神の青い石は水を掛けて雑巾で擦るとますます美しくなった。洋品屋が即席の立て札を立ててくれた。立て札には次のように書かれていた。

### 石神井川の石神

千年前に天より降臨し、美しき青き石に宿ったとされる。

本日の祭りには、石神の命により祈りの儀式を執り行う。

皆々様のかけがえのない祈りが、天まで届きますように。

その文言は、本屋が昨夜寝ないで考えたのだという。乾物屋は、  
「本屋はさすがに文才がある」

と言って、満面に笑みを浮かべ、大柄の本屋が両手を激しく動かしてガッツポーズをしたので、洋品屋は口をとんがらせて、

「だいたい、この立て札を考えたのはオレなんだからよ。感謝しろよな」

と本屋に言った。

「それで、儀式とやらは何時頃に開始しようか」

と乾物屋がアスナに尋ねた。

「そりゃあ、人出が一番多い時間帯がいいと思うんだけど」

すると、洋品屋が、  
「じゃあ、涼しくなる夕方6時ということにしようか」  
と言ってみんなの顔を見回した。祥子が小さな声で、  
「石神さんにも聞いてみないと」

と言ってみたが、石神は昼間はまた寝ていると見えて、石神の声は聞こえて来なかったから、古株さんたちは、  
「それじゃ、夕方6時に」

と言いながら、思い思いの方に帰って行った。しかし、4人は石神と何とか段取りの話をしなくっちゃとその場に残った。

「あいつは光に弱いらしい。だから、昼間はいつも寝ているみたいなんだ」

と仁が言うと、アスナが、  
「夕方6時になってもまだ寝ていると困るわね」

と言い、雄一が、  
「それで、あいつは何時までに帰還しなくちゃいけないの」

とみんなの顔をのぞきながら尋ねたのだが、誰もはっきりとは知らなかった。

「ちょっとはっきりさせないとマズいな」

と雄一が言って、青い石のてっぺんを拳骨でコンコンと叩いた。すると、祥子と仁の体の中から石神の声が聞こえた。仁が、

「おや、今の雄一のコンコンであいつが起きたようだぞ」

と言うと、祥子も静かにうなずいた。

「あの、石神さん。今日の夕方6時にみんなでお祈りの儀式をする予定なのだけれど、石神さんの準備はいいのかしら」

と祥子が石神に尋ねると、  
「夕方6時ハ、マダ明ルイカラ帰還ニハ適合シナイノデアル」

「えっ、それじゃ、夜にならなきゃだめなのか」

と仁が大きな声を上げると、アスナと雄一が異口同音に、  
「夜！？」

と言った。  
「だめよ、夜遅くなると人出がだんだん減ってしまうわよ」

アスナはそう言うと、仁と祥子に、  
「この間のインタビューみたいに、アタシに話させて」

と言った。それで、仁と祥子がアスナと手をつなぎ、もう一方の手を青い石の上に置いた。すると、雄一が、

「そうやって手をつなぐと石神と会話ができるのかよ。オレにも1回やらせてくれよ」と雄一には珍しくダダをこねた。

「じゃ、1回だけよ」

とアスナが言ったので、今度は仁と祥子は、雄一と手をつないだ。すると、雄一の体の中から石神の野太い声が響いた。

「我ハ、石神デアル」

雄一は、どのようにして石神に返事をすればいいのかが分からず、あたふたとしていて、石神が続けた。

「オ前ハ、我ガ帰還ノ儀式ヲ手伝ウ若者ダナ。カタジケナイ」

と言った。雄一は必死に、

「オ、オレは雄一と言います」

と言うのがやっとだった。アスナがイライラした様子で「早く変われ」と言う顔をしていたので、雄一は再びアスナに交代した。

「なぜ、夜でないといけないの」

とアスナは果敢に石神に詰め寄った。

「我ガ魂ハ、光ト争ワナイノデアル。光ハ、魂ノ力ヲ弱メル作用ヲ持ツノデアル。光ノ溢レル間ハ、我ガ魂ノ力ハ弱イノデアル。人間ノ魂ノ祈リノ力モ光ニ弱メラレルノデアル」

と石神は答え、その石神の言葉をアスナがみんなに告げた。次に、アスナは、「それで、今日の何時頃までに帰還しなくちゃいけないの」

と尋ねると、

「我ガ予約ノ期限ハ、午前0時ナノデアル」

と石神は答えた。それを過ぎれば、1000年後にならないと次の予約ができないのだ。「石神さんが帰還するのに、どのくらいの時間お祈りすればいいの」

「人間ノ魂ノ力ガ充分アルナラバ、一瞬デヨイノデアル」

アスナは思わず、

「ああ、よかった」

と言った。そこで、4人は相談して、儀式は暗くなる午後7時にすることにした。「石神に聞いてよかったな。午後7時に始めたら、期限までに5時間もあるぞ」

と雄一はさも自分の手柄のように言ったが、皆は石神の言葉に安心したので、雄一の

言い方は気にしなかった。アスナが商店街の古株さんたちに午後7時に変更することを連絡することにして、4人もいったん解散することにした。

「それじゃ、午後7時にね」

午後になって祭りの催し物が始まると人出は徐々に増してはきたが、日射しと蒸し暑さも同時に増してきたため、混雑するほどの人出にはならなかった。午後6時半過ぎに日が沈むとようやく商店街は混雑するようになってお祭りらしい雰囲気になってきた。午後7時になって商店街の古株さんたち、アスナ、祥子、雄一、そして仁が石神の前に集まった。見ると、アスナと祥子はお揃いの浴衣を着ていた。

「やあ、まるで姉妹のようすなあ」

と満面の笑みを浮かべながら乾物屋が言った。2人とも髪が短いというところだけは似ていたけれども、アスナは日に焼けたソバカス顔で大柄だったし、祥子は色白で大きなメガネを掛けて小柄だったから、仁には決して姉妹には見えなかった。しかし、2人は姉妹と言われてたいそう喜んだ様子だった。仁は何気なく石神の前の立て札に目を移した。

### 石神井川の石神

千年前に天より降臨し、美しき青き石に宿ったとされる。

本日の祭りには、石神の命により祈りの儀式を執り行う。

皆々様のかけがえのない祈りが、天まで届きますように。

仁はその文言を無意識のうちに読んで、天国にいるおじいちゃんとおばあちゃんの幸せを祈った。そして、果たして、この文言でみんなが石神の帰還を祈ってくれるのだろうか心配になった。だいたい立て札には帰還の「きの字」もないじゃないか。大人たちはやっぱり分かってないんじゃないかと仁は思った。

「すぐに始めますか？ 拡声器の準備はできていますから」

と二代目が乾物屋に声を掛けた。

「待て待て、大事な石神さんが何と言っとるかを先ず聞こう」

と乾物屋が言った。祥子が石神に聞こうとして何気なく青い石に触れると、祥子の髪がザワッと逆立った。そして、

「我ガ帰還ノ儀式ヲ執り行ウトイウノニ、ナゼ光ヲ溢レサセテイルノカ。コレデハ帰還ノ儀式ニハナラヌ」

と怒っている石神の声が体中に響いた。仁は耳と頭の奥がガンガンとして痛くなり、祥子も両手で耳のあたりを押さえてうずくまった。仁は石神が仁の細胞と交信してコントロールしていることを思い出し、恐ろしくなった。しかし、仁と祥子以外の面々には、何事が起こったのか分からなかった。

「石神は、明る過ぎて儀式が行えないと怒っている」

と仁がやっとのことでみんなに伝えと、

「明る過ぎるってどういうことだ」

と洋品屋が口をとんがらせながら仁に詰め寄った。

「それが、あのう、石神は光に弱くて、明るい困るらしいんです」

日が落ちた商店街には明かりが灯り、人出は最高潮になってお祭りらしい賑やかさであふれていた。

「ここで明かりを消せというのか」

と洋品屋が言うと、

「大勢の人がいるから、明かりを消すと何が起きるか分からない。防犯上まずい」

と本屋が言い、写真屋も、

「安全上もまずい。ケガする奴が必ず出てくる」

と追い討ちを掛けた。乾物屋は、

「あー諸君、聞いての通りだ。商店街の会長として明かりを消すわけには行かない」

と言って満面の笑みを見せた。雄一が、動揺しながら、

「ここじゃ明るいというのなら、どこか暗いところへこいつを運ぶしかない」

と言い、アスナも同じように動揺しながら、

「暗いところってどこよ」

と言うと、

「そうだ、お前んちの道場へ運ぼうぜ。あそこなら、電気を消せば真っ暗になるだろ」

と雄一が言い、誰も反論しないので続けて言った。

「そうしておいて、商店街にはお祈りの儀式をやってもらったら通じるんじゃないか」

誰も本当はどうしたらいいのか分からなかったもので、取り敢えず雄一の言う通りにすることになった。二代目が大慌てでクレーン付のトラックを裏道から回して来て、青い石と台座を道場まで運んだ。アスナの家には父親も母親も出掛けていて誰もいなかった。道場の入り口にある6畳くらいの土間に青い石をみんなで運びこみ、戸を閉めて電灯を消すと確かに真っ暗になった。祥子がおそろおそろ青い石に触ると、今度は石神は怒

ってはいなかった。

石神は、暗さはいいが、人間の魂の力は足りないというので、商店街の方に残った乾物屋に祈りの儀式を開始するように連絡をした。儀式の開始は午後8時近くになってしまったが、お祭りの人波はまだまだ途絶えることなく続いていた。

祈りの儀式は、乾物屋の名演説で始まった。洋品屋はおそらく数100人が空に向かってお祈りをしたと言ったけれども結果は空しかった。石神は、道場の中で祈りを捧げたアスナ、祥子、雄一、仁、二代目、写真屋の6人分の祈りは感じたけれども、商店街の方からは数人分の祈りしか届いて来ず、それは町の明かりが祈りの力を打ち消してしまったからだと告げた。後から、乾物屋をはじめ、洋品屋、床屋、それから物珍しさにつられた商店街の人々が10数人ほど道場にやってきて、真っ暗な道場の中で祈りの儀式を繰り返してみたが、それでも祈りの力は20人分ほどであり、あと200人分ほど足りないから午前0時までに連れて来ればいいと石神は告げた。しかし、今からあと200人もこの道場に連れてくるのは、ここにいる誰もが不可能だと思った。第一、ここにあと200人も入りきらないのだ。

重苦しい空気の中で、乾物屋が口を開いた。珍しく真剣な面持ちであった。

「アスナちゃんも祥子ちゃんも、あきらめなさいな。悪いけどこれ以上オレたちにできることはない」

大人達は、もう9時に近いし、夜の寄合に行かなくちゃいけないからと言いつつ帰っていった。クレーン付のトラックを運転した二代目だけが、石神を道場から運び出すために残ってくれた。アスナと雄一は、途方に暮れて何も言い出せなかった。

「結局はこんなものなのだよな。いつだってそうだよ」

と仁はつぶやいた。

「もう金輪際この件とはおさらばだ。いつもの閉じこもりの日常に戻る時がきたのだ」  
と思った。

ところが、祥子は、まだひとつだけ気になることがあると言って石神に近付いた。石神はみんなが途中で帰還の儀式を投げ出したことを察知して怒っていた。石神に触れた祥子は、石神の怒りのショックで髪が再び逆立った。それと同時に今度は道場のガラス窓がビリビリと鳴り、電灯が明滅した。仁の耳と頭が再びガンガンと鳴った。仁は、アスナと雄一がなかば面白がって石神の帰還に一生懸命なのは分かるにしても、弱みばかりを身に背負った小さな祥子が、縁もゆかりもない石神のために一生懸命になるのを理解できなかった。仁が祥子を見つめていると、祥子も耳を押さえてうずくまっていたが、健気にも起き上がると、再び石神に手を当てながら、石神に尋ねた。

「この青い石を壊したらどうなるの」

石神はすぐには返事をしなかったが、やがて、

「ソレハ、我ガ直チニ死スコトニナルダロウ」

と言った。そして、

「コレ以上、何モ言ウナ」

と言ったが、祥子は負けずに言い返した。

「だって人は死ぬと帰還するのでしょうか。だったら石神さんも死んで帰還できるのかも・・・」

石神はまたしばらく黙っていたが、石神自身も石を壊すと本当のところはどうなるか知らなかったから、天に問い合わせることにした。石神が直接に天と交信することはできないが、石神が地球に宿る魂と交信し、地球に宿る魂がほかの星に宿る魂と交信し、次々に交信が広がっていけばやがて天に石神の問い合わせが届くのである。そして、天からの回答も次々に星に宿る魂を経由してやがて石神に届くのである。

天からの回答を待つ間、仁は全く別のことに気がついた。石神が怒ると祥子も耳を押さえるが、祥子は耳が聞こえないのになぜ耳を押さえるのかと不思議に思ったのだ。そして、仁は、石神は祥子の耳の細胞に働きかけているのだから、耳がきこえるようにだってできるのではないかとひらめいた。そして、それを隠しているのではないかと疑った。

仁は、祥子がアスナと雄一に説明している間に、その疑念を石神に聞いてみた。すると、石神は祥子の耳を聞こえるように治すのは可能だと言う。しかし、本人が治すことを望まないこともあるから、本人の意思を確認せずにやるべきではないと言い、

「アノ娘ハ、耳ガ聞コエナクトモ人一倍生キル自信ニ満チテイルノデアル。耳ガ聞コエルオ前ヨリモダ」

と言った。それを聞いて仁は、心がくじけ始めた。そして、心にバリアーを張って、石神が祥子の耳を治せることを皆に言ってもしょうがないじゃないかと考えた。それは、仁はおじいちゃんもおばあちゃんもいないから1人で自分を守らなければならないと、自分を守るためには余計なことを言わずに閉じこもらなければならないと考えたからだ。しかし、今は自分は何も責められてはいない。責められていないのに閉じこもるのが正しいのだろうか。仁は自問自答した。

天からの回答は、わずか15分で石神のもとに届いた。すると、祥子の言った通り、青い石を壊すと石神の魂は青い石から離脱して帰還できることが判明した。石神は感激し、祥子も我がことのように喜んだ。喜ぶ祥子は、アスナ、雄一と次々にハイタッチして



、祥子の手が仁の手に触れたとき、祥子の歓喜が仁の心のバリアーを突き破って伝わってきた。自分を守ることにより得る喜びは小さなものだ。それよりも、人のため、みんなのために一生懸命になり、人と喜びを共有できることは、1人の喜びよりもいかに大きいかを仁は初めて実感した。そして、体の中から不思議な自信が湧き上がってくるのを感じた。

仁は、アスナ、雄一、そして二代目に、  
「青い石を今夜中に壊せば、石神が帰還できることがはっきりした」  
いつもの仁とは違うしつかりした声で言い、そして仁は、みんなに  
「石神が祥子の耳を治せると言っている」  
と言った。みんなは、  
「嘘を言うな」  
と言ったが、仁は、  
「嘘じゃない。石神は人間の細胞と交信することができるんだ。しかし、石神が帰還すると祥子の耳を治せなくなるから、帰還する前に治してもらわないといけないんだ」  
と言った。アスナが、  
「それじゃ壊すのをやめて、耳を治してもらうことにすれば」  
と言い、雄一が、  
「それが一番だ」  
と叫んだ。しかし、石神の冷厳な声が仁の腹の底から、こう告げた。  
「我ノ帰還ガ先ナノデアル」  
再び道場のガラス窓がビリビリと鳴り、電灯が明滅した。  
二代目が、  
「石神だけ帰還して耳は治らないかも知れない」  
とつぶやいた。しかし、祥子は迷いのない瞳を輝かせ、  
「私の耳を治すことなんかよりも、石神さんを帰還させてあげる方が大事です」  
と言ったのだ。仁は、  
「祥子ちゃんがそう言うなら、午前0時までに絶対に石を壊そう」  
と力強く言ったが、アスナと雄一は異口同音に尋ねた。  
「石を壊すって、どうやって？」  
仁は、二代目に向かって、  
「今夜だけ町工場を貸していただけませんか」

と頼んだ。二代目が驚いて返事に困っていると、仁は、  
「後片付けは責任もってちゃんとやりますからお願いします」

と坊主頭を下げた。二代目が、明日は祭りに免じて工場を休みにしているから、後片付けしてくれるならいいと言うと、

「よし、それじゃあ、石を工場に運ぼう」

と仁は言った。二代目が、クレーン付きのトラックで、青い石と台座を町工場に運びこんでくれた。

「すみません、大きなハンマーがあったら貸してください」

と仁が二代目に言うと、二代目は、  
「おお、あるぞ」

と言って、ハンマーを探しに行った。その間に、仁は、雄一と一緒に台座に使った2本のレールを石の長さに合わせて工場の駐車場に並べ、レールの上に橋をかけるように石を寝かせて置いた。すると、暗かった駐車場に小さな照明灯が点いた。二代目が点けてくれたのだった。二代目が、ツルハシと、ツルハシと同じくらい大きなハンマーを探してきてくれて、雄一と仁がツルハシとハンマーを持ち、青い石を交互に打ち始めると、青白い火花が薄暗い駐車場に飛んだ。

二代目が、  
「これで石が割れるといいけどな」

と言ったけれども、石は思いのほか丈夫で硬く、ツルハシやハンマーでは割れそうになかった。すると、仁は、吹き出た汗をぬぐいながら再び二代目に向かって、鉄棒を切断するようなグラインダーはないかと探してもらうように頼んだ。二代目がグラインダーを持ってきて、5センチくらいの太さの鉄棒で試してみると、簡単に切断できた。しかし、二代目がグラインダーで石を切断しようとしても、刃がすぐにだめになってしまい、せいぜい深さ1センチくらいの溝を彫るのが精一杯だと分かった。そこで、石の表側と裏側に真横に溝を彫って割れ易くすることにした。刃をいくつも替えながら溝を彫ると、再び雄一と仁が汗びっしょりになって、ツルハシとハンマーで交互に石を打ち始めた。青白い火花が飛び、石を打つ音が夜空に響いた。仁はハンマーを降り下ろしながら、二代目に仁の家から大きな庭石を持ってきてもらうように頼んだ。二代目がクレーン付きトラックで200キロはあろうかという庭石を2つ運んでくると、庭石をクレーンで吊り上げ、石神の上に落とすようにしつらえた。庭石を青い石の上に落とすと物凄い地響きがして、石が割れる期待が高まったが、それでも青い石はびくともしなかった。

アスナと祥子は、もう何時間もたったように感じていた。2人は、午前0時までに石を壊すのは無理かも知れないと思いはじめていた。しかし、仁は、1つだめなら次の手を次々に指示し、決して諦めようとはしなかった。いつもとは違う仁の姿が祥子の目に焼きついた。

午後11時を回り、寄合に行っていたアスナの父親が、乾物屋、洋品屋、本屋、写真屋、床屋たちを連れて帰ってきて町工場に集まった。寿司屋を閉めた仁の父親と母親も、戻ってきて町工場に合流した。仁の母親が、おじいちゃんとおばあちゃんの庭石が使われているのに気づき、

「あ、あれ、おじいちゃんの庭石が・・・」

と言うと、仁は、

「母ちゃん、ごめん。後で説明するから」

と言って作業を続けた。アスナが、集まったみんなにこれまでの経緯を話した。すると、古株さんたちは口々に、

「午前0時までに石を割るって？」

「祥子ちゃんの耳が治るって？」

「それなら割らなくてもいいじゃないか？」

と言ったが、アスナは冷静に説明を続けた。

「石神さんは、石を割るのが先だって言うの」

「何だ、石神って野郎は悪い奴だな」

「違うの、今夜、石を割らないと、石神さんは家族に会うのにあと1000年も待たなくちゃいけなくて、だから、祥子ちゃんが石神さんは可哀想だって言うの」

「そうか、オレは祥子ちゃんが死ねと言ったら死ぬぞ」

「だったら、今すぐ死ねよ」

「それにしても、仁くんは見違えて一生懸命だな」

「おい、仁くん頑張れよ」

「何言ってるんだよ、お前が手伝えよ」

仁の父親は、石には割れやすい方向があると仁に指摘した。すると、仁は自らグラインダーで縦にも溝を刻みはじめた。

「確かにえらく固そうだな」

「普通の石ではないな、これは」

みんなで寄ってたかって石を裏向けて、再び仁がグラインダーで縦に溝を彫っていた。

「仁くんは上手だな」

二代目も、そうだというふうに大きく頷いた。

再び、庭石を青い石の上に落とす作業が始まった。もう、あと30分くらいしか時間がなかった。みんなは、掛け声を合わせて、

「せーの」

ズシン

「せーの」

ズシン

と繰り返した。すると、誰かが、

「おっかちゃんのためならえーんやこら」

と叫んだ。

しかし、ついに庭石の方が砕け始めてしまった。そこで、2つ目の庭石に取り替えて、仁たちはもくもくと青い石を割る作業を続けた。だんだんと誰も口をきかなくなった。それは、あたかも皆が既に諦めているのに仁だけが諦めないから、タイムリミットがくるのを皆で見守っている風であった。仁自身は、体中に熱と力がみなぎるのを感じていた。飛び上がれば屋根まで飛べそうに感じ、小石を握りつぶせると思うほど腕に力が溢れた。頭はかつてないほど冴え、騒音の中で針の落ちる音が聞き分けられるほど集中力がみなぎっていた。

タイムリミットの5分くらい前に石神が突然仁に語りかけた。

「モウイイ」

「えっ何だ」

と仁は大声を出した。みんなは一斉に動きを止めて、静かに仁の次の言葉を待った。

「モウ十分デアル」

と石神は繰り返した。仁はみんなに、

「石神がもういいと言っている」

と納得しない顔で伝えた。誰かが、

「もういいと言ってもまだ5分くらいあるぞ」

と言った。すると、突然、祥子が耳を手で被い、うめき声を上げてうずくまった。帰還が先だと言った石神は、観念したのかどうか、帰還の前に祥子の耳を治したのだ。町工場の駐車場はシーンとして、わずかに木の葉が一枚舞い降りた。石神が祥子の耳を治

したことを察した誰かが言った。

「いいぞ石神！ 男らしい、見直したぞ」

すると、青い石に亀裂が走った。ピシピシ、そして、ゴゴンと音をたてて青い石は4つに割れた。仁と祥子には、石神が帰還して行くのがスローモーションのように見えた。割れた石から直径50センチくらいのオレンジ色がかった透明の泡のようなものが出現し、徐々に小さくなり、パッと空中に消えたのだ。石神は帰還する瞬間、祥子にだけ語りかけた。

「アノ若者ガ、オ前ノ耳ヲ治スヨウニ我ニ約束サセタノデアル。次ニ、我ハ、アノ若者カラ200人分ホドノ魂ノカヲ得タノデアル。オ前カラモ数10人分ノ魂ノカヲ得タノデアル。次ニ、オ前ハ、耳ガ聞コエナクトモ生キル自信ニ溢レテイルノデアル。我ハ、オ前ノ意思ヲ確認シナイママニ耳ヲ治シタノデアル。悪ク思ウナ」

翌日の日曜日もお祭りは続いていた。祥子はアスナの家に泊まり続けていたが、今日自分の家に帰ると言う。そして、9月の始めにまた引っ越すのだそう。だから今日のお祭りは祥子のお別れ会になった。祥子は耳が聞こえるようになって、自分の声が体の中から聞こえるのに驚いた。また、世の中はいろいろな音にあふれていてかなり騒々しいことを知った。お祭りの縁日を4人で歩いたが、祥子は仁に手をつないほしいと言った。だって、縁日は音が騒々しくて、手をつなぐ方が話がよく分かるからと言った。アスナは、祥子は耳が聞こえるようになったばかりだから、しょうがないわねと雄一に言って、談笑する祥子と仁の後ろから雄一と並んでついて行った。新しい石神がどこのどんな石に降臨したのか誰にも分からなかった。今は主のいない4つに割れた青い石は仁の家の庭で踏み石になった。

町中に金木犀の香りが漂い10月になった。仁は高校でパソコン好きの先生を見つけ、やっさんから聞いた「これからは会社でパソコンは仕事に不可欠になる」という話と、祥子の父親が自宅のワープロを電話網を経由して会社とつないで仕事をしている話を訴えた。そして、ついに仁の高校にパソコンを導入させることに成功した。また、やっさんは古くなったパソコンを高校に寄付してくれた。仁は雄一と一緒にパソコンクラブを結成して仁のパソコンの知識をみんなで共有する活動を始めた。

プロ野球ペナントレースは阪神タイガースが優勝し、仁の父親の寿司屋で道場チーム主催の祝勝会が行われた。さらに、11月に入り、日本シリーズで阪神が西武を破り日本一になったから、寿司屋での再度の祝勝会はたいへんな盛り上がりとなった。

ある日アスナが仁の部屋にやってきて、祥子の家の会社とつながっていたワープロがダイナマックという漢字のできるマッキントッシュに変わったと言った。そして、アスナは仁にパソコン通信セットを祥子の家とつながるようにしてくれと言った。今の仁にとってそれは簡単な話だったから、それから間もなくして仁の部屋のPC9801は祥子の家のダイナマックと電話網を経由してつながった。すると、アスナは度々仁の部屋に、

「祥子ちゃんの具合はどう？」

と聞きにきた。祥子は、もう電話で会話するのに慣れたから、アスナは祥子と電話で連絡を取っていた。しかし、それでもアスナは仁の部屋に、

「祥子ちゃんはどう？」

と聞きにきた。仁は祥子とは電話で話したことはなかったが、パソコン通信セットで話をした。祥子は転校先でブラスバンド部に入っただけ。それは、祥子にとって初めてのみんなと一緒に頑張る活動だった。仁はパソコンクラブの話をしたが、これも仁にとって初めてのみんなと一緒にやる活動だった。祥子はもう電話で話すのが当たり前になったとパソコン通信に書いてきた。仁は、パソコン通信はそろそろお役ごめんだと祥子にメールを送った。すると、祥子は、

「あなたにまた会いたい」

とメールに書いてきた。そして続けて、

「電話だったらこんなこと恥ずかしくて言えない」

と書いてきた。

果たして祥子は12月になって母親とともに東京に戻ってきた。祥子の両親は、仁の両親と同様に自分たちの子供が向かい合う現実に対処するのに、自分たちの過去の経験が通用しないと悩んでいたのだ。祥子の一家が選択したのは、雄一の一家が選択したのと同じく「父親の単身赴任」という生活であった。

1985年のクリスマスイブに祥子はアスナの家に再び泊まりにきた。そして、仁を驚かそうと、密かにアスナのように物干し場を通り、仁の部屋にいっぱい笑顔で現れた。そして、仁の顔を見ると飛び上がって抱きついた。



---

（注）石神井川の流路が変わった原因には、豊島氏が変えたとの本稿の記述以外にも諸説がある。



およそ6000年前の縄文時代、温暖化によって北極や南極などの氷が溶け、海面が今より何メートルも上昇していた。日本の関東地方では、東京湾が関東平野の奥まで食い込んで広がり奥東京湾と呼ばれた。武蔵野台地の東端に、飛鳥山から上野に続く高台の上野台地があり、ここが奥東京湾の西側の海岸線になっていた。その頃、その海岸にあった青く四角い石に、魂だけで存在する種族が天から初めて降臨した。青い石に宿った魂は、縄文人が恐れた洪水、地震、噴火などの天変地異を予知することができ、縄文人と交信し、石神として祀られた。魂だけで存在する種族は、人間の中にまれに存在する体外離脱の能力をもつ人間と交信することができたのだ。それ以来、青い石に宿る石神は、およそ1000年毎に交代しながら今に至っている。また、石神と同様に天から小さな魂（石神にとっては飼い犬のような存在らしい）がたくさん降臨し、あちこちの小石などに宿った。石神の任務は、たくさんの小さな魂たちが感じた大地の動きの情報を交信によって集め、最終的に天に報告することであった。今から約1000年前に青い石に降臨した石神は、1000年の任期を終え、1985年8月24日、梶原商店街の夏祭りの深夜に天に帰還した。しかし、その石神の帰還にまつわる騒動で、件（くだん）の青い石は割れてしまったため、交代の石神が、どこにあるどんな石に降臨したのか、誰にも分からなくなった。

1985年に帰還した石神には、天の同じ種族に、その石神を慕う2人の女性がいた。1人は、石神の幼馴染みの女性であり、もう1人は、幼馴染みの従妹の女性だった。2人は仲良しでいつも一緒にいた。しかし、従妹の女性は、自分もその石神を慕っていることを、幼馴染みの女性には隠していた。2人は、石神が降臨してから1000年後に帰還することを知っていたが、待ちきれない思いにさいなさいなまれていた。幼馴染みの女性は、石神に会うために、石神のいる関東地方に降臨することを決心した。天では、みだりに降臨することは禁じられていたが、天の番人と交渉して許可を得ることができた。そして、石神が降臨してからおよそ600年後に、従妹の女性と一緒に関東地方に降臨した。関東地方は戦国時代の只中で、石神の宿る青い石は誰にも祀られることなく上野台地の高台に捨て置かれていた。2人は、いつでも好きなときに帰還できるよう何にも宿らずに空中を浮遊し、石神を探した。その姿は普通の人間には見えなかったが、もし体外離脱する能力のある人間がいたら、2人はそれぞれ直径50センチくらいの泡のように見えた。幼馴染みの女性は緑色を帯びた泡で、従妹の女性は青色を帯びていた。2人は、小石に宿る小さな魂たちと交信することにより、石神の宿る青い石を見つけた。しかし、石神は、魂の力を弱める太陽の光を避けるため、昼間は眠る習慣があり、ちょうど眠っていた。2人は近くにあったたいそう目立つ杉の大木の木陰で夜を待つことにした。幼馴染みの女性は、石神を見つけた安心感から、ついうつらうつらと眠りこんでしまった。幼馴染みの女性が気がついたときには、自分自身が杉の大木の中に宿らされてしまっていた。それは、従妹の女性の仕業だった。

従妹の女性は幼馴染みの女性に、

「どうかこの木の中で末長くお幸せにお暮らしなさい。わたくしはあの方には会わずに帰還致します」

と告げて天に帰還してしまった。

石神の種族は、石のような無生物に宿ることはできるが、生きた細胞から成る生物に宿ることはできなかった。しかし、大きな木は、死んだ細胞が柱となって重さを支え、その回りの生きた細胞が成長を続ける構造であったから、その柱の部分には石と同様に宿ることができたのだ。従妹の女性は、眠りこんだ幼馴染みの魂を、大木の柱の部分に強引に押しこんだのだった。石神の種族は、いったん宿主に宿ってしまうと、魂の一部を体外に離脱することはできたが、自力では完全に離脱することができなかった。さ

らに、幼馴染みの女性の場合は、周りを生きた細胞に囲まれていたから、魂の一部を離脱させることもできなかった。幼馴染みの女性は、そういった知識に疎く、全く知らなかった。だが、それで幼馴染みの女性を責めることはできない。天の住人のほとんどが、そういった知識を知らなかったし、知る必要もなかったのだから。そういう知識は、石神のような任務を課せられた場合にだけ教えられた。大木に宿ることになった幼馴染みの魂は、小石などに宿る小さな魂からの交信を傍受することはできたが、小さな魂に向けて発信することはできなかった。また、体外離脱できる人間を探したり、その人間と交信することもできなかった。つまり、幼馴染みの女性は、杉の大木の仲に幽閉されてしまったのだ。それは従妹の女性の陰謀だった。

そんなことは露ほども知らない石神は、夜になってようやく目覚め、いつものように魂の一部を青い石から離脱させ、オレンジ色を帯びた泡のような姿で辺りを徘徊し、杉の大木の近くにもやって来たが、幼馴染みの女性は何の言葉も発信できなかったから気付かなかった。一方、大木に幽閉された女性は、こうした石神の活動を小さな魂たちの交信を傍受することによって逐一知ることができた。こうして月日は流れていった。

女性の魂が宿る杉の大木が枯れたのは約300年後の1911年のことだった。しかし、杉の大木は枯れた後も御神木として保存されたため、女性の魂は解放されなかった。杉の大木が枯れてしまったから、女性は魂の一部を大木から離脱させたり、小さな魂たちと交信したり、体外離脱できる人間を探したりできるようになっていたのだけれど、女性はそのことを知らなかったから、相変わらず杉の大木に幽閉された暮らしを続けた。

杉の大木に宿る女性は、1985年に石神の宿る青い石が堀船町に運ばれたことも、石神が住民を巻き込みながらついに帰還したことも知っていた。そして、交代の石神がどこにあるどんな石に降臨したのかも知っていた。石神が帰還の儀式に手間取り焦っていたのは、天にいる誰かに早く会いたいからだということも女性には分かった。そして、その誰かが、自分自身に違いないということを女性は疑わなかった。だから、女性は、石神の帰還の儀式が失敗することを願った。もしも、石神が帰還の儀式に失敗すれば、石神はさらに1000年の間ここにいて、女性は石神の生活を見守ることができる。女性を幽閉した大木がその1000年の間に朽ちて粉々になれば女性は解放されるかも知れない。そして、再び石神に会えるかも知れないと思ったからだ。しかし、石神は帰還に成功してしまった。だから、石神がついに帰還したことを知ったとき、女性は絶望にうちひしがれた。女性は、涙を流すことはできなかったが、ずっと泣き続けた。そしてはやその

一生をこの大木の中で送る覚悟を決めた。

一方、青い石から天に帰還した石神は、直ちに愛する幼馴染みの女性を探した。しかし、求める女性は何処にもいなかった。幼馴染みの女性と仲の良かった従妹の女性にも行方を尋ねたが、従妹の女性は何となく嘘をついた。そんな失意の石神を慰めるように従妹の女性は石神に寄り添っていった。石神は、従妹の女性に優しく慰められるうちに、従妹の女性のとりこになってしまった。石神はまだ幼馴染みの女性を忘れることはできなかったが、ついに従妹の女性と結婚してしまう。石神は、天で幸せな家庭を作ったが、その心の底には、幼馴染みの女性の面影を抱き続けた。

石神が天に帰還した1985年は日本経済の絶頂期であった。しかし、1991年、バブルが崩壊し、失われた10年と呼ばれる長い経済低迷期が始まった。1997～1999年は、倒産が相次ぎ、大銀行さえ次々に倒産した。自殺者は1998年以降、3万人を超え続けた。大人たちは未来がバラ色から真っ暗に変わり、出口のない悲壮感に閉じ込められた。また、若者たちは出口のない冷たい生存競争を強いられたままだった。大学を出ても就職できずにフリーのアルバイトになる若者が増えた。結婚する人が減り、離婚する人が増えた。結婚した女性が必ずしも専業主婦になれるとは限らなくなった。1人住まいの世帯がメジャーになった。

一方、情報通信技術は、失われた10年の間も目覚ましい発展を続けた。1985年に研究レベルだったインターネットは、すでに現実のものとなり、世界に大きな変化をもたらした。1998年8月にiMacが発売され、低迷していたアップル社は、マイクロソフト社の資金援助と社長に復帰したスティーブ・ジョブズ氏の手腕によりよみがえった。iMac以降のパソコンは、パーソナルなコンピューターではなく、むしろインターネットへの窓口装置の役割を与えられた。

1985年に重さが3キログラムもあったポータブル電話は、大幅に小型軽量化され、常時携帯できる電話として爆発的に普及し、1999年時点の日本の携帯電話の普及台数は5000万台を突破した。さらに、1999年2月に、携帯電話からもインターネットアクセス（iモード）ができるようになり、情報通信技術の恩恵を誰もが手にする時代が始まりつつあった。

＊

アスナは、堀船町で柔道の道場を営む家の一人娘で、1999年には31歳を迎えようとしていた。アスナには、同い年の幼馴染みが2人いた。1人は隣に住む仁で、もう1人はアスナの家の道場に通っていた雄一だ。アスナは、小学校と中学校までは2人と同じ学校に通っていたが、高校からは2人とは別の学校に通った。

アスナは、1987年、高校を出た後、それなりの大学に入り、家から離れた吉祥寺という町に下宿した。アスナは、そばかすがチャームポイントと自分から言っていたが、顔立ちは美人で、運動神経抜群で均整のとれた身体と体育会系の性格を持ち合わせていた

から、大学の男子の間ではモテモテだった。しかし、アスナは、恋愛よりもフリーランスのライターを志向した活動を優先した。アスナの母親がフリーランスのライターをしていて、アスナはそれに憧れていたのだ。

アスナは、1991年に大学を卒業したが、すでに景気後退がはじまっていた。アスナは、定職に就かず、ライター志望者が集まっていた吉祥寺のシェアハウスを住処（すみか）にして、好奇心の赴くままにフリーランスのライターの活動を続けた。しかし、それは傍目にはフリーのアルバイトと同じだった。アスナの実家は、まだそれなりにお金があったから、それが許された。アスナは、シェアハウスに住むようになってから、宵っ張りの朝寝坊になり、やがて昼夜逆転の生活に変わっていった。幾人かのライター仲間の男性と付き合ったが、1994年、アスナはシェアハウスに住むライター仲間の久男という男性と同棲を始め、2年後に結婚した。アスナは、

「久男は、見掛けが茶髪だったりピアスだったりして、気になるかも知れないけれど、根は優しい人よ」

と久男を両親に紹介し、結婚式は行わずに仲間内のパーティーを開いた。

久男は、九州の居酒屋で働くシングルマザーの一人息子だった。久男は、同じシングルマザーの子供を題材にした記事を散発的に雑誌などに寄せていた。優しい視線から書かれた一連の記事は、それなりに定評があり、それらの記事をまとめて本を出すという話が1995年頃に湧いた。しかし、その話はスポンサーがつかずに頓挫した。

世の中に不況が広がる中、アスナの家々の道場は、門弟が次々に減りさびれていった。アスナの父親は、道場がさびれることに落胆し、酒を飲むと人が変わったように荒れるようになった。アスナの母親は、収入が不安定で外出の多いライターの仕事を減らし、収入の確かな翻訳の仕事を増やして、家にいるようになった。アスナの実家は、アスナと久男がライターを続けるのをだんだん支えきれなくなった。アスナと久男のライターとしての収入を合わせても、仕事量を減らしつつある母親のライターとしての収入より少なかった。

1997年、アスナと久男は家賃を節約するために、アスナの実家に住むことにした。しかし、久男と父親は、考え方も性格もことごとく合わなかった。久男は何かうまくいかないとすぐにしょうがないと言ったが、アスナの父親はしょうがないという言い草が大嫌いだった。アスナは久男を懸命に擁護したが、1998年、結局2人は離婚し、アスナはバツイチの独身になった。

誰か父親と合う男と結婚するか、それとももっと稼げる仕事を見つけるのか、アスナは決断を迫られた。アスナは、一時は幼馴染みの仁と雄一との結婚を考えた。アスナの

両親は、前の夫のこともあったから、それなりに立派な会社に勤めている仁や雄一なら文句ないと言った。そして、ライター仲間との結婚だけは、絶対に許さないと言を押しつけた。

アスナは、仁とは、1989年（平成元年）に行なわれた成人式以来顔を合わせていなかった。仁は隣に住んでいたにもかかわらず、昼夜逆転の生活を続けていたアスナとは行動の時間帯が違い過ぎて疎遠になっていたのだ。アスナは、おそらく仁はアスナを女性としては見ずに、気心の知れた幼馴染みとか母親のようにしか見ていないと思った。また、アスナの方も仁を男性というよりはむしろ幼馴染みとか子供のようにしか見ていなかった。

一方、アスナは雄一とは酔った勢いでキスしたこともあったし、雄一を男だと感じたことも多少はあった。それはアスナが久男と同棲する前のことで、ライターの仕事に苦しんでいるときに、雄一が居酒屋に付き合っ話話を聞いてくれたりしたからだ。しかし、雄一は、アスナとはいろいろな面で似過ぎていて、アスナは雄一に結婚相手としての興味や好奇心が湧かなかった。それに、アスナの知っている雄一では絶対にアスナの父親にかなわないから、きっと上手くいかないに違いないと思った。

アスナは、決して自分から閉じ込めたわけではなかったが、出口は次々と閉じられていった。

＊

アスナと仁の幼馴染みの雄一は、病気がちの祖父母と、都内の工場に通う父親と、祖父母の面倒を見ていた母親と一緒に堀船町の外れに住んでいた。雄一も運動神経がよくて小学1年生のときからアスナの家の道場に通って柔道を習った。小学6年生のときに、父親の勤める工場が都内から九州の田舎町に移転した。そこで仕方なく、祖父母を残し、両親と一緒に田舎町に建てられた狭い社宅に引っ越して行った。しかし、祖父母は、たびたび具合が悪くなり、そのたびに母親は堀船町の自宅に戻り、祖父母を看病する生活を余儀なくされた。雄一は、そのたびに鍵っ子になった。雄一は、友達と一緒に運動するのが好きで、孤独が苦手だったが、その田舎町では結局は孤独な生活を強いられ、学校の成績もみるみる下がった。母親と雄一の苦労を見かねた父親は、ついに雄一が中学3年生のときに単身赴任を決意し、父親は九州に残り、母親と雄一は堀船町の自宅に戻った。そして、雄一は、アスナと仁と同じ中学校に戻って来ると同時にアスナの家の道場にも再び通うようになった。

雄一の家は祖父母が病弱でお金がかかったから、雄一は大学への進学校は受験せずに仁と同じ都立の工業高校に入った。1987年、雄一は高校を出ると、ある繊維関係の大手企業の子会社に就職した。雄一は、持ち前の明るく積極的で誠実な性格から、上司にも職場の仲間からも、さらに取引先からもたいそう気に入られた。

雄一の会社には、美人でグラマーなパートの若い事務員がいて、雄一はその子とも仲良くなった。彼女は美保という名で、同じくらいの年齢の友達がたくさんいた。美保とその友達たちは、雄一が知らなかった遊びをいろいろと教えてくれた。雄一は、彼女の女友達の由美という子からも付き合っしてほしいと迫られるようになって、ずいぶん思い悩んだ。しばらくはずるずると2人の女の子と付き合い続けたが、ついにそれが2人にばれてしまって、雄一は美保と結婚することになった。

美保の父親は、ものすごく控え目な人で、足立区の外れの小さな一軒家に住んでいて、個人タクシーの運転手をしていた。美保の母親は、近くの小さな小料理屋の厨房を手伝っていた。美保には、美奈という姉がいるとのことだったが、結婚式にも来ず、どこで何をしているのかも分からなかった。美保に聞いても、親に聞いても、ただ言葉を濁すばかりだった。雄一の父親はこの結婚には終始反対した。しかし、単身赴任で家をあけていた父親の意見は通らなかった。1994年、ささやかな結婚式が開かれ、雄一の上司は、美人でグラマーな花嫁で羨ましい限りだと主賓の挨拶をした。アスナも仁も雄一の結婚式には呼ばれなかった。

雄一夫婦は、雄一の家近くにアパートを借りて住んだ。ところが、結婚すると美保は、家にいつかず、金遣いが荒くなった。また、しばらくは友達と遊びたいから子供は産みたくないと言い、早く孫が見たいと願う祖父母や両親と折り合わなかった。

1995年、雄一は27歳という若さで係長に昇格したが、その後、美保とは離婚してバツイチになった。雄一にとって、結婚は疲れることばかりでいいことなしだった。父親はほれ見たことかと言ったが、それは父親の威厳を取り戻すことにはつながらず、むしろ父親がいっそう家族の中で孤立することにしかなかった。

1997年、消費税が5%に上がり不況が深まる中、雄一の会社の親会社の業績が悪化し、雄一の会社も存続が危ぶまれるようになった。翌1998年末になると会社で早期退職の募集が始まり、雄一はその候補者に挙げられた。

雄一も出口が次々と閉じられていった。



祥子は、アスナの母親の弟の一人娘で、生まれつき耳が聞こえなかった。また、視力が弱くて小さい頃から分厚いレンズのメガネをかけていた。祥子の母親の実家は祖父が資産家で、都内に自宅があった。祥子の父親は、大手の銀行に勤めていて、たびたび転勤があった。祥子の一家は転勤のたびに引っ越して、祥子は転校するという生活を送っていたから、祥子は小さい頃から自分からは友達を作らず、何でも自分1人だけで頑張るという生き方を身に付けていった。その中で剣道の腕前を上げ、全国テストで1番の成績を取ったりした。しかし、祥子の友達と言えるのは、3歳年上の従姉のアスナだけと言ってよかった。祥子は、本来は美人のはずなのに、無愛想で大きなメガネをかけていたから、仁でさえ初めて会ったときは、悪い印象しか持たなかった。

1985年、祥子が中学2年生の夏休みに石神の騒動があり、祥子は石神に耳を治してもらった。祥子は体外離脱の能力をもっていて、石神と交信できたのであった。祥子の両親は祥子が転校ばかりで友達を作らずいつも1人であることに悩み、父親は嫌々であったが単身赴任をすることにして、祥子と母親は母親の実家に住むようになった。それ以来、祥子はブラスバンド部に入ったりして友達を作るようになった。

祥子は、中学を出ると、都内の有名私立大学の付属女子高校に行き、次いでその大学に行った。祥子は高校でもブラスバンド部を続けたが、大学に入ると、やっぱり剣道の方が性に合うと言って再び剣道に打ち込んだ。

1994年、祥子は大学を卒業したが、世は就職氷河期の真っ只中で就職口がなかなか見つからなかった。しかし、資産家の祖父のコネがあり、ある新興企業の幹部秘書として就職できた。祥子は頭が良かったから、秘書の先輩にも、その企業の幹部にも気に入られた。その後、祥子には、いくつもの縁談が持ち込まれた。祥子は、何人かの男性と付き合ったが、祥子が打ち解けた男性はあまりいなかった。それを見た同僚たちは、祥子は男性を値踏みし過ぎると噂し合った。

不況が深刻さを増した1997年に祖父が急死した。すると、投資の失敗による多額の負債が明らかになった。祖父の生命保険の保険金と都内の自宅を手離してもかなりの借金が残った。祥子の両親が残った借金の半分を返済したがそれが精一杯だった。祥子と母親と祖母は、祥子の勤める会社に近いアパートに引っ越して、母親は外で働くようになったが、よい働き口はなかなか見付からず、いつまでに借金が返せるかメドさえ立たなかった。さらに、翌1998年、祥子の父親が勤める銀行が破綻してしまった。単身赴任で離れ離れの生活が続いていた祥子の両親は、度重なる苦難を目の前にして、お互いの心が離れていき、ついに離婚した。祥子に縁談は来なくなり、秘書の先輩から祥子への

風当たりは強くなった。ただ、幹部は相変わらず祥子を気に入ってくれたから、同僚にはたいそうひがまれた。

祥子は、頼る人がなく1人で頑張っていたが、決してめげなかった。

＊

仁は、一言で言えば不器用な人間であった。仁の両親は朝から夜まで堀船町の梶原商店街にある寿司屋で働いていたが、祖父母が同居していたから、仁は祖父母に育てられたも同然だった。仁の小さい頃は、一人っ子同士のアスナと雄一と兄弟のように仲良く遊んだ。しかし、仁が小学6年生のときに、雄一が九州に引っ越して行き、祖父母が相次いで亡くなると、仁は1人で閉じこもるようになった。仁は、いろいろな人間と上手に付き合っていくことが下手だったのだ。そして、仁は、祖父に付けてもらった名前では呼ばれずに、みんなからオジンという馬鹿にしたようなあだ名で呼ばれるようになった。しかし、幼馴染みのアスナと雄一は、仁を馬鹿にしたりオジンと呼んだりせず、子供の頃と同じように、仁と呼んでくれた。

仁は祥子と同様に体外離脱する能力をもち、1985年の石神騒動の際には石神と交信し、祥子の願いをきいて、石神を帰還させるために懸命になった。また、仁は両親の働く寿司屋の常連客で、やっさんと呼ばれる人に出会い、パソコンやインターネットに強い興味を覚え、雄一と一緒に高校にパソコンクラブを作って活動した。

1987年、仁は高校を出ると、やっとのことでやっさんの会社に入ることができた。そして、やっさんの会社の中にある専門学校に入った。仁は女性には目もくれず仕事一途だった。やっさんも仕事人間で人より早く49歳で本部長になったが、たいそうな晩婚だった。

仁の両親の寿司屋は、バブルの絶頂期でも大して儲けてはいなかったから、一転して不況になっても、あまり深刻な影響を受けずに寿司屋を続けられた。1991年、寿司屋の親方が亡くなり、親方の遺言で寿司屋は仁の父親に譲られることになった。仁の父親は中学を出てすぐ寿司屋の見習いとして働きはじめ、それ以来35年にわたり朝から夜まで働きづめでやってきてやっとなり寿司屋の親方になった。それは仁の父親にとっての勲章だった。親方の葬式は仁の父親が喪主となって盛大に執り行われた。商店街の仲間もこれで親方は成仏するだろうと言った。後は仁が結婚してくれたら言うことなしだと商店街の仲間は言った。しかし、仁は仕事に精一杯で、自分の結婚のことを考える余裕は仁にはなかったのだ。

1997年、仁が人よりやや遅れて29歳で係長に昇格すると、仁の両親は、仁がもっと結婚に本気になることを願って寿司屋の2階に引っ越して行き、仁の自宅は仁に譲ると言った。それ以来、仁は自宅に1人で住むようになったが、仁の生活は相変わらず女っ気なしの仕事一途の生活だった。晩婚のやっさんが心配していくつかのお見合い話を紹介してくれたが、仁はお見合いで悉く相手の女性から断られてしまい、仁にとっては、自分が女性にモテないことの念を押されたようなものだった。

1998年、寿司屋に住むようになった仁の父親は商店街の副会長になった。父親は、仁の助言を聞いて、商店街にインターネットを使った通報システムを導入した。要は、携帯電話の短縮ダイヤルを使って交番のお巡りさんに連絡するという簡単なものだったが、堀船町の派出所のお巡りさんが協力的で、連絡するとすぐ来てくれたので好評だった。

同じ年、仁は、やっさんのお供をしてアメリカに出張する機会を得て、ワシントン州シアトルの郊外のレッドモンドにあるマイクロソフト社で、やっさんがディビッド・カトラー氏に会うのに立ち会った。ディビッド・カトラー氏は、次世代OSを開発するためにあるコンピューター会社からマイクロソフト社に移った人で闘うプログラマーと呼ばれる人だった。また、カリフォルニア州サンフランシスコの南に広がるシリコンバレーの一角のクパティーノにあるアップル社で、やっさんがスティーブ・ジョブズ氏に会うのにも立ち会った。仁は、世界中の誰もがインターネットを利用して相互コミュニケーションや情報にアクセスを行い、社会や文化が発展するようにしたいと思った。そして、仁が会社で取り組んでいるデータセンターやアプリケーションやサービスがみんなの役に立つことを願った。しかし、一般的に言えば、仁は仕事に閉じこもりの、うだつのあがらない会社員だった。

仁は不器用な人間のまま、仕事だけに閉じこもる人生を送っていた。

1999年の梶原商店街の夏祭りでは、「不況を吹き飛ばそう」をキャッチフレーズに新たにいろいろなイベントが企画された。商店街の副会長になっていた仁の父親は、仁をイベントに動員した。また、仁の刺激になればと考え、幼馴染みで結婚経験もある雄一とアスナも呼ぶことにした。お礼に後で寿司屋でご馳走するからと父親は付け加えた。仕事一途だった仁は、雄一やアスナに会うのは成人式以来10年ぶりだったと改めて気付く、2人に会うのが楽しみだと言った。雄一は、先行きが不安でモヤモヤしていたから、気がまぎれるかも知れないと言って乗り気になった。アスナは、今度の取材を最後にライターの仕事から足を洗えと厳命されていて、最後の取材に一人で行くのは余りにも寂しいと祥子を誘っていたが、夏祭りのイベントにも祥子を誘いたいと仁の父親に言った。祥子は、アスナとはたまに顔を合わせていたが、仁や雄一のことはずっと忘れていた。しかし、アスナに頼まれて参加することにした。

4人は夏祭りのイベントで再会し、その後、仁の両親の寿司屋の奥座敷でお互いの身に起こったことを語り合った。寿司屋の奥座敷で開かれていた商店街の寄合は、もう開かれなくなっていた。商店街の会長だった乾物屋さんは、介護病院に入院した。大柄な体格を誇った本屋さんはガンで亡くなった。洋品屋と写真屋は店がはやらなくなって店を閉めてどこかに引っ越して行った。アスナの母親と仲の良かった女性文化人は、アスナの母親がライターの仕事を減らしたことを機に、他の町へ移って行った。アスナの父親は、酒を飲むと人が変わるようになってから、寿司屋には出入りしなくなった。道場の師範代は、違う道場に移って行った。大先生は老衰で亡くなり、中学の中村先生は、別の中学校に赴任して行った。あの当時と変わっていない常連メンバーは、やっさんと二代目の他には、床屋くらいしか残っていなかった。商店街もずいぶん様変わりしていた。洋品屋があったところに3階建てのビルができ、1階に洋食屋が入り、2階と3階は学習塾だった。写真屋や文具屋はなくなり、新しくコンビニやクリーニング屋ができていた。

仁は、みんなの境遇がずいぶん変わっていたことに驚いたが、ほかの3人は、仁は相変わらずだと感じた。4人で飲みながら話すのは初めてだったが、祥子はお酒が飲めないと言って飲まなかった。仁はお酒が苦手だったけれども皆に付き合うことにした。仁には、大人になった祥子がまぶしく見えた。14年前の祥子の思い出が、仁の脳裏にフラッシュバックのようによみがえった。ほぼ初対面の時、祥子は僕に手をつないでほし

いと平然と言った。石神騒動の最中にも、祥子は素直に僕と何度も手をつないだ。青い石を壊せば石神が帰還できるのではないかという祥子のアイディアが当たったとき、祥子は僕と手をつないで喜びを分かち合った。石神が帰還した後の夏祭りでも、祥子は僕に手をつないでほしいと言った。クリスマスイブに祥子が突然現れて僕にキスした。

あのときの祥子が仁を好きになっていたことを、仁は痛いほど感じ取っていた。しかし、祥子のような純粋で清らかな女性に自分のような男は全く不似合いなことも、同時に痛いほど感じていた。だから、仁は祥子への恋心を封印して身を引くことにした。しかし、仁は、祥子を忘れたりしなかった。祥子がまだ独身だと聞いて、まだ独身なら諦め切れないではないかと仁は恨めしく思った。

仁があまり変わっていないように思ったアスナは、  
「まさか30過ぎて童貞じゃないでしょうね」  
とからむような口調で仁に言った。しかし、仁は童貞のままだった。  
「じゃあ、キスもしたことないんじゃないの」  
「いや、14年前のクリスマスイブに、祥子さんとキスした」  
と苦しまぎれに仁が白状すると、祥子が、  
「いやだあ、そんな昔のこと」  
と言ったが、みるみる顔が赤くなった。アスナが、  
「いいじゃない。別に恥ずかしがらなくても。アタシだって最初のキスの相手は雄一だったと思うし」  
と言うと、雄一が、  
「酔いにまかせて出まかせを言うなよ」  
と言った。アスナは、話をはぐらかして、  
「あんなにでかいアレなのに、童貞は惜しい」  
と言った。  
「なんだよ、アスナは見たのかよ」  
「そうよ、アタシ見たわ」  
と昔、仁の部屋で仁がマスターベーションしているのを目撃したことをみんなにばらした。仁は、  
「ああ、でもその後にアスナの部屋にパソコン通信セットを持って行くと、アスナが肌もあらわな格好をしていて、腋毛が生えているのが見えた」  
と言った。

「とてもエロチックだった」

とも言った。

「あら、そんなことならナンボでも・・・」

と言ったところで、雄一が、

「イエローカード！」

と言った。

「ところで、様子ちゃんは処女ではないわよね」

様子は、

「えっ、そんなぁ」

と言って、また顔を赤らめた。

「セックスってどうなの？ アスナお姉さん」

と様子がアスナに向かって座りなおして尋ねると、アスナは少し後ろに引きながら、雄一を見てあなたが答えなさいなという目をした。雄一は、

「そうだなあ、セックスとは、男が男になり、女が女になる決定的な瞬間だな」

と言った。アスナが、

「へえー、雄一がそんなことを言うとはね」

と茶化すと、雄一はアスナに向かって、

「あいつに誰か紹介してやれよ」

と仁に目をやりながら言った。しかし、アスナは笑いながら、

「やあよ」

と言った。

アスナは、明日の取材を最後にライターの仕事から足を洗うと言ったとき、仁にどうしても一緒に取材に同行してほしいと言った。アスナは、最後の取材に一人ぼっちで行くのは余りにも寂しいと思い、様子を誘っていたのだけれど、今夜の雰囲気仁と一緒に一番安心できるような気がして、酔いにまかせてわがままを言ったのだ。すると、雄一も一緒に行くと言った。明日の取材とは、飛鳥山と青い石のあった平塚神社の間にある一本杉神明宮の取材だったから、雄一は14年前にリヤカーを引いて平塚神社に行った時のことを思い出して、あの頃は無邪気で楽しかったと懐かしがった。

「様子さんも行こうよ」

と仁が様子も誘うと、アスナは、

「わあ、みんなで行くのね、うれしい」

とはしゃいで手をたたいた。

翌日の日曜の朝、4人は仁の家に再び集まった。祥子は、14年ぶりにアスナの家に泊まった。今朝もあの日と同じように晴れていて、暑くなりそうな気配だった。仁の家の庭には、あの割れた青い石があのかのときのまま踏み石になっていた。砕けかけた2つの庭石とリヤカーはどこかに処分され、すでになくなっていた。仁のおじいちゃんとおばあちゃんが世話をしていた松の木と梅の木はきれいに剪定されていたが、仁は自分で剪定していると言った。祥子が梅は実がなるのと聞いたので、仁は梅は1本じゃ実は生らなくて2本以上ないと実は生らないのだと言った。雄一がさすがオジンと呼ばれるだけのことはあると茶化した。2階の仁の部屋につながった木造の物干し場は、傷んでぼろぼろになっていたが、仁は、

「まだちゃんと使っているよ」

と言った。

「でも、アスナの部屋から飛び移ると壊れるかも知れないな」

と言った。アスナが、

「あの部屋はアタシが吉祥寺に行っている間に納戸に変わってしまったの」

と寂しそうに言った後、

「昨日は、アタシ、酔ってしまってゴメン」

と言った。仁を除く3人は、仁の家や青い石を見て、改めて仁の家も仁自身もあのかからまるで時間が止まっていたかのように変わらないなと感じた。

「それでね、アタシと祥子ちゃんでもたまたまお弁当を作ってきたのよ」

とアスナらしくなく伏し目がちになって言った。仁には、アスナの目に涙がにじんでいたように見えた。

「赤と青の水筒はもうなくなっていたから、水分補給は各自途中の自販機でご自由をお願いしますね」

とアスナは顔を上げながら言った。雄一が、

「あれからずいぶんたった気がするなあ」

と言った。仁は、そんなに昔でもないよなと思ったが、口には出さなかった。

4人は、あのリヤカーを引いた同じ道をたどって行った。道の景色は、ところどころが前と変わっていた。仁は、変わったところを発見するたびに、子供のように、あそこが変わったここが変わったとはしゃいで言った。あのかは、仁が一番口数が少なかったが、今日は仁が一番口数が多かった。仁は祥子と一緒に知らずのうちに心が弾んで

いた。仁は庭に木を植えている家が少なくなっただけで残念だと思った。子供の頃に内緒でその果実を頂戴した無花果や柿の木はほとんどなくなっていた。石神井川は、水が少なかった。飛鳥山はずいぶんきれいな公園になっていた。飛鳥山の頂上あたりに売店があって、堀船町の方面を見渡すとあのときと同じように上空に入道雲がもくもくと湧いていた。午前中というのに、もうかなり暑くなっていた。

雄一が、

「まだ弁当には時間が早いよな」

とお弁当にずいぶん期待しているような口ぶりで言うと、アスナが、

「お楽しみは、あ・と・で」

と言って、うふふと笑った。そこで一休みして、喉を潤してからまた歩いて行くと、細い道路をまたぐように鳥居が立っていた、七社神社と記してあった。

「昔、一本杉神明宮があった場所に七社神社が引っ越してきて、今は七社神社と言うの」

とアスナが解説した。鳥居の下道路を行くと、やがてこじんまりとした神社が見えてきた。



杉の大木に宿った女性の魂は、なぜか胸騒ぎがして落ち着かなかった。仲間の魂が近付いてきているような気がするのだった。でも、そんなはずはない。錯覚に違いないと思うのだけれど、その感覚はますます強くなってきた。仲間の魂は2人いると分かった。でも、誰？ 石神？ あの憎き従妹？ その2人はますます近付いてきて、女性の魂には、それが仲間ではなく、仲間に似た別の種族、つまり天にいたときに交信したことのある人間の魂であると分かった。

＊

4人が神社に着くと、目の前に公孫樹（いちろう）の大木がそびえ立っていた。雄一は、

「一本杉神社じゃなくて、大イチョウ神社の間違いじゃないのか？」

と言うと、アスナは、

「誰かがそう言うと思ったわ。でも、ここが昔は一本杉神明宮だったのよ」

と言った。そして、社殿の方へ行き、誰かいないかと探すと、おばあさんが出てきた。アスナは早速インタビューを始めた。仁を呼んで、一緒に聞いてほしいと言うので、仁も傍でインタビューを聞いた。雄一と祥子は、イチョウの大木の周りに立っている立て札や石碑を順番に見てまわっていた。アスナは前もって調べていたようで、おばあさんは、そうですとしか言わなかった。インタビューは呆気なく終わってしまい、アスナはおばあさんにありがとうと言った。仁もつられてありがとうと頭を下げた。仁が頭を上げると、

「ああ、もう限界かなあ」

とアスナが両手を上にあげて伸びをしながら言った。雄一と祥子は、インタビューが終わったと見て、アスナと仁の方に向かってきた。

「何が？」

と仁が聞くと、アスナは、

「だって、取材して分かることが、インターネットを検索して分かることと大して変わらないんだもん」

「最近のインターネットの情報は詳しいからなあ」

「でしょ。ライター泣かせなのよ」

「でも、そのインターネットの情報だって、誰かが取材して書いているわけだし・・・」

「それはそうなんだけど・・・」

とアスナは口をとんがらせながら悔しそうにつぶやいた。

「おーい。取材はもう終わったのかよう」

と雄一は言って、

「んじゃ、ちょっと早いけどお弁当にするか。お弁当。お弁当っ」と

祥子が、あきれたという風な顔で雄一を見たので、

「そうだね。まずは一本杉とやらを見学してからにしようか。アスナ、一本杉はどこにあるの？」

「あきれた」

とアスナは言った。そして、アスナは、3人を引き連れて、イチョウの木の向こうにいくつも並んでいる小さな社に向かった。七社神社というだけあって、境内には小さな社が片寄せあって並んでいて、ひとつひとつが小さな神社だった。そのうちのひとつが天祖神社であり、それが昔の一本杉神明宮であった。そして、その小さな社の裏に枯れた杉の大木があった。枯れた大木をそのままにしておくと倒れて被害が出る可能性があるからと、地上4メートルくらいのところで上は切断され、大きな切り株になっていた。切り株のてっぺんには三角の屋根が取り付けられ、注連縄（しめなわ）が巻かれ、紙垂（しで）がいくつも垂れ下がっていた。切り株は、狭い社の裏にあり、柵があったので、そばには近寄りにくくなっていた。

＊

杉の切り株の中の女性の魂は、小石に宿る小さな魂たちからの情報によって、4人の人間が近付いてきていることを知った。そして、この大木に宿ってから一度もなかったことであったが、そのうちの2人についてはそれぞれの魂の存在を感じることができた。仲間の魂に呼びかけるのと同じように呼びかけてみれば交信できるような気がしたのだが、女性の魂はじっと黙っていた。なぜなら、女性がこの大木に幽閉された後、あの石神の魂がこの大木に近付いたときに、女性はあらん限りの声をふりしぼって石神の魂に呼びかけたのだけれど、その呼びかけは石神には届かなかった。また、小石に宿る小さな魂にも呼びかけたけれども、その呼びかけも通じなかった。それ以来、女性の魂は自分から発信するのはやめていた。だから、今日も呼びかけを発信するのはやめ

たのだった。だが、杉の大木が枯れた今では、女性の魂が発信すれば、相手の魂に届くのであったが、女性の魂はそのことを知らなかった。

＊

「へー、この杉の木もずいぶんでかいな。アスナ、この杉の木は樹齢何年くらいなの？」

「1000年くらいと言われているわ」

「へー、それじゃあ、あの石神が降臨した頃からここに生えていたわけだ」

「でしょ。だから、アタシ、何か新しいスクープがあるんじゃないかって予感がして取材することにしたの。でも、取材して得る情報がインターネットに負けてるようじゃね。やっぱりライターのを洗おうって・・・」

「おいおい、ライターに未練たつぷりだな。先生にライターは辞めろって言われたのか？」

雄一は、アスナの家の道場の門弟だったから、今でもアスナの父親のことを先生と呼んだ。

「ううん、お母さんに言われた」

とアスナは悔しそうにつぶやいた。アスナは、ライターをしていた母親に、小さい頃から憧れていて、高校、大学、そして卒業してから現在まで、母親にほめられたくてライター活動に打ち込んできていたのだ。

「あの切り株にも別の石神が宿っていたならスクープだったのにな」

と雄一が言った。

「でも、あのとき石神さんは、そんなことは言ってなかったと思う・・・」

と祥子が言うと、仁が言った。

「祥子さん、真面目に答えなくてもいいよ。雄一のは冗談なんだからさ」

「それじゃ、面白いからちょっとだけ調べてみようぜ」

と雄一が言って、柵を乗り越えて杉の木に近寄ると、扉にノックするように拳で切り株をたたいた。

「石神さあーん、起きてくださいよー、石神さあーん」

「何よそれ」

とアスナが怪訝な顔を見ると、雄一は勝ち誇ったように、

「石神は昼間は眠っているんだ。でも、こうすると目が覚めるんだ。な、そうだろ？」

と言って、仁を見てから、再び切り株をノックした。あの石神の騒動のときを思い浮かべ、一同は確かに雄一の言う通りだったと思い出した。

「どう？ 石神は起きた？」

と雄一は仁と祥子を交互に見比べながら尋ねた。

「わからないわ」

仁は、ええい面倒だとばかりに柵を乗り越え、杉の切り株に両手で抱き付き、幹に耳を当てた。

杉の切り株の中の女性の魂は、冷静に4人の振る舞いを観察していたが、仁の行動に不意を突かれて取り乱してしまった。切り株の女性にとって、その魂の存在を感じない雄一の行動は、女性になんの感覚ももたらさなかったが、女性の仲間と同じように、その魂の存在を感じさせる仁の行動は、女性の感覚を刺激した。女性の魂にとっては、いきなり男性に抱き付かれ、キスされたようなショックだったから、

「きゃあーっ！」

と女性の魂は悲鳴を発信した。その悲鳴は、アスナと雄一には聞こえなかったが、仁と祥子にはよく聞こえた。

「石神がいたあー」

と仁は叫んだ。祥子は、

「女の人みたい。女神だと思うわ」

と言った。夏の空気が一瞬だけ固まった。しばらくして木々の葉が揺らぎはじめて、いつものように時間が流れ出したように仁は感じた。雄一は、仁と肩を組んで、

「ほんとか、ほんとか」

と笑顔で言った。アスナは、しゃがみこんで、信じられないとつぶやいていたが、思いついたように急にぴよんと立ち上がると、

「アタシ、この際、その女神にインタビューしたい」

と言った。石神の種族をアスナがインタビューするやり方を4人は思い出した。ただし、今回は、雄一も仲間に入れろと言ったので、少々ややこしい組み合わせになった。すなわち、アスナと雄一がそれぞれの右手と右手を握り、それぞれの左手と左手を握る。仁が右手を切り株に当て、左手でアスナの右手と雄一の右手を握る。祥子は左手を切り株に当て、右手でアスナの左手と雄一の左手を握るという体制だ。アスナが、

「こんにちは女神さん、アタシはアスナです」

と言うと、果たしてその声は切り株の女性には届いた。しかし、切り株の女性はずぐには返事ができなかった。女性が天にいた2000年ほどの間に、こんなにあわただしいことはほとんどなかったし、杉の木に幽閉された400年の間にも全くなかったから、女性が冷静さを取り戻すには時間がかかった。その間、4人は順番に切り株に向かって呼び続けた。

「オレは雄一です」

「私は祥子です」

「僕は仁です」

女性は思った。天では4人が1人に対して同時に呼びかけることはほとんどしない。1人ずつ時間をかけて交信する方がお互いにいいはずなのに、ここの人間たちはなんてせっかちなのかとあきれてしまった。しかし、そう考えることで女性は落ち着きを取り戻すことができた。

「わらわハ、女神デアル」

アスナは、やっと、切り株に宿った女神から返事があったことに嬉しさを隠せなかった。

「あなたに出会えて、アタシは本当に幸せです」

とアスナは思ったままと口にした。

「わらわハ、驚イテイルノデアル。オ前タチハ、ドウシテ、わらわガココニイルコトヲ知ッタノデアルカ？」

「まあね。それよりも、あなたはあの石神さんと何か関係があるですか？」

雄一は、アスナの会話を聞いていて「あの石神さん」で分かるわけないだろうと思った。しかし、見知らぬ相手には通じたようであった。

「オ前ガ語ル石神トハ、青ク四角イ石ニ宿リ、今カラ14年前ニ帰還シタ魂ノコトデアルノカ？」

「そうです。そうです。あなたはあの石神さんの仲間なんですよ。恋人ですか？」

雄一は、なんてアホなインタビューなんだ。恋人ならば、ここにいたらおかしいだろうと思った。しかし、石神の種族は嘘は言わなかった。

「ソウデアル」

「だったら、石神さんはずいぶん前に帰還してしまったのだから、あなたはここにいるより、早く帰還した方がいいと思います」

「ソウデアル」

「それじゃ、アタシは石神さんをここに呼ぶのがいいと思います」

切り株の女性は、アスナの思考に追いついていなかった。

「石神ヲココニ呼ブトハ？」

「あなた方は、なんだかいろんなところに宿る魂を経由して、あなた方が天と呼ぶところにお願いができるって聞いてますから」

「・・・」

仁も雄一も、そして祥子もアスナの思考には追いついていなかった。

「あの石神さんは帰還したから、天に連絡すれば呼べると思います。多分あなたは切り株から離脱できないから、帰還の儀式をやってほしいとか言うでしょうが、あれをまた堀船町でやるのは結構たいへんなので、石神さんと呼んで連れて帰ってもらった方が早いと思います」

ここに至って、アスナ以外の3人は、アスナが何を言いたいのかを理解した。

「やっぱりアスナは大したもんだ」

そう言ったのは、雄一だった。

切り株の女性が天と連絡を取るのは結構手間取った。しかし、30分くらいかかってなんとか天に連絡ができて、天にはあの石神がいて、1週間くらいの間には、石神がここに再びやってくるつもりだとの石神からの連絡が届いた。切り株の女性はもちろんのこと、アスナたち4人もたいへん喜んだ。

「さあ、お弁当、お弁当」

と言ったのは雄一だったが、

「雄一は、どうして、そんなに軽いの！」

とアスナにたしなめられた。そして、アスナは、もう少しインタビューを続けたいと言ったので、みんなは止む無く、アスナの気の済むまでインタビューを続け、やっとお弁当の時間にしたのだった。お弁当は、あのときと同じ、きれいに揃ったおにぎりだった。

アスナは、今朝、おにぎりを握ったときのことを思い出した。今朝はあんなに悲愴感を抱いておにぎりを握ったのに、今みんなと一緒に食べるおにぎりには、悲愴感は消えて、あのときと同じようなポジティブ志向の味が戻ってきたように感じた。

＊

その頃、切り株の女性の発信した連絡によって、天の石神の家庭と親類縁者の間では

大騒ぎになった。石神は天の番人に問い合わせ、幼馴染みの女性と従妹の女性が、400年前に石神の降臨した付近に降臨し、従妹の女性だけが帰還した事実を知った。直ちに天の法廷が開かれ、従妹の女性が嘘について石神と結婚したことが明白となり、結婚は取り消された。また、従妹の女性は罰として、この宇宙のどこかの大地の動きの情報を収集する任務を課せられて、1000年の任期で降臨させられることになった。そして、石神は、幼馴染みの女性を連れて帰るために再び降臨することを許された。

実は石神が1000年前に関東地方に降臨したのも、天の法廷が石神に下した罰だった。幼馴染みの女性は小さい頃に両親が決めたある男性の許嫁（いいなずけ）だった。しかし、女性は石神を好きになり、決められた男性との結婚は解消したかったのだけれど両親には言い出せなかった。それを知った石神はその男性と幼馴染みの女性との婚約パーティーに乱入して暴れまわり、婚約パーティーを台無しにした。その男性は女性が石神を好きなことを知らずにいて、好きな人がいるなら婚約は解消すると言った。石神は、穏やかに話し合えば済むところだったにもかかわらず、勝手に乱入事件を起こし迷惑をかけた罪で関東地方の青い四角い石に降臨させられたのだった。

＊

4人は、お弁当を食べ終わると七社神社を後にして、来た道に戻った。  
「アスナよう。お弁当ありがとな。うまかったよ。それにしても、ライター活動の最後が大スクープでよかったな」

と雄一が言った。アスナは、メモ帳を確認しながら歩いていたが、  
「でも、やっぱり、お母さんは許してくれないと思うなあ」  
「だよなあ」  
「だって、お父さんが、アレだし。もっと安定した仕事を見つけなくちゃ。アタシも30過ぎて心配ばかり掛けてるわけにはいなくなっちゃったの」

「オレも先生にはずいぶん会っていないからな」  
「でも今は、会わない方がいいと思うわ」  
雄一は、しばらく間をおいてから空をにらむようにして、  
「いいや、オレ、先生に会う」

と言った。雄一は、昨日アスナから、アスナの父親が酒に溺れて荒れていると聞いてから、アスナの父親に会うべきか会わないべきか心が揺れていたのだ。しかし、雄一

はやっぱり会おうと決めたのだった。

アスナと雄一が並んで歩いたので、仁と祥子は自然とそのうしろを並んで歩くことになった。仁が黙っていたので、祥子も黙ったまま歩いた。しかし、祥子は、つい口にしてしまった。

「仁さん。何でキスのこと話したの」

「ああ、ごめん」

「わたし、困る」

「だから、ごめん」

祥子にとって、1985年のクリスマスイブの仁とのキスは、仁への思いが届かなかった切ない思い出だった。昨日、仁がキスのことを明かして、祥子が今まで思い出さないようにしてきたあのときのことが、祥子の脳裏にフラッシュバックのようによみがえった。あのとき仁さんは、当初は石神の帰還に協力することを恐ろしがっていたにもかかわらず、私が石神の帰還を願っていることを知ると、見違えるようにたくましい男性に変身した。また、石神の帰還が絶体絶命のピンチを迎え、誰もが諦めていたときに、仁さんは1人だけ諦めずに頑張る続け、不可能を可能に変えた。さらに、仁さんは、私の耳を石神に頼んで治させてくれた。そして、私が引っ越して遠くに行ってもパソコン通信セットでいつも会話してくれた。あのとき私は、仁さんが初めて巡り合えた本当に心が許せて本当に頼りになる男性に思えた。あのとき私は、もしも仁さんが私のことを好きになってくれたらと考えて、胸がときめき、恥ずかしくて、うれしかった。それに仁さんとなると、自分でも不思議なくらい強い心を持てた。私は仁さんに、「私は強くないわ、でも強いふりでは負けないわ」なんて言った。私は仁さんに、「手をつないでほしい」と自分から何度も言った。そして、仁さんに「会いたい」とメールに書いた。クリスマスイブに会って、仁さんに自分から抱きついてキスした。あのとき仁さんは、私に優しく、いたわるようにしてくれた。でも、仁さんから私への恋心はついに伝わっては来なかった。あれから、祥子は仁のこともキスのことも思い出さないようにして今日まできた。しかし、あれから祥子は、他の男性を近づけはしなかった。祥子は、自分が今でもあのときの仁に恋していることに気が付いた。

祥子は、仁と並んで歩きながら、あれから、自分が仁さんに近づかなかったのは、仁さんを忘れてしまいたかったからなのか？ それとも、はっきりと仁さんに断られるのが怖かったからなのか？ それとも、あのとき、仁さんから私への恋心が来なかったと思ったのは、私の間違いだったのか？ そんな自問自答を繰り返していた。そして、



祥子はつい、「仁さん。何でキスのこと話したの」と口に出してしまったのだ。その答えが、「ああ、ごめん」では、祥子の自問自答は解けなかった。祥子は、仁がキスのことを覚えていたのは、あのとき祥子が気付かなかった「仁から祥子への恋心」の証しなのかどうかを知りたかったのだ。その答えは得られなかったが、不意に祥子は、みんなに言い出せなかった結婚話のことを仁にだけは言ってみようと思った。

「仁さん。あのね」

「なんです？ 祥子さん」

「あの。やっぱりいいです」

仁が祥子を見ると、とても悲しそうな顔に見えた。

「祥子さん。ほんとごめん。心底謝るよ」

祥子は、キスのことはもういいのと思ったが、仁が誠実に謝ろうとしているのを見て、仁はあのときと変わらず、心が許せて頼れる男性のままでいるように感じた。アスナが祥子との約束をほっといて、急に仁と一緒に取材に行きたいと言い出した訳が分かったような気がした。祥子は仁を信じてその結婚話を打ち明けた。

祥子の母親の実家が投資の失敗によって破産したとき、担保のなくなった母親の実家には誰もお金を貸してはくれなかった。祥子の両親が貯金をはたいて4000万円を肩代わりしてくれたが、まだ4000万円足りなかった。それで亡くなった祖父と親交のあった都内のある資産家にあたったがその資産家も既に亡くなっていた。その資産家の息子は親の資産を元に青年実業家になっていて、その青年実業家が4000万円を融通してくれた。祥子はその青年実業家には一度だけ会ったことがあり、男前で、頭も切れるとの評判があった。その後、祥子の父親の勤める銀行が破綻し、両親が離婚し、縁談も来なくなった頃、その青年実業家は祥子を嫁にほしいと言ってきた。その青年実業家の年齢は40歳だったから28歳の祥子よりも一回り年上だった。その青年実業家は、結婚すれば借金の4000万円はなかったことにしてもいいとも言ってきたのだという。

仁は、結構な話じゃないかと思った。あのとき、祥子への恋心を封印して身を引くことにしたのはやっぱり意味があったと思った。仁には、その青年実業家は、仁よりもはるかにマシな男性に思えた。

しかし、祥子はその青年実業家をどうしても好きになれないのだと言った。仁は、祥子がそうまでいうのなら、やっぱりこの結婚で祥子は幸せにはならないと思ったから、「相談してくれてありがとう。でもこの話はやっぱり断った方がいいと思う。祥子さんに似合いの男性がきっと現れるよ」

と仁は祥子に答えた。しかし、それは祥子の期待した答えではなかった。祥子の悲し

そんな顔は晴れなかった。

＊

それから1週間後の夜に、石神は降臨した。石神は、今度の降臨では石には宿らず、直径50センチくらいのオレンジ色を帯びた透明な泡のような姿で、空中に浮遊しついつつも帰還できる状態でやって来た。切り株の女性は、石神との会話から、石神は天ではあの憎き従妹の女性と一度は結婚し幸せな家庭を築いていたことを知った。

「アノ女性トハ縁ヲ切ッタノデアル。我ト結婚シテホシイ」

と石神は言った。しかし、女性はもう石神とは結婚しないと断った。女性は死ぬまでここにいたいと言った。この400年間は案外楽しかったと言った。大木に幽閉され何も発信はできなかったが、小石に宿る小さな魂たちがいろんな情報を教えてくれて、人間の世の移り変わりを見て来られたから退屈ではなかったと言った。石神はその後も何度も切り株の女性のもとを訪れて説得を続けた。

夏祭りの翌週の日曜日に、雄一はアスナの家の道場にやってきた。雄一が通っていた頃の道場は、日曜日の朝から稽古の音が外まで響いていたものだったが、今日の午前中は静かなものだった。雄一は朝から道場の前を行ったり来たりしていたが、なかなか中に入るふんざりがつかないでいた。しかし、午後には用事があったから、お昼が近付いて、思い切って道場の中に踏み込んだ。入り口を通り、下足箱が並ぶ6畳ほどの広さの土間に入ると、道場で誰かが動いている音がした。

「失礼しまーす。雄一です」

と雄一は大きな声で挨拶すると、道場の引き戸を開けて中を覗き込んだ。すると、アスナの父親が50畳ほどの道場でたった1人で汗びっしょりになりながら稽古をしていた。父親は、誰かが道場の入り口の引き戸を開けたのに気付く、稽古をやめて、近付いて来た。雄一は、土間に靴を脱いだまま畳に上がり、

「先生、雄一です。稽古の邪魔をして申し訳ありません」

と言った。父親は、雄一に気付く、

「おお、これは雄一君か。久しぶりだな」

と懐かしい笑顔で迎えてくれた。

「それで、今日は一体何の用だ」

と言いながら、引き戸の近くの壁に引っ掛けてあったタオルを取った。雄一は、アスナの父親が飲んだくれてると聞いたから、父親が稽古に励んでいるところに出くわして驚いた。

「先生。あのう。お1人で稽古されているのですか」

「今じゃ、不景気で門弟がいらないのだから、しょうがない。門弟がいなくても先生が稽古を休むわけにはいかなくてな。はは」

と笑いながら、タオルで流れる汗をぬぐい、乱れた道着の居住いを整えた。その隙に見えた父親の体は雄一には10数年前と変わらず引き締まっていて、とても60歳を超えた体には見えなかった。すると、2階から誰かが階段を駆け下りて来る音がして、道場の入り口からアスナの顔がのぞいた。

「ははあ、雄一、お前、アスナに何か頼まれて来たな」

「えっ、何を？ オレはアスナに何も頼まれてはいません」

「それじゃあ、なんでお前が来たら、アスナが顔を出すんだ」

「えっ？ アスナ？」

父親は、入り口のアスナに向かって大きな声を掛けた。

「アスナ、ちょっと来い」

アスナは、おずおずと道場の畳に上がり、2人に近寄って来た。

「お前、雄一君に親父が飲んだくれだとか何だとか、余計なことを言っただろう」

アスナは、だから今は会わない方がいいと言ったのに雄一ったら軽いから困ると思ったが、父親には神妙に、

「はい」

と答えた。

「雄一、何か言いたいことがあるのか」

雄一はここで言わなきゃ男じゃないと思ったから勇気を振り絞って言った。

「先生、先生が荒れているっていうのは本当ですか」

「はっはっは」

「本当ですか」

「アスナはいい友達を持ったな」

「誤魔化さないでください」

「そうムキになるな」

だが、雄一はそう言う先生の顔がうなだれているのを見てもう言葉が出なかった。

「雄一君、オレは一世一代の決心をしてここに道場を開いた。それはオレが食っていくためでなく、武道の素晴らしさをみんなに知ってもらいたいと思ったからだ」

父親は眉を上げ口をへの字に曲げて悔しそうに言った。

「だけど、これ以上オレに何ができる？」

雄一もアスナもただ黙って父親の言葉を聞いた。

「門弟のいない道場主に何ができる？　しょうがないじゃないか」

「だからといって酒に溺れたら絶対にだめです」

「なにおう」

「先生は、何があってもしょうがないと言うなと言いました。なのに今先生はしょうがないじゃないかと言っています」

雄一はアスナの父親に張り飛ばされた。雄一は、

「先生の教えが僕の原点です。先生は先生の原点を忘れていると思うから、僕は先生の原点を連れてきます」

と涙ながらに叫んで道場を飛び出して帰って行った。アスナは雄一はやっぱりアスナの父親にはかなわないなと思った。

雄一はアスナの父親より1歳年上で兄弟子のビクトル古賀という人を探し、会いに行き、アスナの父親について相談した。古賀氏はサンボの世界大会で41連勝すべて一本勝ちという快挙を成し遂げた豪の者だった。古賀氏と父親は柔道の兄弟弟子だったが父親は古賀氏に一度だけしか勝ったことがなかった。古賀氏は日本人の父親とロシア人の母親の間に生まれた混血児で満州で生まれ満州で育った。子供のときに終戦を迎え家族ばらばらになって満州から日本へ引き揚げてきた。日本で古賀氏は父親の親戚に預けられて育ちレスリングと柔道とサンボの猛者（もさ）となった。アスナの父親も戦争で父親を亡くし親戚に預けられて育ち柔道とサンボの猛者になった。似た境遇の兄弟弟子として競い合ったがコサックと武士の血を引き幼いときからコサック兵士の訓練を受けた古賀氏に父親はかなわなかった。しかしその頃から父親はしょうがないと言うなど自分に言い聞かせてきた。それこそが父親の生きる原点であった。

そんな存在の古賀という人をアスナは知らなかった。しかし、父親の門弟だった雄一はそれを知っていた。それはアスナにとってとても意外なことだった。アスナはアスナの知らなかった雄一の新たな一面を見出した思いがした。

＊

石神は杉の切り株の女性のもとに1ヶ月に二度、三度と訪れては説得を続けていたが、石神の種族の間では1ヶ月に1度以下というのが訪問頻度の常識であったから、1ヶ月に二度、三度というのは異常な頻度ということであった。天には地球上のように昼夜や季節はなく、石神の種族には23時間周期で生活するものもいれば、29時間周期で生活するものもいて、各自の生活リズムはばらばらだったから、あまり頻繁に話し合いを行なうと生活リズムに支障を来し、お互いに機嫌を損ね却ってまとまらなくなる傾向があったのだ。

切り株の女性は、石神があまりにも簡単に従妹の女性と結婚してしまったことに納得がいかなかった。なぜ女性が関東地方に降臨し石神に会いに行ったと考えてくれなかったのかと嘆いた。女性が見つかるまで石神が独身でいてくれたらと思った。だったら女性はもう結婚なんかしないと駄々っ子になっていた。だから、石神が足しげく女性のもとに通っていたのはむしろ逆効果だった。

＊

金木屋の香りが漂いはじめた9月終わりのある日曜日の午前中に、古賀氏は古き良き仲間たちを連れてアスナの家の道場にやってきた。古賀氏は雄一の願いに応え、言葉でアスナの父親を諭すことはできないが、せめて父親と組み手をすると行ってやって来た。連絡を受けて、かつての道場の門弟たちと仁と祥子もやって来た。師範代だった大学講師、体育教師だった中村先生、写真屋、お巡りさん、会社員、仁の両親、祥子の両親、それにやっさんも来た。

古賀氏は大柄な父親と並ぶと小柄な老人にしか見えなかった。古賀氏がアスナの家の道場に到着を着て立つとアスナの父親は、自らの原点を目の前に突き付けられた気がした。そしてあまりの悔しさに涙がこぼれた。

古い仲間たちと道場の門弟たちも到着に着替え、中村先生の号令で準備運動が始まった。道場のこんな賑わいは久しぶりだった。準備運動が終わると、みんなが見守る中、古賀氏と父親の試合が始まった。アスナの父親は前屈みで腕を伸ばして古賀氏をつかまえようと激しく動きまわったが、古賀氏は軽やかな身振りでそれをかわした。次いでアスナの父親が右手をぐいと伸ばしたときに、古賀氏も右手を伸ばして父親の右手をつかむと同時に父親の懐に体を入れた。すると父親の体がバネ仕掛けのようにビュンと宙に浮かび、後は古賀氏が右手で引くと大柄な父親の体が重さのない風船のように振り回されて畳に投げ落とされた。息を止めて見ていた人々が一斉に「ふーっ」と息する音が道場の静けさの中に広がった。古賀氏は言った。

「お前がぶよぶよの体でなくて良かったぞ。それでなくては投げられなかった。はっはっは」

それは、アスナの父親が片時も鍛練を欠かさなかったことを古賀氏が見抜いたということであった。

アスナと雄一が見守る中、父親は言った。

「オレはわかったつもりでわかってなかったのかも知れない。やはり、しょうがないと言ったら負けだ」

と雄一に向かって言った。雄一は、

「それでこそ先生だ」

と言って涙を流した。古賀氏は、

「お前はいい門弟に恵まれた」

と言った。

それから、ひとしきり道着を着た人たち同士で乱取りなどの稽古が行なわれた。稽古が終わると、みんなは道場の風呂場へ汗を流しに行った。その間に仁の両親は寿司屋の仕出し弁当を道場に運びこみ、道場に残った人たちは弁当を道場に並べるのを手伝った。着替え終わった人たちが風呂場から道場に戻ってくると、昼食を兼ねた大宴会が始まった。

その日の夕食のとき、アスナの父親はまだ感激していた。もう酒に溺れたりしないと言った。そして、全ては雄一のお陰だと雄一を誉めちぎり、雄一を養子にするとさえ言った。アスナは、雄一は父親との対決に勝ったのかも知れないと思った。そして、アスナは、雄一を養子にしなくたってアタシが雄一と結婚すればいいわけでしょと言った。アスナの父親がはっはっはと笑った。つられて母親も笑った。そしてアスナも笑った。それからしばらくして、古賀氏の推薦によって父親は自分の道場だけでなく、大学の道場でも教えることになったとの知らせが届いた。

アスナの父親と古賀氏の試合があった日に仁は祥子と再会した。祥子がどうしても仁に再び話をしたいというので、昼食会が始まると2人は昼食会を抜け出して仁の家に行った。居間に座ると、祥子は、あの青年実業家との結婚話をどうしても断れないと言って泣き出した。そして、祥子は、あの男と結婚するくらいなら、私は仁さんと結婚したいと言って、仁にしがみついた。仁は、震える祥子の肩を抱きしめながら、唐突な祥子の様子に戸惑いを隠せなかった。

祥子は、夏祭り以降の出来事を仁に語った。あの青年実業家は、若い頃、親の資産を食い潰す放蕩息子と言われたが、今は歓楽街の不動産業や高利貸しや建設業などで資産を増やしていること。戸籍上は確かに独身だが、愛人を何人も囲っているらしいこと。祥子がこの結婚話を断ろうとしても、誰も聞き入れてくれないこと。そして、来週の日曜日には有名な有力者や政治家を招待した婚約披露パーティが行なわれること。そのパーティーには、祥子の会社の幹部や秘書の先輩も招待されたこと。秘書仲間は祥子が青年実業家をたぶらかせて玉の輿に乗ったと言って祥子に嫌がらせをすること。祥子の母親と祖母はただ泣くばかりで無力なこと。祥子は、仁の腕の中で一気に語り終えると、14年前のクリスマスイブのときと同じように仁にキスをした。仁は、あまりのことに呆然として、祥子を強く抱きしめること以外に何をどうしていいのか分からなかった。祥子は、仁が強く抱きしめてくれたことを「仁から祥子への恋心」の証しと信じたかった。祥子は仁の家を後にしたが、心の中はまだ晴れずに曇っていた。

祥子が帰ると、仁はインターネットでその青年実業家のことを調べた。そいつは新宿の高層ビルにオフィスを構えていた。仁は月曜日に会社を休んで、単身乗り込んで行った。受付で自分は祥子の代理人だと言うと、いきなり社長室に通された。社長室はとてつもなく広く南側と西側の2面がガラス張りになっていて、遠くに丹沢と富士山が見えた。奥の東側の壁の前に立派な机があつて青年実業家とおぼしき男が座っていた。机の前には20人は座れそうなほどたくさんのソファとテーブルがあり、どれもたいそう豪華なものであった。そしてソファの1つに黒服で黒眼鏡の男が座っていて、仁に、「何の用だ」

と低い声で聞いた。そのあまりに威圧的な空気に負けないように、仁は一呼吸おいて奥の男に向かってゆっくりと話した。

「祥子さんはあなたとの結婚を望んではいません。ですからこの縁談はなかったことに



してください」

しかし、奥の男は眉1つ動かさなかった。代わりに黒眼鏡の男が、  
「痛い目にあう前に帰れ」

と再び低い声で言った。

「縁談をなかったことにしてくれるのか？」

黒眼鏡の男がゆっくりと立ち上がって仁の前にくると再び言った。

「帰れ」

「いや、このままでは帰れない」

「お前は彼女の恋人か」

「いや、幼馴染みだ」

黒眼鏡の男はにやりと笑った。

「金を持ってきたのか」

「いや、金は持っていない」

すると突然、仁はみぞおちに鋭い痛みを感じて息ができなくなった。

「お前はどこのへボ会社に勤めている？」

仁は冷静さを欠いて会社の名前を口走った。

「ほう、金はあるそうだな。後でお前の迷惑料を申し受けに行ってやるからそっちの社長に伝えとけ」

黒眼鏡の男はそう言うと、もう一度仁のみぞおちに拳を突き上げた。黒眼鏡の男は、胸を押さえてうずくまる仁を引きずって社長室を出て、裏口から廊下に出ると仁をエレベーターホールに突飛ばした。そして、

「いい事を教えてやる。今度の日曜日に社長の婚約披露パーティーがある。出たければ参加費は100万だ。わっはっは」

仁はあの黒眼鏡が会社に来たらたいへんなことになると思い、その日のうちに電話でやっさんに、実はヤクザみたいな男に絡まれて会社に迷惑料を取りに来ると凄まれたと報告した。やっさんは会社のことは心配すると言ったが、どうしてそんなことになったのかと聞いた。仁は、詳しくは気持ちの整理ができてから説明しますと言って電話を切った。

仁は青年実業家に対する強い怒りに取り付かれていた。急いで自分の貯金を調べると1000万円ほどあった。火曜日に、会社の総務部で社内融資について調べると、2000万

円ぐらいまでは会社が貸してくれるかも知れないとわかった。しかし、それには、例えば仁が祥子と結婚して自宅を建てるためといった理由が必要とのことだった。仁は会社に家の修繕費と嘘を言って社内融資を500万円だけ借りた。水曜日には、仁の家を抵当にして銀行ローンを2500万円借りた。そして金曜日までに4000万円の小切手を用意した。仁は4000万円用意したことを両親にも誰にも言わなかった。仁は、もしもこの4000万円をあいつに叩きつけて、自分が祥子と結婚したらと考えたが、4000万円を用立てて祥子と結婚したならば、あの卑劣な青年実業家となんら変わらないではないかと気付いた。仁は、僕は卑劣ではない、お金を用立てたことで祥子を縛ったりは絶対にしないと心に誓った。そして、祥子は僕みたいな男と結婚するより、祥子は祥子の本当に好きな男と結婚して、うんと幸せになってほしかった。祥子が二度と可哀想な目に合わないでほしいと願った。そのためには誰にも言わない方がいいと仁は考えたのだった。

水曜日に黒眼鏡は言葉通り仁の会社に迷惑料を取りに来たが、会社はさすがに大企業でその手の対策は完璧であったから、すげなく追い返されてしまった。すると黒眼鏡は、仁の父親が梶原商店街で寿司屋を営んでいることを探り出し、金曜日に寿司屋に現れた。しかし、携帯電話を使った通報システムによって、たちまちお巡りさんが駆けつけてくれたから、黒眼鏡はなすところなく退散した。仁の父親は口癖の「備えあれば憂いなし」だと言って喜んだ。

祥子はパーティー前日の土曜日に会場のあるホテルに連れて行かれた。ホテルで祥子は黒眼鏡の男から、仁という間抜けな男が社長室に乗り込んできてこの縁組を解消しろと言ったが、黒眼鏡の男に殴られて放り出されたと聞かされた。黒眼鏡は祥子に、お嬢さん、早く気持ちを切り替えることだな。そして、社長に尽くしてくれよなども言った。祥子は驚いたが、その仁の行動こそは、仁が祥子を求めていることの証しなのではないかと思った。しかし、もはや、どうすることもできないと祥子は嘆いた。結婚するなら仁としたかったという思いが心の底から込み上げてきた。祥子は自分の生きざまに悔いはないと考えてきたが、どうしようもない切なさに押し潰されそうだった。夕刻になって、祥子は密かに仁に電話をかけた。しかし、仁にはつながらなかった。祥子は絶望の海の中へ沈んでいった。

その頃、仁は杉の切り株のところにいた。切り株の女性はまだ切り株に宿ったままだった。仁は切り株の女性に石神を呼び出してほしいと助けを求めた。しかし、女性は石

神には会いたくないと言って拒絶した。仁は諦めずに食い下がった。切り株の女性も知っている様子と嫌いな相手との婚約披露パーティーが明日行われるが、石神に乱入してもらってそのパーティーを台無しにしてもらいたいと言った。すると、切り株の女性は、1000年前の天での石神の乱入事件を思い出して笑い始め、これでもかというほど笑い続けた。呆氣に取られた仁に切り株の女性は告げた。

「婚約披露パーティーヘノ乱入ナラバ、石神ガ適任デアル。石神ヲ呼び寄セルノデアル」

そして、女性は石神をたちどころに呼び出してくれた。現れた石神に女性が素早く仁の頼みを説明すると、石神も笑いはじめた。仁には彼らが笑う理由が思いつかなかったから、なぜそんなに笑うのかを尋ねた。すると、

「ソレハ我ガ恥デアルカラ我ハ語ラナイノデアル。悪ク思ウナ。次ニ、婚約披露パーティーヘノ乱入ニハ加ワルノデアル」

と石神は言い、続けて、

「オ前ノ企テヲ言エ」

と言った。仁は、石神が14年前に怒ったとき、窓ガラスがビリビリと鳴ったり、電気が明滅したがどうやったのか？ あれをまたやってほしいと石神に頼んだ。石神はあれは小石などに宿る小さな魂を利用したのだと言った。小さな魂たちは飼い犬みたいなもので、彼らはああして遊ぶのが大好きであり、石神たちと違って彼らは自力で物に宿ったり離脱したり自由自在にできるから、窓ガラスに宿ってビリビリいわせたり、電灯のスイッチに宿って明滅させて面白がるのだと言った。仁は、

「それだ！」

と言って、次の朝に再び石神と会う約束をした。

一夜が明けて、仁は礼服に白のネクタイを締めて、杉の切り株に急いだ。石神は待ちかねていた。仁は石神について来てくれと言うと、通りに出てタクシーを捕まえてホテルに向かった。タクシーの上には泡のような石神の姿が浮かんでいたが、仁以外の誰にも見えなかった。

一方、その頃祥子はホテルで青年実業家があつらえた純白のドレスを着付けされていた。眼鏡を外されコンタクトレンズに替えて化粧した祥子は輝くばかりの美少女に変わっていたが、その顔には絶望が色濃く浮かんでいた。

祥子が控え室で佇んでいると、着飾った青年実業家の愛人の1人が近づいてきて祥子

に言った。

「こんなパーティー、アタシも3年前にしてもらった。アタシ、馬鹿だから喜んで舞い上がってた。だけど、結局、アイツは結婚してはくれなかった。愛人にしてくれただけ」

その愛人は目を伏せながら言ったので、その表情は見て取れなかったが、祥子をからかうために近づいた訳ではなさそうだった。パーティー会場のホテルには青年実業家と祥子の初夜のためのスイートルームが予約されていた。

「あなた方のスイートルームの他に、アタシ達がVIPを接待する部屋も予約されているのよ。でなきゃお偉いさんたちがこんなパーティーに来るわけないでしょ」

と愛人は言い、

「でも、代わりに贅沢させてもらった。アタシもそろそろ潮時よね。あなた、馬鹿じゃなさそうだから、アタシみたいになっちゃだめ。しっかりして本妻になりなよ」

そう言って、愛人は去って行った。

仁と石神は11時過ぎにホテルに着いた。パーティーはすでに始まっていて、仁と石神はパーティー会場にもぐりこんだ。仁を知るものは青年実業家と黒眼鏡の男だけだったから彼らに見つからないようにしなければと仁は会場を見渡した。会場は広く前方の円卓に座っている人もいるが、後方の窓際のテーブルで立って談笑する人もたくさんいた。青年実業家は1段高いところのテーブルに祥子と並んで新郎新婦のように座っていた。黒眼鏡の男は青年実業家のすぐ前の円卓に座っていて、他にも黒服の男たちが何人かいた。純白のドレスの祥子は美しかったがまるで生気のない顔をしていた。仁は、窓際の大きなカーテンの陰に隠れ、今に救い出してやるぞとつぶやいた。

司会の女性が青年実業家の業績を長々と紹介していた。仁は石神に祥子への伝言を頼んだ。それは、仁と石神と小さな魂たちが祥子を救いに来たことと、石神に手伝ってもらってあの青年実業家が恐ろしがって二度と祥子に近づかないように怪物娘を演じてほしいことの2つだった。石神は誰の目にもとまらずに祥子のそばまで漂って行った。石神の後ろには、透明なピンポン玉のような姿のたくさんの小さな魂が金魚のフンのようについて行った。祥子には石神と小さな魂たちが漂って来るのが見て取れた。石神が祥子に仁の伝言を伝えると、祥子の顔にみるみる生気が戻ってきた。それを見て仁は無性にうれしくなった。

司会の女性が青年実業家にご挨拶をお願いしますと言ったので青年実業家は席から立ち上がって一礼した。そのとき祥子は青年実業家に告げた。

「私はあなたと婚約しません」

青年実業家は驚いて祥子の方を見た。祥子は無表情のまま、  
「婚約できるものならしてごらんなさい」

と静かに言った。何事が起こったのかと円卓のある前方の席がざわめきはじめた。祥子はもう一度青年実業家に言った。

「私はあなたとは婚約しません」

ざわめきが広がり始めると司会の女性は機転をきかして、  
「お静かに。しばらくお待ちください」

と告げて青年実業家のもとに駆け寄り、恐ろしい顔で祥子をにらみつけた。しかし、祥子は窓の方を見ながら、静かに、

「窓を」

と言った。すると、たくさんの小さな魂たちが石神の指示で一斉に窓ガラスに宿ると、ガラスをビリビリと揺すって鳴らし出した。ガシャンと音をたてて割れた窓ガラスもあった。次に祥子は、

「灯りも」

と言った。すると会場の全ての灯りが気味悪く明滅を繰り返した。会場の人々は突然の異変に大騒ぎになった。司会の女性は甲高い悲鳴を上げて逃げ出した。仁は、いいぞ、祥子うまいぞと思った。青年実業家は茫然と祥子を見つめたまま身動きひとつせずに立ちつくしていた。黒眼鏡の男は素早く青年実業家のもとに駆け寄り周囲を見回した。祥子が天井を指差して、

「シャンデリア」

と言うと、会場にあった5つのシャンデリアの全てが激しく揺れ出した。すると、黒眼鏡は、

「社長、危険です」

と叫んで、揺れるシャンデリアの真下から外れた場所に青年実業家を連れ出した。会場の真ん中の一番大きいシャンデリアが物凄い音を立てて円卓の一つに落下した。すると、人々は一斉に会場から逃げ出そうとして出入り口は大混乱になった。しばらくすると会場には祥子と青年実業家と黒眼鏡と数人の黒服と、そして隠れている仁の他には誰もいなくなった。

黒眼鏡は祥子に向き合うと、

「お嬢ちゃん、どんな手品か知らないが捕まえて吐かせてくれる」

と不敵な笑いを浮かべ、ポケットからナイフを取り出した。仁は、とっさに床に落ち

ていた高級そうなステッキが目についた。仁はステッキを拾うと、「祥子っ！」と叫んでステッキを投げた。祥子は走ってステッキを受け取ると、黒眼鏡に向ってステッキを上段に構えた。すると、黒眼鏡はナイフを捨てて、黒服の内側から拳銃を取り出した。そのとき、祥子の真上で揺れていたシャンデリアが爆発したかのように数100のガラス片となって飛び散り、祥子に降り注いだ。明滅する灯りがガラス片の1つ1つに反射して宝石のように輝いた。しかし、ガラス片は祥子に当たりそうになるとカーブを描いて落下し、あたかも祥子は見えないバリアーに守られたかのようにだった。ダーンと銃声が会場に響き渡った。仁は目を見張った。威嚇のために祥子の頭上に向けて放たれた銃弾は、いくつもの小さな魂に乗っ取られ、ガラス片と同様にカーブを描いて床の大理石に当たった。銃弾は床に窪みを穿ち、窪みの中で独楽（こま）のように回り続けた。これを目の当たりにした青年実業家と黒眼鏡は異口同音に、

「ば、化け物」

と叫んだ。その瞬間、祥子のステッキが打ち降ろされ、黒眼鏡の拳銃が飛んで行った。さらに一閃、祥子のステッキは黒眼鏡の右足首を横に払った。ゴキッという嫌な音がして、黒眼鏡は動けなくなった。数人いた黒服は散り散りに逃げ出していた。

祥子は、青年実業家と黒眼鏡が戦意を失ったことを見定めると、ふうっと大きな息を吐き、手を振る仁の方に走ってきた。仁は、祥子の手を取り会場を出ると、祥子の母親と祖母を見つけて一緒に連れ出し、めちゃくちゃになったホテルを後にした。帰りのタクシーでも上に石神が浮かんでいたが、誰の目にも止まらなかった。

祥子は、仁と手をつなぎホテルの廊下を走っているとき、この奇想天外な救出劇が仁から祥子への恋心の証しと信じ、いつか仁と結ばれることになるかと歓喜に溢れていた。一方、仁は祥子の歓喜を感じ取り、「やったあ、祥子が喜んでいるぞ、バンザーイ」と心の中で叫んでいた。そして、「あの青年実業家に4000万円を叩きつけて、祥子を自由にしてやるぞ」と叫んでいた。

月曜日、仁は、祥子と共に新宿のあのオフィスを訪れた。石神がまたもやついてきた。あの社長室に入ると黒眼鏡の男が包帯だらけになって青年実業家のそばにいた。黒眼鏡が身構えると祥子は手のひらをピストルの形にして社長室の扉にはまっているガラスに向かってバーンと言った。するとガラスはビシッと音を立てて粉々に割れた。

「ここに4000万円あります。証文を返してください」

青年実業家はあたふたと借用書類1式を持ってきた。祥子は再び手のひらをピストルの形にして青年実業家に向けた。青年実業家が怯えているのを確認すると、手のひらを振って社長室を後にした。

祥子の家で、喜びに溢れた祥子が仁に青年実業家と縁を切ってくれたことに感謝すると、仁は、僕は青年実業家みたいなことはしないから、祥子は自由に僕なんかより素敵な相手と結婚して幸せになってほしい、それが唯一の僕の願いだと言った。しかし、祥子はまたしても思いが仁に届かなかったことを知って、表向きは喜んでいるふりをしながら、心の中ではうちひしがれていた。

火曜日、祥子は会社で幹部からも秘書の先輩からも婚約披露パーティーが台無しになって気の毒だったと慰められた。みんなは祥子と青年実業家の婚約は破談になるだろうと思ったが祥子には言わなかった。誰も会場をめちゃくちゃにした張本人が祥子だったとは気が付かなかった。

祥子は、仁は何故、私の気持ちを信じてはくれないのだろうと悲しみに暮れた。火曜日、祥子は会社を午後から退社し切り株の女性を尋ねた。祥子には他にこのやるせない思いを打ち明けられる相手がどこにもいなかった。秋の終わりが近づき、境内は銀杏の落ち葉が敷き詰められていたが、夕陽の加減で落ち葉は金色に輝き眩しいくらいだった。

切り株の女性は石神や小石に宿る小さな魂との交信により、先日のパーティー乱入事件の詳細を知っていたから、祥子が会いに来たのを喜んで迎えた。そして、

「あなたが話にくいかも知れないから、わらわ、じゃなくって、私は、話し方を変えるわね」

と女性が優しく言ったので、祥子は切り株の女性に急に親近感を抱いた。

切り株の女性は、1000年前にも石神が婚約披露パーティーに乱入して台無しにしたことを祥子に教えてくれた。その乱入事件のお陰で望まない婚約が解消された当事者が他ならぬ切り株の女性であった。そして切り株の女性が本当に結婚したいと願っていたのが石神であった。

「でもね、この物語はハッピーエンドにはならなかったのよ」

と女性は残念そうに祥子に語った。石神は乱入事件でみんなに迷惑をかけた罪で1000年の任期で関東地方に降臨することになり、女性は石神の帰還を待ちきれず、石神に会いたくて関東地方に降臨した。しかし、あの憎き従妹の女性に大木の中に閉じ込められてしまった。そして1000年のお勤めを終えて石神は帰還したが女性が行方不明だというだけであのいまいまいしい従妹の女性と結婚してしまった。

「だから、私はなんで石神は私が石神に会いたくて関東地方に降臨したと考えてくれなかったんだ、なぜ私を探して見つかるまで独身を貫いてくれなかったんだと悔しくて、それが今でも許せないのよ」

そして、だから石神が迎えに来ても、もう結婚なんかしないと石神の申し出を拒否し続けているのだと言った。祥子は、石神さんが女性を連れて帰還するにはしばらく時間がかかるけど、きっとハッピーエンドになるに違いないなと羨ましく思った。しかし、切り株の女性は祥子の方こそハッピーエンドになると思っているようだった。

「あなたも石神の乱入事件で望まない婚約から解放されたんですってね。私たち不思議な巡り合わせね。ても、あなたはハッピーエンドになってね」

祥子は、お金を融通する代わりに婚約を迫った男に仁がお金を返してくれたこと、だ



から祥子は今度は仁からお金を借りていることを女性に言った。仁は、お金で祥子を縛って結婚を迫ったりしないから、仁より素敵な相手と結婚して幸せになるのが願いだと言った。仁には、いくら言っても思いが届かないことを女性に打ち明けた。

「でも、あなたがちゃんと伝えないと、彼はいつか別の人と結婚してしまうかも知れないわよ」

と言った。祥子は、

「そのときは一生独身でいる。あなたと同じね」

と力のない笑みを浮かべて言った。女性の心で祥子の「あなたと同じね」という言葉がぐるぐると回った。そして、自分と祥子と同じとは思わなかった。祥子に比べた自分は子供みたいにつまらないことにこだわっているとわかった。女性は、

「私は石神と結婚するって言うから、祥子も絶対に彼と結婚しなさいよ」

と言い、

「約束よ」

と念を押した。それから2人は長いこと話続けた。深夜になってようやく女性は石神を呼び出した。石神が現れると、女性は約束を果たして石神の申し出を受け入れた。石神は直ちに女性を切り株から離脱させた。祥子の目の前に直径50センチくらいでオレンジ色の泡のように見える石神の隣に緑色の泡のように見える女性が並んだ。そして、あの時と同じように2つの球体は徐々に小さくなっていき、ぽんと空中で消滅した。

祥子は、その日の深夜1時頃に仁の家の前に立っていた。10月の夜風は冷たく、祥子の体はかじかんでいた。仁は急いで風呂を暖め直し、有り合わせの夕食を作り、居間の先の和室に真新しい布団を敷いた。祥子は無言のまま、風呂に入り、夕食を食べ、布団に入った。仁は怖じ気づいていた。和室の照明を消した真っ暗な中で、祥子は、なぜ私の気持ちが分からないのと仁に詰め寄った。仁は、青年実業家と同じような卑劣なこととはしないと言った。祥子は、あなたは馬鹿よ。あなたはあいつとは違う。あいつは4000万円を出してもお金がうなっている。あなたは4000万円出して借金だらけよ。借金だらけのあなたと結婚したがる人が、お金目当てのはずがないじゃないのと言った。仁は、はっとして自分の馬鹿さ加減にやっと気付いて愕然とした。祥子が仁を愛し、仁も祥子を愛していたのに、仁は祥子への気持ちを勝手に封印し、不幸への道を正道と思って自己満足していた。仁は足りない頭だけで考えて、祥子の気持ちも自分の気持ちも踏みにじっていた。仁は、祥子の真摯な愛に怖じ気づいて、祥子を本当に愛する勇気がなかったことにやっと気がついた。それでも小さな祥子はめげずにこうして仁に会い

にやってきた。祥子の愛の力強さ、自分の愛のひ弱さを思うと、仁は身がすくむ思いがした。しかし、仁はついに勇気をふるい起こした。祥子の一生のすべての1分1秒に責任を持つ覚悟を決めた。その夜、仁は祥子を抱いた。あの軽い雄一が言った男が男になる決定的瞬間の重さを仁はかみしめた。その上で、仁はその重さを受け止める自信が体中にみなぎってくるのを初めて感じた。そして、祥子は初めて嬉し涙を流した。

あのホテルのパーティー会場から銃弾が発見され、ホテルの事件は、青年実業家の配下の黒服の男たちの内輪もめが原因ではないかと警察は捜査した。仁の父親は黒眼鏡の男が寿司屋にタカリに来たと証言した。青年実業家と黒眼鏡の男が証言した祥子の奇想天外な行動については、覚せい剤による妄想とされて相手にされなかった。

仁と祥子は結婚して仁の家に住んだ。祥子の母親と祖母も仁の家に住むようになった。一方、石神も天で幼馴染みの女性と結婚した。幼馴染みの女性が石神に祥子の悩みを伝え、石神はあることを思い出したといい、再度降臨してきて、仁と祥子に青い石があった場所を深く掘れと告げた。祥子は石神に、仁と結婚したことを女性に伝えてくれと頼んだ。仁と祥子があの青い石があった場所を掘りかえしてみると、果たしてボロボロになった小さい木箱が出てきて、中に小判が150枚ほど入っていた。2人は警察に届け、半年たつと半分が2人のものになった。それを売却すると5000万円ほどになった。仁と祥子は相談して、祥子の父親と母親を呼び、両親に返すと言って4000万円を2人に渡した。両親は相談し、母親は4000万円すべてを離婚した父親に渡した。祥子の父親は、アスナの家と仁の家にたびたび来るようになった。祥子の両親はよりを戻したかに見えたが別居を続けた。

アスナと雄一はバツイチ同士で結婚して、アスナの家に住んだ。アスナは出版社や雑誌社を相手にした今までのライターの仕事は止めたが、書くことは止めなかった。以前、シェアハウスのライター仲間が集まったとき、アスナの母親は先輩としてこう言った。

「ライターで大事なことはとにかく書くことよ。あなた方は書くことがなくなったとか、書くことが浮かばないとか、しばらく充電が必要だとか言うけれど、それはライターではなくてアマチュアね」

アスナは、それまでは宵っ張りの朝寝坊だったが、母親と同じように早寝早起きをするようになり、朝の1時間だけインターネットに向かって書くことが新しい日課とな

った。

雄一は雄一を気に入ってくれていた取引先の社長の紹介で、雄一の会社が開発に協力した新素材を使った衣料品を製造・販売する会社に転職した。新しい衣料品は安く軽く暖かく、そのファッション性もあいまってたいそう売れて、雄一はてんてこ舞いの忙しさとなった。その後、道場にポツポツと門弟が増えて、雄一は喜んだ。アスナは雄一と結婚して、雄一がアスナの知り尽くしたいつもの雄一に戻ってしまったと思った。父親に試合をさせたあの意外性はどこに行ったのかと少し残念に思った。

時代に翻弄された若者たち。未来は過去の延長にはない。出口が閉じられたようであっても若者たちは知らない間にそこから脱出する力を身に付けていた。